

川柳塔

昭和六十二年七月一日発行 毎月一日発行
創刊大正十三年 通卷七 二二号



日川協加盟

No. 7 2 2

七月号

麻生路郎二十三回忌 麻生葭乃七回忌

中島生々庵一周忌

追悼川柳大会

日時 昭和62年7月5日(日)

会場 高野山 普賢院 TEL 07365 (6) 2131

高野山駅前からバス(大門行又は奥の院前行)
「千手院橋」下車すぐ

◆法要 (法要に参加される方は前日からお泊り下さい)

◆川柳大会

お話し	金剛峯寺第四百六世座主	森 寛 紹 師
兼題	「水草」	山内 静水 選
	「福寿草」	高橋 操子 選
	「金魚」	野村 太茂津 選
	「畳」	小松原 爽介 選
	「大空」	去来川 巨城 選
	「書齋」	礪野 いさむ 選
	「二階」	西尾 栞 選

各題2句 締切1時(投句拝辞)

会費 3,000円

□前日観光 4日午後1時高野山駅前集合(貸切バス)
女人堂—大門—金堂—菴堂—奥の院—普賢院

□宿泊 普賢院 7,000円

◎前々日大阪宿泊を希望される方のために宿舎を用意してあります。

大阪弥生会館 大阪市北区芝田町2丁目4-53

大阪駅中央口を出て北へ歩いて5分。JR西日本本社(元大阪鉄道管理局)
北側。電話(06)373-1841㊦

<申込先> 泉佐野市中庄1081-99 阿萬萬的
電話(0724)63-4112

◎南海電鉄時刻表その他詳細をP.66に掲載必ずご覧下さい

主催 川柳塔社

やつこゝゐ

西尾 栞

雨後の筍のように句集ブームである。俳句も短歌も、多聞にもれない。

このたび発刊された岡山県大原町の住人、土居耕花氏の「やつこゝゐ」がすっかり気に入った。読む程に、そのたくまざるユーモアに兜を脱いだ。当社には、曾て須崎豆秋という川柳の一茶と呼ばれるユーモア作家が居られたが、第二代と称しても遜色のない好作家である。

氏はさきに昭和四十五年十一月に句集「笹の花」を発刊されている。序文は塔社同人参事の本田恵二朗氏で、今回の「やつこゝゐ」も同氏である。

風鈴が止まって猫がたち上り
口笛に反対側の窓が開き
手切れ金取れと近所の力こぶ
サンマ買うのにぶりなどの値をたずね
へそ或る日自分の職を考える
溝巾と足の長さを考える

相談が火箸一本ずつを持ち
探してる鎌とは違ふのを見つけ
家内中竿に並んでひるがえり
紙屑が前を走ってゆく寒さ
バラバラとめくつてもこれだけの句が
目に止まる。以上は「笹の花」の句集からである。

「やつこゝゐ」から

香奠は親父がすぐに取り返す

この頃香奠というと最低壹万円である。昨日も今日も福沢さんが紙に包まれて出て行かへった。我が家は出すばかりである。然し親父は八十幾歳である。すぐに取り返してやると息子と嫁の対話である。

喧ましい父は深うに埋めてやる

まだ土葬の地方もある。

神様に勿体なくも痔をたのみ

精虫の一疋だとはなさない

号令のマエニススメに蟹迷い

鈴もらいミカンをもらい二度童子

弔いの鉦を迂闊に七拍子

老婆にときどき足を触れて寝る

二次会で借りているのと差し向かい

手洗いのスリッパはいて酔っている
吊り皮の女が降りてホツとする
土塊を我が田の方へ蹴っておく
コオロギよお前も一句考えろ
猥談を女聞こえる位置へ逃げ
粗品と書いて粗品が持つてゆく
お膳からうまれたことにしておこう
洗濯機の中で夫婦が戯れる

坊さんのオモチャに木魚おいてある
まだまだ限りなくあるが紙面の都合で
割愛す。そして句集の末尾の履歴という
欄に

履歴書を書いたら馬鹿がみなわかる
と書いて、すましていられる。「笹
の花」のあとがきに、俳句を良くされた
叔父の南石さんと、和歌をくらしの友と
されたお母さんから文学愛好の血をうけ
たとある。

なるほど句集「やつこゝゐ」は既に残り
少ないと聞いている。うべなる哉である。
九月二十日(日)には、大原で発刊記念川
柳大会を開催される予定である。挙って
参加されることを切望する。

宙返りする奴隷にある主張

栞

座右の句

悪人も座る仏の掌の広さ

(一男)

私の句

朝帰り理由の種が切れている

一瀬 福一

川柳塔 七月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

「やつこ風」

旅と三先生

川柳塔(同人吟)

自選集

■川柳太平記(110) 川柳の群像 中島生々庵

■連載 誹風柳多留廿六篇研究(三十一丁)

水煙抄

秀句鑑賞

同人吟
水煙抄

愛染帖

へ女性コーナー 茴香の花

追悼川柳大会に寄せて―路郎・葎乃・生々庵三先生を偲ぶ―

西尾 葉 …… (1)

正本 水客 …… (2)

西尾 栞選 …… (4)

東野 大八 …… (32)

黒川 紫香選 …… (34)

橋高 薫風 …… (53)

月原 宵明 …… (57)

橋高 薫風選 …… (54)

小出 智子選 …… (58)

…… (60)

旅と三先生

正 本 水 客

もう何年ぐらい前のことになるだろうか、路郎先生と岡田某人君(故人)と三人、句会出席を兼ねて尾道で下車、麻生家のお墓があるお寺へ詣でて、お墓のまわりの草を掃除してから小半時、三人で黙って瀬戸の海を眺めていた。何時頃の事で何というお寺だったのかハッキリしない。海の色だけが幻のように浮かんでくる。

昭和24年の春、西日本鉄道人川柳大会が麻生路郎、岸本水府、楳元紋太の三先生の出席を得て城崎温泉で盛大に催された。当時、路郎・水府の両先生はライバル意識が鮮明で、親しく口を利かれることもない状態だった。それだけにお二人が一堂に会されるのは画期的なことだった。席も両先生の間には紋太先生の席を設けて緩衝地帯とするなどの気の使いよう。当日、路郎先生は体調を崩しておられ、代行したと覚えている。

緑之助・甲吉・奇童・文庫・柳宏子・メ女

恵二郎・千翁・由多香・花子・太茂津

高野山とどこどころ

安藤寿美子

鑑賞「やっこ風」(土居耕花川柳句集)

田中正坊

寸又峽と静岡川柳会訪問記

松川杜的

藤後実男氏を悼む

保西岳詩・吉原紅月

初步教室

阿萬萬的

「現実」

森山盛桜選

一路集「グループ」

小池しげお選

「仕事」

保西岳詩選

柳界展望

(74)

本社六月句会

(77)

各地柳壇(佳句地10選/山下みつる)

(81)

■路郎・葎乃・生々庵追悼川柳大会(案内) 66

■7月各地句会案内 95

■編集後記 97

座右の句

咲けば散ることをひたすら書いている (千代)

私の句

摺鉢の底を今昔ものがたり

江原とみお

弓削の大会に路郎先生、生々庵先生など大挙して出席したことがあった。路郎先生は有名なお天気男、生々庵先生は人も知る雨男、列車が目的地に近づくとつれて今まで晴れていた空が俄かに曇ってきた。「天の神さまもなかなか気を使ってやりますなあ」と言う私の言葉に、きつい事を言いよると生々庵先生の笑い声に連れてみんなの大爆笑になった。紫香、潮花と三人で生駒のお宅へ葎乃先生を訪ねたことがあった。葎乃奥様用の一本をぶら下げて、お茶だコーヒーだと度々席を立たれるので、お願いですからジッと座って下さい、お話が出来ませんと顔を見合せて大笑いになった。葎乃奥様は前から信州の旅に行きたいと言っておられたので、紫香君と何時か御一緒にしようと言えぬ約束をしていた。なぜ信州にこたわっておられたんだろう。前に路郎先生とお二人で信濃の中島紫痴郎さんを訪ねられたのが心の隅にあったのかしらとふと微笑ましく思った。

三先生の私の好きな旅の句を掲げて締め括りとした。

遠く来て信濃に山のない日なり 路郎

朝立ちの膳奈良漬の音をさせ 葎乃

子約して和室和室と母の旅 生々庵

川柳塔

西尾 葉選

松江市 恒松町紅

三日目になると誓いがぼけてくる

片手鍋出会いのドラマ持つ夫婦

二の腕にまだある余力老いの鍬

老い達者五月の風へ手弁当

弾の下くぐった話風化する

暗闇で人に出会ってからの運

八尾市 高杉鬼遊

おんなから遅れて届く花便り

吉兆も飲み屋も同じ靴でゆく

高いコメ買わす能のない政治

通夜に来て他人がビールなど指図

人の世に無知なることの哀しけれ

たこやきがうまいと思う生きている

大阪市 西出楓楽

目のうろことれたら諸行みな無常

背信の投げられた石投げかえす

人生にサブタイトルはつけずおく

過ぎたことばかり話して負けている

差別語を避けてぎくしゃくした会話

ビニール傘軽い男を軽くする

弘前市 波多野 五楽庵

ネクタイをしても訛りのとれぬ鬼

茶筌から作法どおりの湯気がたち

ファッションが気になりだしたふくよかさ

プロポーションだけで女はつとまらぬ

主義もたぬ男が先に酔いつぶれ

風車ある日突然風が病む

岡山県 土居耕花

鼻水が落ちてもエイズかと思う

近頃はどれも冴えぬと水すまし

猫の恋随分手間が要るらしい

スッポンの葉が効いたことにする

お悔みて禪問答をして戻る

弔いの花輪数えている他人

熊本市 有働芳仙

子の視線外すと積木崩れ出す

逢いたいと電話をかけてこないかな

膝小僧抱くと故郷が近くなる

逃げる手もあるが碎けてみるもよし

今の娘を口説ける自信がありますか

童心にかえる夜店の金魚鉢

堺市 高橋千万里

春うらら小皺をかくすサングラス

仕掛人の頭上に火の粉舞い戻る

告げ口を情報にして持ちかける

散る花にきくさりげなく散る心

立ち話マンションは今全自動

これはまあ不便故障の自動ドア

奈良市 宮口笛生

何をすることも無いのに早よう起き

夜が明けたら寝ては居れない無職です

とれとれの苺が甘い子供の日

気ばらしに温泉行きの切符買う

修学旅行五月の仏乾き切る

晴天が続く五月の観光バス

倉敷市 野田素身郎

それぞれに事情があつて墓荒れる

降水確率零なのに蟻よ何故急ぐ

風薫るベンチへ僕だけが一人

いい天気ですよと無職掃き出され

選挙ポスターしみじみと見る時間待ち

連休をどっちか言えば寝ていたい

桜井市 岩本雀踊子

ゼニのいる話に身内集まらぬ

あれからの便りをくれたかぐや姫

健忘症にかかった春の伝言板

だといって妻を憎んだ事がない

きのうの言葉が拾えない男

つまずきの痛み人生曲り角

兵庫県 遠山可住

霧島つつじ真つ赤に留守をもてあます

風邪で寝て少しお経も憶えんか

第一印象のまま還暦へ来てしまい

ほほえみも仕事の内になる女

かたくなに変体仮名のまま老いる

絵が画けるこんな余生のありがたさ

和歌山市 西山幸

桃熟れて慎み深くなつてゆく

播粉木も試行錯誤をくりかえす

いつからか破調が続くかぞえ唄

決心へ神も仏もそっぽ向く

おとし蓋結論はまだ早すぎる
美しくかしこと書いて訣れよう

島根県

小砂白汀

こんなときおっとり構えていて欲しい
くみし易しとふんだか隣へ腰をかけ
偵察に來たのがうっかり引っかけ
標的にされる抜けがら持ちかえり
人違いされるも嬉し一人旅
退職金恩給勲章官吏どの

松江市

舟木与根一

陽当りが悪く寝過ぐす蛙かな
粉薬上手に飲める不仕合わせ
減塩で神経科にも診てもらう
神さまの授かりものに妻が居る
ふた言目には親と子を確認し
世は太く短く外車乗り回す

松原市

谷垣史好

路郎忌や視野遙かなり高野杉
薄着する勇氣わたしもニッポンも
電卓の哀れ粗品となりにつけり
もみあげが気になるバスの運転手
安らぎはアカンタレにも日が暮れる
そつとしてあげたい僕の前節子

和歌山市

福井桂香

愚痴言えば青葉若葉にわらわれる

あじさいの花の涙はむらさきか
良心まで隠せはすまいサン格拉斯
ときめきが欲しくて赤い靴を買う
背泳ぎでラッコの哀れくり返す
父の日もまたデパートに踊らされ

和歌山市

福本英子

七十五日過ぎた噂とたんぽぽと
色眼鏡で愛を計っていませんか
宴果てて哀しい言葉落ちている
交わった方の朱色が汚れている
靴の紐結んでる子を見ていよう
票読みに握手の数を入れた悔い

岡山市

川端柳子

空想はたのしわたしの談話室
さばっても病んでも歳月待ったなく
春の絵のどれにも孫は当てはまる
下り坂うっかり返事出来ません
ではあした明日ささやく幸がある
似たようなお話泡の三つ四つ

倉敷市

小野克枝

人生を語るビールの泡を吹き
本心を淹の前なら話せそう
神様に思い違いを論される
故郷に立って寿命を引き伸ばし
少しおくれで笑う男を夫と呼ぶ

漬物が美味しいという娘が二人

伊丹市 榎谷寿馬

来年へ首捧げたりチューリップ

床に武者胸に五月の男児抱く

タヒチに憧れひまわりの苗を買う

古稀祝うグラスの余りにも薄き

シャンデリア睨みつつ飲む降下剤

すばらしき同居のモラル三世帯

宇部市 平田実男

娘にかけるダイヤル指が覚えてい

淋しさは報恩という字が風化

退化した舌はおずきを持て余し

ゴールデンウィーク掏摸にも空巢にも

神主の子が落ち神様苦笑い

京都市 松川杜的

院展の余韻へ溶ける角砂糖

字に書いても女と言う字むずかしい

女房とやゴキブリ捕りも堂に入り

記念切手には記念切手で返事出す

肋木がアルバムの母校に未だ残る

JRと書き替えただけの切符です

大阪市 津守柳伸

佳い話だけ信じ切る右の耳

少し甘えて産寧坂の髪かざり

さわやかな眼覚め五月の花盛り

糖衣錠はなせぬ女と深夜族

再会の言葉途絶えてまいる風

ひと皿を先にとつとく母の癖

八尾市 宮西弥生

よい夢を見たさに想う好きなど

仕事も好き女も好きな管理職

五月晴れ夏には早い水の旅

父の雲母の雲の下で深呼吸

表札は男名前の聖地なり

指折り数えて待つうれしさがまた戻る
和歌山市 松原寿子

業の掌から発つ振り出しの海がある

あなたという添え木があつて薔薇の朱よ

ひとときの素敵な罌よ蜃気楼

チェックアウトの背ながら強い雨になる

火の怖さ水のこわさよ愛一途

距離おいて愛するなんて綺麗ごと
尼崎市 春城 武庫坊

昔話の無い街に住むあわだち草

春風に花の言葉を見失う

雁首を並べて読めぬ句碑に佇つ

楠若葉孫の嘘にはのつてやる

ネクタイをゆるめて坐り本音吐く

耳鼻科から出て七月の風に酔う

尼崎市 春城年代

自画像を描き直してゐる泣き黒子
どれほどの余命か時計狂い出す
受話器から聞かせてくれているピアノ
チャンネルを変えるとぬけるような空
目覚しが鳴ったらきょうを思い出す
姑連れて旅のお供も老眼鏡

島根県 堀江正朗

笑ったら済むことだった僕の役
闇無限 掌に触れるもの幸として
頼る手がある幸せをくすぐられ
懸命に箸が動いている美味さ
一言に老いのやすらぎ貰うとき
この風の記憶は遠く胸に生き

島根県 堀江芳子

胸はって従いてく私は白い杖
雲が行く風に押されるごとく行く
想い出にひたれば星もまだはたち
一合に抱かれた寝息七十五
こんなとき嘘つきごっこする女
爪切っただけで気分をかえる風

藤井寺市 吉岡美房

茶柱の立った位の幸せさ
牡丹咲く寺大らかに門開く
砂時計少し狂った仕掛人

命より金それも一つの生き方さ
妻もなし金なし犬に住みつかれ
祇尊の掌の中逢うも別れるも

米子市 林 荒介

お祈りを何遍もする泥の舟
公園に今日も出掛けたお父さん
紙カブト父は喜劇の中にいる
美しい出合いと思う長い堀
カスミ網やがてやがてと黄昏れる
靴下を脱いで話せる友の部屋

豊中市 田中正坊

一門の末座にわれも不死鳥忌
モチーフのない自画像を描いている
パレットに気ままな彩がある余生
平服というから困る披露宴
思い出ははるかシベリアジャワビルマ
六十路坂足つよき友よわき友

弘前市 田中 叶

吹いて来た風に吹かれる蟹の泡
タクシーを待たせ岬に立つ女
トラックの走る夜明けを歩いている
父に似た人が少女を待つホテル
家政婦がまだ切りそうにない電話
起きている妻のコップも持って来る

下関市 石川 侃流洞

ご自由にどうぞと女房荒れ模様
女房の後押し当てに牽く車
千代紙を貼って少女夢を入れ
通ぶって素うどんばかり食っている
追越禁止窓際すでに停年期
酸欠で喘ぐ男の八合目

岡山県 嘉数 兆代賀

大型連休わたしは今日も地下をはく
親切な言葉遣いに欺される
堪忍袋を亡母のかたみと抱きつづけ
こつこつと倅せを追う芹なずな
苦勞した過去は語らぬ冬薔薇

平田市 久家 代仕男

情性とは手押し車のくぐり坂
生け垣を覗く麒麟の首になり
猿芝居なにも知らぬと思うてか
忙中の閑妻の手を借り挿芽など
生姜摺るあまい男にならぬよう

竹原市 小島 蘭幸

決断の雨が小さく降り続く
妻子放つ雨のデパートにて候
みどりの中をゆつくり歩くのは夫婦
いつか妻と肩を並べてみる夕陽
生きようと思う郵便受けの赤

竹原市 森井 菁居

行列を乱さず蟻のミーティング
ハッスルをしても五十に急な坂
セールスがジョークを盗む新喜劇
俺も男さ前編へ火となりぬ
グイエットシュガーに皮肉が詰めてある

米子市 小西 雄々

雑巾が乾くと意気も沈みがち
スマイルへ急ぐ心をもてあまし
愛情の文字ほのぼのと封緘す
見ぬふりもする公園のパトロール
亡父の忌がめぐると揺れる蕎麦の花

米子市 林 瑞枝

盛夏いま音無く廻る走馬燈
ひとすじの愛が収めてある小函
片想いのまんまスイートビーの鉢が売れ
卑弥呼いま舞い降りそうな茜空
浜っ娘が風船割りのトッパ切る

米子市 野坂 なみ

五月晴れ蛙がにぎるパスポート
日暮れ道仁王の意気に佇ちつくす
先頭の耳に足音離れない
その時は私の捨て石打つつもり
爪をとぐ事を忘れた檻の中

米子市 青戸 田鶴

湖も恋の季節を知っている

去る人は去り北壁は人よせぬ

あの時はあの時反古にした誓い

あこがれたはずの自適にせめられる

馬鹿話聞いて大きくなった耳

米子市 政岡 日枝子

我が儘を言うなら骨は朱の箸で

陽が翳る時も笑っているあなた

土曜日は鏡もウキウキしているぞ

徐々にふやすと致死量になる薬

母の文化はかっぱう着からすすまない

米子市 菅井 とも子

かたつむり意気込みだけは持っている

少しでも歩かせようと杖になる

鰻重も残して老いの桜狩り

先輩に得意な顔は見せられぬ

赴任地の出会い檜山までつづく

米子市 寺沢 みどり

湖も春の台詞で満たされる

葉ざくらの下の逢瀬は女連れ

道づれの欠伸をもらう春の午後

友達に女神のいないのも幸か

若やいだ亡夫と出会った森の中

寝屋川市 江口 度

母娘ともトンボ坐りで花を活け

片眼つむると居ませんという電話口

桜見ている柿の葉寿司を食べながら

ふりあげたこぶしが澄んだ瞳にであい

ひもろぎの鏡が光る満願日

寝屋川市 柴田 英壬子

古いブームのぞみを持たず本が売れ

一泊の鯨を食べにゆく誘い

おつかれさま萼紫陽花の笑みにあう

留守番の夫新茶が減ってない

不参加は罰金を科すみぞそうじ

寝屋川市 稲葉 冬葉

さびしくて衝動買いをして見ても

あなた好みの専業主婦になると言う

日溜りへクロワッサンを味方にし

人を刺す指が太くて眠れない

外は雨下手な演技のコマーシャル

寝屋川市 岸野 あやめ

本宅の坊ンは揃って遊び好き

老人ホーム童女にかえる手毬唄

会う縁もわかれる縁も風の中

咲き誇るすべは知らない風媒花

明日を待つことも教えてくれた亡母

大阪市 西森 花村

軍服の写真しかない死んだ子の

食べるもの食べ切り留守番時計見る

もう無理を言わぬ病人気にかかり

春はよし濡れて帰るも一人なら
その割に背丈の伸びぬ武者人形

大阪市 河井庸佑

打った手が逆に逆にと出る落ち目
こけた子をひとりで起こすのも蟻
身勝手な親へ子どもが眼が厳し
連休のお疲れ休み欲しい親
居直って別の人生考える

大阪市 江城修史

生かされて命の重さ増すばかり
負け犬に重い明日を背負わせる
いたわりの言葉が重荷となる暮し
楯となる妻に疲れの影がみえ
夢ひとつ風化はさせず子につなぐ

大阪市 黒田真砂

紅の彩明るく変えて初夏の街
少しうつになつて飛べない春の蝶
夢を追う日々で女の血がさわぐ
春風のいたずら仮面飛ばされる
赤ピンクにまだ未練あり服選び

大阪市 藤田頂留子

平野連歌復興連座して(四句)

見学も連衆の顔してて並び
朗詠をなつかしく聞く歌仙額
実作に聞きのがすまいペンと耳

奉納連歌よくぞと嘉納さるる神
太鼓台新装亡兄も嬉しやろ

大阪市 神夏磯道子

太陽を拝めば力湧いてくる
傾きかけた帽子を妻がすぐ戻す
自分では見えない面を嫌われる
清く正しくすぐに敬遠してしまふ
お隣の時計は五分進んでる

大阪市 柳原静香

ふる里の山が恋しい柏餅
何日か来る墓地温める陽の恵み
ひとり言膝の子猫が聴いてくれ
えんどう豆母と娘にある会話
癌検の門出て仰ぐ五月晴れ

富田林市 藤田泰子

生きている証し煩惱の火は燃える
従順な質盆栽にされている
過去のこと想うと顔が紅くなる
自己診断食べれるうちは大丈夫
病室の華やき少女の見舞客

富田林市 田形美緒

アボカドの欺瞞を食べるトロに似て
精進を食べる仏の縁にふれ
捨てる人拾う人あり空の缶
合理主義今日も手抜きを考える

山門のつつじが燃える父の忌よ

倉吉市

奥谷弘朗

鳥取県

川崎秋女

年輪の光る無口の父が好き

父として誓う言葉を考える

くさっても鯛と言われてみたくなる

駆け引きのある忠告はただけず

育てても父と呼ばない子に困り

倉吉市

渡辺独歩

鳥取県

新家完司

突極の願いはいとも安楽死

五体投地祈りは大地貫くか

公園で堪忍袋をふくらます

雑兵の出会いに兵法いらんぜよ

結び目は三途の川で解いておく

鳥取市

両川洋々

鳥根県

西村早苗

妻の癌隠す嘘なら許されよ

親バカの積木くずしが笑えるか

先輩も解けぬ恋の方程式でした

青年の樹は北風が好きなのさ

棺開くと女はきつとまだしゃべる

鳥取市

森田熊生

鳥根県

榊原秀子

言い訳を考えている固い道

殴り合いた友情がまだ続き

シャボン玉屋根まで飛んだ自信持つ

がんこでもいいから父の固い椅子

毛虫ゴソゴソいつかは空を飛ぶ自覚

選挙戦よそ目に白い梨の花

弁当づくり終えて忘れた卵焼

木の芽和え好きだったひともういない

つつじ満開ちようちよも蜂も恋をする

ふるさとへ残した母へ会う列車

鳥根県

榊原秀子

鳥根県

錦織文子

またそつくり撮れている不満
ほどのぜいたくという青畳
自分の外は他人に見えるさくら草
尺取虫確かな日々のある安堵
許しましうよ昨日はもう昔

松原市 玉置 重人

父の背がこんなにまるい哀しさよ
繁華街不況だそうないだおれ
割り切つて聞いているのは第三者
囚われの私に白樺が光る
抱く方の衣裳も作る宮詣り

松原市 佐藤 藤子

横顔の寂しいひとは憎めない
煮凝は恋し逢えない日がつづく
夕焼け空ふいに息子にあいたくなる
たとえばの話で人を笑わせる
だまされておくのも生きかたのひとつ

京都市 山本 規不風

おろおろと独りで置けぬさくらんぼ
枕屏風を女幾たび置き変える
軽いジョークで許されている二枚舌
人妻が欲しい雷虹に消え
立聞きの耳満月に照らされる

京都市 都倉 求芽

他人様は爽やかな初夏僕は風邪

母老いてタオルの緩いしほりよう
馬鹿なこととしてはドリリンクに頼つて
初恋の女が幹事のクラス会
れんげ畠ゆく特急の窓開かぬ

唐津市 仁部 四郎

綾取りの順を狂わす昼の月
犬釘は妻が後から打ちに来る
犬釘を打つ雑兵の革命歌
仕合わせは欠伸の合間にきた電話
栄転の椅子体温を保存せず

唐津市 久保 正敏

生真面目に勤めて鍵の数が増え
釣り上げた費用は書いてない魚拓
日本を罵る国のノイローゼ
連休がとても嫌いな籠の鳥
嫌い抜くためにも女化粧する

唐津市 田口 虹汀

忘れたいために飲んでる酒なのに
美しい恋へ不倫というシール
無届けじやないぞと日記繰つて見せ
二人共狸で何時も平和なり
長の字がつくと寝ぼけた声を出す

唐津市 浜本 久仁於

鉢の木にあれど我が家も植樹祭
お手植の松も昭和の中で老い

鉦山の灯と消えた五月の労働歌
現実へじつと手をみる人ばかり
人脈へ金のない奴ばかりいる

松江市

柳 楽 鶴 丸

均等法女の児にも鯉轍

風呂敷残業ゴマすりの上手な男
買売と書く中国のお国柄

忘れた時には年のせいにしておこう
気分最高何を食べてもうまい

羽曳野市

榎 本 吐 来

根廻しの通りにトップ握手する

離婚した女がリードする会話

痛いところ突いて突かれてはずむ酒

嘘一寸混ぜてふくらむ宵の酒

馬鹿になること忘れてたオクターブ

羽曳野市

田 中 隆 二

これきりの人だと思ふ夢が醒め

風の街少し甘えてみたくなり

一日の絆をつなぐレモンティー

五月晴れ単身赴任少し馴れ

傾いた心へ札束見せに来る

名古屋市

越 村 枯 梢

阿弥陀経も阿呆陀羅経もあって娑婆

たんぼの綿毛方向音痴の風に乗り

生き残りの蠅よ私も生きのこり

千両万両彩づく庭で素寒貧
拳の中の小石出番を待っている

倉敷市

稲 田 豊 作

ふる里へ錦に優る子連れて

新社員今日から飼育のバツジつけ

相談の相手に神を選ぶ父

棒切れを持つと蛇より強くなる

憎々しいものにエリートの間笑

美禰市

安 平 次 弘 道

目の保養くらしに遠いゼロの数

花吹雪めしべは既に妊りぬ

慢心と風船いつか割れるだろ

貧乏神にお伽話が通じない

見つからぬ割り符独身主義にされ

笠岡市

松 本 忠 三

出来心なんて心があるかしら

お行儀がよい外孫で他人めき

肥りますけちで言うのでありません

ご希望に添います高が知れたこと

襖ごし聞こえよがしの声がする

西条市

片 上 明 水

自販機で買える切符の里の位置

ライバルの強さ花輪の数で読み

米作る他は知らない父の腕

触角が先ず逃げ道をたしかめる

お祝いの言葉スラスラと出る

豊中市 安藤 寿美子

雨雲にあつかましくも棕櫚の花
悪口のボキヤブラリーが足りません
何しても失敗コーヒーがぬるい
足すことも引くこともなく日が暮れる
敵前逃亡にも似て今月もサボる

堺市 藤井 一二三

上村六平氏を悼む

追憶の笑顔が覗く青葉越し
白拍子平安を舞う宛若葉
気がかりは女房が急に光り出し
コーヒー茶碗の白さに新婚覗かれる
芍薬のおんな独りの庭に咲き

和歌山市 内芝 登志代

嫁がくる畳も障子もピーカピカ
遠慮して大事な運を取り逃す
子沢山と子無し互いに同情し
究極の祈り素足の百度石
お手玉を縫って老母の余生かな

西宮市 林 はつ絵

私がわからなくなるペンの先
ある日母仏を借りてゆずらない
雨期を待つ草の無言がおそろしい
からすうり目立たぬ花の頃があり

何となく寄った画廊で逢う天使

西宮市 西口 いわゑ

父よりも伸びた息子とビヤホール
酒だるがあると安心して眠る
呑む話だけで相好くずしてる
巢立たせて祈りの深い母になる
読み終えた本に押花しておこう

東京都 増田 次章

旅が好き帰るわが家の居間も好き
五十過ぎ善意の無力かみしめる
いつからか勤勉悪の仲間入り
ドック入り延期体調悪いから
遺産ない兄弟八人仲が良く

兵庫県 辻 文平

七曲り埋める夫婦のルーレット
働いた汗が仏の貌にする
朝飯が旨くて喜寿にあるいくさ
自画像にちよつと描き足す笑い皺
先走る嫁にほとほと草臥れる

守口市 羽原 静歩

山頭火風の中から風に消え
幻の軍団が行く雲の峰
素晴らしいピカソの前に跪く
アメリカは勝手な勝手なお友達
温習会女の性をちらつかせ

岸和田市

古野 ひで

亡き父の肩書き生きてる風にあう

真似してもやっぱり亡母を越せませぬ

連休に行くあてもない身をかこち

風薫る五月の空に嘘つけぬ

鯉のぼり宇宙遊泳夢に見る

玉野市

小谷 仙山

海鳴りがやんだら猫の仔捨てにゆく

まき餌ばかりして本心はまだ迷い

笑うものは笑わしておくねぎ坊主

旧暦の鯉なつかしいバスの旅

今にして思えば馬鹿は僕だった

今治市

矢野 佳雲

陰膳の主が戻った祝い膳

そつと腕抜いたつもりが目を醒まし

年金の暮らし鈍行切符買う

隙のない男にあった女ぐせ

声変りしてから父の声になり

大和郡山市

岸本 豊平次

山寺で妻の友人よくしゃべり

一城の主になれと武者飾り

小児科で親の判断叱られる

年頃がいて又電話話し中

葉桜に西行の塚風薫る

出雲市

吉岡 きみえ

今日もまたカラスの勝手聞いている

小心の男窓辺に席を替え

値引きする役目に姑呼びだされ

逃げ言葉今日の余白にためておく

形のいい鼻は嫁方の血をもらい

東大阪市

崎山 美子

出稼ぎの耳にうれしい故郷なまり

リハーサル何度も重ねてきた自信

サングラスちよっぱり冒険したくなる

晴れがましい席にまごつく老い二人

幾山河越えて妻の座晴れの席

七尾市

松高 秀峰

欲捨てて第二の人生やり直す

円高に足を取られて転ぶ破目

ライバルの意識を捨てた通夜の席

曲がるまで母の見送る子の車

本音吐く女に男騙される

河内長野市

井上 喜醉

盃の情けを知らぬコップ酒

公園の鳩もびっくりラブシーン

ひと皮を剥けばやっぱり妻の見栄

づばらやの看板泳ぐ新世界

天国へ菊がお供の父の旅

円高で宝石買える風に会う

福岡県

横地 雅風

ライバルは自身だ徹夜の茶を啜る

歩け歩けポストは遠い田舎町

善人に呆けて老父の空財布

生き甲斐はどう思われようと好きなこと

五所川原市 加藤 彩人

陽の恵み津軽を一拳に春とする

土くろうみみずも春の土が好き

働いた汗が真っ直ぐ溶ける酒

法悦の海でカマキリ身を捧げ

姉嫁ぐリンゴの花の果てを行く

富田林市 板尾 岳人

菜種梅雨キリンの首が長すぎる

ときどきは亡母の乳房を敲くべし

雨の日に傘を忘れた辻地蔵

旅に出て戦さの話せぬように

空梅雨に雁字搦めの村の池

大阪市 天正 千梢

ゲーム疲れレンゲ畠がお気に召し

ある日ふと自分の影がこわくなり

言葉などいらぬ天平の息吹に包まれて（唐招提寺）

振り向かして見せるジャンプ台に立ち

大阪市 本間 満津子

遠い子に電話でカーネーション貰う

友達へ一番先にうち明ける

お陽さまが見ていて下さるそれでよい

風上で見物保険のことに触れ

今治市 越智 一水

風潮に乗せられ安全とはあわれ

中道というごまかしに乗るものか

おろかなる愚痴と知りつつ愚痴をはき

大いなる夢雨だれの首へ抱く

大阪市 北 勝美

難聴の所為かも知れず喜寿迎え

人の世に背中合せに法と情

くらし向き銭かね別に冷奴

痩せ枇杷の種の大きき恥じている

大阪市 長谷川 春蘭

子を叱る娘のしぐさ母となり

このあたり覚えある道緑ふむ

そば殻で遠い夢呼ぶ北枕

万歩計示す数字は老いの幸

大阪市 大塚 節子

冠婚葬祭家紋を知らぬ核家族

ごろり寝て蘭の香もよしや春日永

雪の朝二の字二の字は私だけ

畳替え一番先に猫が寝た

大阪市 板東 倫子

尼寺を訪ねてみたいと思う夜

延々と病気の話聞く電話

児を借りて動物園へ行く男

木偶の坊という字を辞書で引いてみる

大阪市 古川 美津枝

美田なき通夜なごやかにとなりびと
仕手戦をちよつと齧つて新人類

西国三十三所展

御仏のそのはんさむにみりようされ
たつぷりと五月の雨にみなみどり

唐津市 浜本 義美

鶯が鳴かねば蛙よく騒ぎ

穫れずとも陽除けに植える南瓜苗

連休を他目に田舎田植えする

一病を抱え五月雨耐えがたし

唐津市 山口 高明

彼岸寺亡父が待つてゐる濁り酒

二度童子母の胎内恋しがる

仲裁を待つてゐる声が壁を抜け

たまさかに縋れる腕も欲しい夜

唐津市 筒井 朴竜

生甲斐へ倦まぬ忙中にも閑話

最善を尽すノルマを自己へ課す

肥前路の未廬史語る一里塚

拓本の綴り謎解き未廬伝

島根県 藤原 鈴江

鈴振つてこちら向かせてみたい人

程々にその程々の難かしさ

忘れ得ぬ憶いあの日の草いきれ
姫鏡台うそもそのまま写し出し

島根県 北川 民子

まんさくの花古里の神話呼ぶ

暖衣飽食五体のリズム狂いだし

割箸がきれいに割れたわりごソバ

ユーモアがまだまだ生きとる頭骸骨

岸和田市 福浦 勝晴

煮え切らぬやけぼつにくいに遠花火

ピカソの絵みな褒めるので賞めておく

ご亭主はジュースで嫁はん大ジョッキ

タコ焼きをやけに頬ばる妻不在

岸和田市 島崎 富志子

「あ、」「うん」と夫の心は本の中

総入歯が私の顔を変えている

抱く手付なれて娘はママとなる

気むずかしい顔もくずれる孫のこと

岸和田市 清野 こう

労りの言葉に泣いて看護する

五月十一日操子句碑記

句碑供養読経久米田の池渡る

知らされて捨ててもおけぬ小さい義理

楢山の鳥にも少しある嫉妬

和歌山市 若宮 武雄

鍍金かもうも輝きすぎている

退屈に負けてはならぬ仁王さん
世話好きがまたいそいそと来てくれる
雑草にも個性背伸びと低姿勢

和歌山市 堀端三男

強がりにはよう勝負はついている
コレクトコールの電話を待ってくれる母
フィルムの場合は孫にとっておく
蛇口ポトポト身上話するおんな

和歌山市 神平狂虎

雨に煙る心の中にある景色
いつか解ってくれるだろうよ茄子の花
小雨しとしと静かにやってくる訣れ
雨上り蟻も自分の旅に出る

和歌山県 寺田裕美

空豆をむく夏場所をききながら
道具には女の涙許せない
見つかつて置いた記憶が蘇る
火消し役男冥利と言うけれど

鳥取県 林露杖

かずら橋揺れて祖谷溪藤盛り
五日振りの帰宅を待って散る牡丹
連休の付けが回った夏の風邪
目には目を心の隅で思うだけ

鳥取県 土橋螢

やがて咲く菊のいのちをみつけたり

俺が歩くと影法師も動く
花束を貰える母になりきれぬ
金入歯莞爾と母にある光り

米子市 石垣花子

目をとじて老母は痛みをさとらせぬ
嘘一つつけぬ男は椅子捨てる
補聴器は粗筋だけで我慢させ
神棚に一冊隠して有るノート

米子市 田中亜弥

私のしゃべる分だけ暗記する
はずかしい思いが過去にひとつある
手応えの無い山だから騙される
簡単に贅肉とれと医者はいふ

米子市 光井玲子

風鈴をまずは誘って風の旅
梅雨上がる頃にあじさい本音吐く
不器用なわたしなんとか歩いてる
歴史の中に埋もれてならぬきのこ雲

綾瀬市 大山と金

緑青夏の匂いを色に出し
ダム出来てより裏山の清水涸る
里帰り娘は朝顔に水をやり
手術した日は忘れない胃潰瘍

東大阪市 森下愛論

やわ肌の熱さ忘れず不倫する

老眼鏡ずらして春の香を匂い
乗せる気へ乗せられている口車
役不足同士不満で吞んでいる

浜田市 佐々木 裕

学歴は無いが稼いだ金づくめ
新妻に捧げる唄も刺激的
古里に帰れば温い布団かも
空咳で女の姑がまだ居ます

浜田市 中川 幸一

糞虫と働き蜂の損と得
椋鳥が尻からまいた種が咲く
物差しのない川柳に天地人
ふるさとの水が恋しい都市砂漠

倉吉市 渡辺 菩句

さくらがワツと笑うからよけい歯が痛む
春嵐なんじは弱いものいじめ
夏が来ると髪の毛は蛇になりたがる
菜の花やここを過ぎてても菜の花や

堺市 中川 滋雀

父ありきそんな歴史は似合わない
咲いて散る只それだけの修羅くぐる
無職でも春のベレーは初夏を描く
嘘いくつ三途の川の足しになる

高槻市 辻 白溪子

肩書がとれた散歩と犬も知り

ロボットに野心が無いから平和です
育児書と別に姑の知恵を借る
二度の職やっぱり肩書ある名刺

岡山市 井上 柳五郎

ノースリーブ若葉の風を大胆に
甘辛と手前勝手と酒の私語
どけどけと妊婦の腹が人をわけ
栄達のない二度の勤めの気楽さも

岡山市 行吉 照路

再就職無臭のポマード塗り出社
セールの地図は漫画のある喫茶
全力投球信心深い妻がいて
生き恥の最敬礼が板につき

柳井市 弘津 柳慶

これからを夫婦茶碗へ誓い合い
意気地なく古女房に丸められ
マスコミがズカズカズカと入り込み
一徹な嫉妬となつて燃え上り

羽曳野市 佐野 白水

散歩道桜へコース変えた朝
花見より孫生れるのが楽し
右左言わずすなおに国旗出す
半農に連休のない農作業

羽曳野市 中村 優

指切りをしてから痛む後遺症

裸婦像の気品が匂う応接間

おふくろの祈りが白い風でくる

押花もちちに碎けた哲学書

姫路市 大原葉香

遠く住む子には届かぬ糸電話

車椅子風の荷物になって生き

空に月地にぜい沢な灯が溢れ

いい事のある日の夜が短か過ぎ

岡山県 小林妻子

喪の朝へなんにも知らぬチューリップ

妻よりか長い弁当箱との絆

合格の報せに祖父も手を叩く

うなずいてくれたはしみ出た汗だ

寝屋川市 宮尾あいき

瘦せたかな思わせぶりの自動ドア

選挙カー皮算用に御用心

風引くな今日は五月雨鯉のぼり

フルムーンポスターで良し他人妻

宝塚市 丸山よし津

薄い財布各種カードではちきれる

ハンバーガー背ばかり伸びる子に育つ

根回しは出来ている筈花を待つ

球形に馴れて安らぐ金魚の眼

兵庫県 脇田米朝

受話器を置いて情けが堰を切り

海鼠のような男がたくさん居て困る

助走して離陸している雲雀の巢

寄り添うて暮せば温い寒すずめ

神戸市 仲 どんたく

回復の兆しナースを女とす

オリエント奏でて神秘の塩胡椒

妻の座にエコーがかかる月給日

思い出をかみしめたくて影と居る

出雲市 板垣夢酔

男嫌いやけどの傷がまだ癒えず

妻の手の中で働き蜂あがく

エリートの椅子はぬくもるひまがない

ぶらぶらのヒューズが僕の余命かも

倉吉市 野中御前

人恋えば闇がだんだん深くなる

絵ろうそくやさしい亀の背だった

直球でハート射とめてゴールイン

命こめ白木蓮は天に咲き

和泉市 岡井やすお

だまされる余裕を持った不仕合わせ

見付かればちよつと反省してみせる

文相もデイスコで踊ってみりや判る

古稀喜寿になつても月光仮面好き

町田市 竹内紫鏑

合唱団入賞別の叫び声

スニーカー好調立読みまたよろし
主婦合唱夫は軍歌以後無芸
Xの字に吊革を持ち他人

富田林市 松本 今日子

良くたべて良く寝て瘦せる話する
缶ビール均等法で配られる
臭いしてカレーライス食べとうなり
捨て切れぬ自分を背負う重いこと

豊中市 奥田 満女

夕焼けて買物重い女たち
あの人も悲しい事のある目もと
お向いの桜ですます通りぬけ
空巢にも隣の犬が吠えてくれ

箕面市 坪田 紅葉

それだけで心の通う春日和
弱ったなと思う日もある菜種梅雨
法事のあと昔話がつづきます
アメリカへ小包送る新茶入れ

西宮市 奥田 みつ子

入院の留守のつつじが真つ盛り
沢蟹のはさみが雨を切っている
逢うてきた罪を流すか雨烈し
麻痺をした足叩いてる試歩の朝

堺市 柿花 紀美女

平凡な人生でしたフルムーン

老夫婦同じ話で眠くなり
風邪籠りしている間に桜散り
曼陀羅の糸を繋いで老夫婦

寝屋川市 平松 かすみ

炎天の汗がもの言う棒グラフ
一泊へ無理やり持たすペンライト
この辺もその辺も妻の手の中で
楽々と太り楽々と痩せられず

八尾市 宮崎 シマ子

柔らかい花は軒下別れ霜
漂白剤心の汚点しみが取れるなら
萌える気は私と同じ紅つつじ
母の日に母の方から宅急便

仙台市 川村 映輝

触られたくない疵へ他人触れたがり
高額所得仁術の医者顔ならべ
生活保護うけて晩酌かかさない
元部長ゲートボールの弔よし

大阪府 坂口 公子

風の道見せて若葉の薰りけり
気分など害してないわと言う気分
退屈なんかして居られない舞台裏
内心はやっぱりギャルに置く嫉妬

芦屋市 竹中 綾珠

花水木赤花乙女想わせる

カナメ垣新芽の赤が花のように
生徒等が見舞に来てくれ掌を合わす
還暦を過ぎた生徒は皆元氣

高知県 赤川菊野

足摺岬にて

黒潮へ冬の絵みんな捨てました
若すぎる寡婦に家紋が重すぎる
方便の嘘へ良心眠らせぬ
鍋底を磨く涙のかわくまで

羽咋市 三宅ろ亭

好きになることの難しさ辞書を繰る
伸び過ぎた爪やましき隠すかも
君の言う嘘も方便には乗れぬ
几帳面車間距離にもあらわれる

貝塚市 行天千代

医者通い皆勤賞を貰いたい
慢性の病氣かかえて生き過ぎた
鈴かけの花が咲いたよ五月風
後少し私は馬鹿のままで居よ

静岡市 永倉僕川

顔見知りさけて職安急ぐ足
勝敗がついて王と歩同じ箱
送別会明日は職場も椅子もない
善人にされて断り切れぬ破目

高石市 浅野房子

気が付けば茶の間はコマーシャルの渦
気の弱さそれが取柄になることも
熟年は口と心を使い分け
あじさいに心変りを攻められる

尼崎市 奥山美智子

雨ざらし日ざらし松の壮健さ
闘病の友へ眩しい献血車
ああ夫婦過去にこだわることはない
丹精をこめた万年青が生き残る

豊中市 上田登志実

ひげ剃って朝の鏡に笑いかけ
肩書のない名刺でもたまに要る
生と死を見つめながらも欲が出て
妻の癖ちよつと隣に行つたまま

大田市 藤田軒太楼

田高の不況に頼づえつく日々で
門柱の傾き田高まだ続き
口ひげを生やして門番の顔となり

諫早市 原田メイシユン

六十年夫婦茶碗もかけはじめ
挨拶がないから自販機では買わぬ
痛む歯がなくなつてからばけ始め

島根県 松本はるみ

野良犬に惜しい風貌持つている
テーブルを丸く作つた処世術

あの人の病氣に加担したわけでない

神戸市 山口 美穂

スケッチブックとうぐいすも蛙もきけるとこ

みどり風山菜料理舌にとけ

五月晴れ今日はいいい日と信じきる

富田林市 片岡 智恵子

公園の風向き変る花いくさ

謙譲の美德を発揮する逃げ手

電話商法文明の利器鳴り止まず

吹田市 園田 文子

ローソクは亡父の忠告として揺れ

母の待つ能登はやさしや土までも

夢のせてマストにかすむドラの音

大阪市 渡部 さと美

休耕田空は高いか揚雲雀

足跡のまだまだ続く幾何もよう

雨もよいほっと嬉しいしのび逢い

高知県 中内 朱坊

雨降れど雨読にならぬ医者通い

定年の帰農を嗤う野菜の値

朝々の挨拶拾う万歩計

大阪市 寺井 東雲

相談は話を聞けばごもつとも

新人類言葉を聞けばあれ女

タイガース応援団も少し減り

高槻市 竹内 花代子

さぎ草を今年も咲かそう如露の水

自販機に嫌われ出戻る札のしわ

娘と嫁に倅せ貰うカーネーション

和歌山県 天満 三千代

愛一途夫婦に掟などいらす

実を結ぶ花は散り時知っている

精いっぱい今日を生きてる寡婦の針

鳥取県 さえき やえ

わら屋根の絆がっしり温かい

土の言葉わかりかけたな地下足袋よ

はやばやと風鈴の音を病む母に

和歌山県 後藤 正子

脱ぎすてて波に洗われたい踵

あの歌に泣ける私の感受性

ふっと気が付いて両掌を見くらべる

交野市 山本 テルミ

許すこと多い私にポートワイン

ジュース缶何か叫んで舗道駆け

残照へ亡母の笑顔ぬくめます

島根県 石田 清泉

座ること忘れたような妻の日々

筈と追いかけてごっこに負かされる

短足と二重の腰で金婚の

兵庫県 中田 白李

巻き戻し左遷ばかりの音でない

免許証持たぬが守る車間距離

朝刊の運勢諺ばかり読む

大阪市 吐田公一

内海であれば外海まだ知らず
割り切つてしまえば何んでもない仕事
グループにお荷物一人いて話題

川西市 松本ただし

独立の気魄持っている野犬

過疎の村本当の初夏と風の私語

遮断機に血圧チェックされている

茨木市 井上森生

篝火を焚いて祇園の枝垂れかな

ロック見て五十男にも決意

ここいらで一つ燕の宙返り

西宮市 瀬尾六郎太

好き嫌いな年経るにつれ変わるもの

年かいな人の名前がすつと出ず

定年がこんなに父を老けさせて

境港市 細木歳栄

活け花の缺非情に徹せねば

行き止まりこの目で確と見とどける

もう少し生きたい薬買いに行く

茨木市 堀良江

写真とはあまりに違うひとでした

この手つき陰で煙草を吸っている

立入禁止野良猫の日向ぼこ

岸和田市 原さよ子

親類のはしくれ選挙へかり出され
食べられる俸せたまる皮下脂肪
留守番の夫へ気兼ね五月晴れ

寝屋川市 堀江光子

再会の酒が別れの酒となり

灌仏会あそび心の楽しさで

チューリップあなたと私だけの刻

神戸市 山片紀雄

円高と連休だけの景気策

赦されて他人を許す神にふれ

原因は独り合点のよみちがえ

加賀市 細呂木魯木

ビジネスと割切り上司のゴルフ熱

素直さは見栄を捨てて詫びている

深刻な便りへテレビ消して寄り

弘前市 斎藤 蒔

母の日や津軽はりんご授粉中

絆創膏貼った位を大袈裟に

穂の芽を摘んだ誰かが振り向かぬ

岸和田市 芳地狸村

出雲路へ旅して

宍道湖はしじみで朝が明けてくる

立読みの本はまともに開かない

団菊の気合に酔った源氏店

岡山県 山本玉恵

B面で深い情けのわけをきく

何も彼も申し上げたい鬼が居る
七十五日の背にささった矢が抜ける

松原市

小池しげお

新部長忙しくズボンの筋も消え
年金が少し足りない五月晴れ
そして男嘘を立証してみせる

鳥取県

松下たつみ

負けた子の涙ブランコで乾き
俺の血が又反対派の方につき
ゴム長の子に面白い水溜り

出雲市

入澤壽恵

げんげ田の牛一頭が名画めき
医学名に無い不可思議な五月病
憲法も息子も四十オジン組

岡山県

荻野鮫虎狼

宇宙から呼ばれる恐い日を思い
選挙戦こんな笑顔もあった人
遍路みち不邪姪だけは守り抜き

奈良市

宮川古都路

アーメンの背に十字架の杭がある
ふれあい心がかよう樹の酒
カーネーション祖母にささげる三代目

大阪市

北山悟郎

妻と枕心の支え生きている
丈夫に生れて片足国に捧げ
住みづらく自分を縛る律義者

初体験退職金の嵩数え

和泉市

西岡洛醉

洗濯機妻の日課が始動する
一輪の花の話は悲しいね

鳥取県

羽津川公乃

駅広場ゆっくりまわる花時計
三面鏡後姿もチェックする
歯応えもさわやか旬を丸かじり

大阪市

松尾柳右子

スカート丈中途半端な年齢で
大阪は安く買物した自慢
NT株売ってハワイへ行く話

鳥取県

清水一保

男らしさ女らしさに均等法
追伸に心で綴る十七字

蝶々の明日散る花にも燃えている

鳥取県

江原とみお

蹴とばした空缶が噛みついてきた
栄転の椅子についてる裏ばなし
波紋おこす小石を一つもっている

倉吉市

淡路ゆり子

盆栽と会話の出来る老いの日々
大型連休犬の食事に残される
拾われて生きよと願う猫捨てる

鳥取市

広本文子

お題目となえつつけて見える山

自画像が好きでなかなか死ねませぬ
許すとは言わずに立った父の背な

姫路市

丁坪 サワ子

開門へ仏なごます古都の風

矢面へ立てば正義も村八分

子の寝顔叱った自分を責めている

岡山県

岩道 博友

中流の意識で重荷の役を受け

目を見ればひ弱い感じでも鬼才

一頁先に空論書いておく

檀原市

岩井 本蔭棒

車掌にも小さな誇り鍵の束

櫛の歯が抜ける如くに春無情

信頼に背き多数へ手を挙げる

高知県

小澤 幸泉

ひまわりの地球を何んと映すかな

方言を語れぬ子らに笑われる

男三人更に気ままな夜の床

和歌山市

山川 克子

川の字にもう寝る事もないベッド

要するに心があるかないかだけ

ごめんなさい謝りながら次の策

出雲市

園山 多賀子

美辞麗句並べて文盲甘い夢

膝に乗る猫だから鈴つけられぬ

守銭奴が花に浮かれる人嗤う

出雲市 小玉 満江
チューリップそんなに背伸びしないでね
ハックションそこで話をど忘れし

孫の友私にや好きな子嫌いな子

米子市

茂理 高代

夫病んで愚息が神にみえた時

ドクターの目は笑わないいい笑顔

それぞれの想いで患者窓により

出雲市

小白金 房子

農一途夫婦茶碗の温み抱く

長持唄かくす涙のお立ち酒

叱った子そーつとのぞく二階の灯

姫路市

釣 遊光

強がりのわりには情にもろい母

紙風船孫にせがまれ入歯飛ぶ

クローラーを付けて別間に逃けている

大阪市

中西 兼治郎

金になる肩書一つもない名刺

倒産の罪を円高みなかぶり

ネオン街誘惑の花咲きみだれ

高槻市

川島 諷云児

ライバルの影まで俺を馬鹿にする

戦友会今年も二人流れ星

ぬるま湯に慣れて己れを見失う

芦屋市

上田 佳秋

里帰りする娘に逢わず旅に出る

子は浪人父は職無し茶漬け食う
草笛を吹けば自然に森へ向く

島根県

松本文子

逃げても逃げても誰も追いかけて来ない
愛をさく心の窓は錆びさせぬ
安らぎは雨の音聞く仕舞風呂

唐津市

浜本ちよ

耳よりな話へ耳が目を見張り
沸点の低い男でうとまれる
お先にと言われ冥土の道へ出る

岡山県

直原七面山

娘は花を浴びて舞い
子は起きて米を磨ぎ

高知市

北川竹萌

健康をほめられている爪の彩
尾は振らぬ妻濃やかに気をつかい

米子市

木村富美子

新しい命と出会う日のドラマ
姿なき声におどっている私

大阪市

塩田新一郎

妻は留守猫の頭をボンと打ち
入歯踏み足より財布痛みだし

大阪市

町田達子

柔軟な物腰にあるテクニク
森林浴牡丹の里に追うロマン

静岡市

渥美弧秀

妻と居て恙ない日を忘れ勝ち
詩と音楽生甲斐となり古希弾む

高知県

曾我部佳風

裸婦の絵の前で長居しておれず
寝返りを打って明日は謝ろう

米子市

川上より子

まわり舞台のいつしか飴を配る役
熟成のブランをねかす茶わん籠

枚方市

二宮山久

緑なす山がなくなる分譲地
走らねばならぬライバルいるかぎり

富田林市

新開千代女

あこがれた自分の夢を子に託す
禿頭昔あこがれ抱いた人

岡山県

二宗吟平

万感の憶い見舞に来て握手
天神様の頭脳いただく百度石

吹田市

茂見よ志子

五目並べ孫は白石取ったまま
重い鞆提げて夫の自負続く

岸和田市

狭間希久志

天神が絵馬の鎧を着る二月
浪曲を実年つとに子守唄

姫路市

中塚遊峰

空元氣大丈夫かと影が言う
無駄遣い脳裏に亡父の声がする

自選集

野村太茂津

噫平和誰も殺しに来てくれぬ
口を極めて時よと口惜しがる
推敲や妻の項をじっと見る
唐突な告白を聞く夏の闇
俺の甘さを嗤う男の過去思ふ

長野文庫

農民の保護育成も票のため
金儲ける男にしてはお人好し
野球に負けて少女の涙美しい
神さまは横を向いてる頼み事
愛想を気にしています小あきんど

山内静水

おかげの三人姉妹で馬があい
逢いたいがあとがとっても苦しくて
マスターに一句を贈る箸袋
長生をしてはしうちで飲んでほし
悲しみと幸せ長寿の背に見る

水粉千翁

天も地も風も男も青に炎え

母の日の母美しき襟掛け

蝶を恋う花の杯かなうれし
瞳を見張り話しかけたし花筏
その通りでしたおいしい人間味

米澤 暁明

おしゃべりも損黙っているのも損
うれしくてうれしくてなぜ笑えない
山頭火に似ておいでるとおだてられ
受精卵です大学は受かります
舞い戻るかも裏木戸を開けておく

八木 千代

わたくしの句碑の一つは地に埋める
あらかたは聞いたコーヒー店の椅子
なによりも約束ごとを書くノート
カセットのそこだけいつも聞きもらす
川上の葦には愛を借りている

小出 智子

大切にせよと一病いただきぬ
洗濯をいっぱい出して喜ばす
母の日を忘れずにいるお嫁さん

知らんふりできない傘を差している

月原宵明

古時計叩けば昔見えてくる
日々好日夫婦は欠伸うつしあい
黒ネクタイ畳んで熱い酒を待ち
駅前の風が運命変えてゆき
伝言板日本は平和よく遊ぶ

金井文秋

言う程は疲れぬ好きなことをして
席譲ってほしい顔せぬ意地を持つ
シルバーシート要らんことだと喜寿が言う
脳細胞補給に頭使つて
寺参り死ぬのが恐くないように

尼緑之助

春の詩にしていただけぬ選挙カー
金持ちになつても元米税嫌い
飽食かひよ鳥夫婦柿若葉
むなしさよ牡丹薄命雨の中
以下同文地方議会もワンパターン

藤村ノ女

帯解いて麦茶の冷えに蟬しぐれ
通夜の門燈あかあかと悲し
ベランダで結構育った茄子トマト
風車背の児に持たす夏祭り
おばあちゃんのセンス近所が褒めてくれ

伊豆にて

反り橋を渡って離れ水の音
水際から真直ぐ富士がそびえ立つ
たかあし蟹のとれる港はさくら咲く
文字通りのトンネル続く桜道
やまももの宿遠い自然に浸りきる

黒川紫香

人のよい顔で売ってる朝母
あじさいがこれからという摩耶の山
梅雨近し燕が低うひくう飛ぶ
割勘をきちんと持つて来る無口
汽車弁をもくもく話乗つて来ず

市川鈴魚

化けて来た話聞かぬが棺の釘
風の好みで甘い小さなさかうらみ
一匹狼父の猫背を若くする
賢い花とお話仏様の指
真正面向くと男の径がある

児島与呂志

鍵かけた心に妻も住んで居る
満ち足りて心の地図を描いて見る
玄関の巣づくり燕追いはらい
和解して心やすらぐベダル踏む
当分はタイムスリップしたままで

工藤 甲吉

本田 恵二朗

大矢 十郎

橋 高 薫 風

義妹の死

目の上のたんこぶ黒字国日本
生きている鰻を貰いもて余し
猫の中に女ひとりという暮らし
ろうそくへバーのマッチで火をつける
八十八夜亡妻へ新茶を買って来る
老妻の鏡台めつきり時代めき
古鏡妻に仕えて艶光る
鏡かけ金婚過ぎた彩に褪せ
薄くなりはったねと鏡めに言われ
白い毛の数を鏡に数えられ
土に生きる無欲に適う策はなし
お日さまが画布から消えた都会の子
そこ迄のシートベルトへ腹を立て
カラオケの拍手も父は真に受ける
過去帳に少し慌てたご香料

棺穂高 白馬も葬送れ神妙に
紅冴えて花嫁化粧にはあらず
智艶和光白骨三十九歳なり
別れして猫の頭を撫でるのみ

土居耕花句集『やっこ侃』発刊記念川柳大会

とき 昭和62年9月20日(日)午前9時開場
ところ 大原町総合センター大ホール

岡山県英田郡大原町古町一七〇九
電話(08687)813752

お話し 兼題 本 田 恵二朗

「土」 橋高 薫風選

「居る」 小林由多香選

「耕す」 青山 岳峰選

「花」 土橋 蛭選

「侃」 長尾 保選

「傘」 川元いさむ選

席題 二題 各題2句 締切11時30分

欠席投句拝辞

会費 一、五〇〇円(軽食・発表誌呈)
賞 総合10位まで(二句一点方式)

★9月10日までに欠席をお知らせ下さい。

連絡先 岡山県英田郡大原町中町513

電話(08687)813815

川 元 いさむ

主催 大原川柳社

川柳太平記 (110)

川柳の群像

中島生々庵

東野 大八

母と往く心齋橋の片日照り 生々庵

七十九歳で亡くなる二年程前の夏の句である。もう十年近くも過ぎた今日でも、私の臉にはつきりと灼きつけられている母の佛の一寸である。当時の心齋橋筋には、今日のようない日覆いもなく、雑踏の中の片日照りは相当にきついものであった。通る人達は南行も北行も皆、西側を歩きたがり正面からぶつかりそうになる。手をひいて日傘もささぬ母と二人連れの歩幅は、暑いには暑かったが、私にとっては何としても忘れられない愉しい思い出である。私の職場の烈しさが、自由に涼しい時間を選び得ない事を知りぬいている母は心からほのほのと、私の僅かばかりの時間を楽しんでいる様子である。行きかう数百人

の人々は幸せにみちた二人の母子等に勿論関心はない。人間世界の幸福とか、生き方とか理屈を超越した二つの魂の姿である。(「川柳雑誌」(昭39・1)「自句自釈」中島生々庵)

「佐世保から佐賀まで一時間半、二年振りの墓参である。田舎のでこぼこ道を小型自動車に揺られ父母眠る菩提寺へ。この道もあの道も母に連れられてお詣りしたお寺への道である。歩きながら話してくれた母の言葉さえ耳に聞えてくるようだ。母が亡くなって一人でお詣りする時も、他の人とお詣りする時も必ず母も一緒にお詣りしているような気がするこの道である。「お墓詣りはいいものだね」と小石と話し合いながら眺めるお寺のたたずまいも、遠くの山並も変っていないのがうれ

しいと思う。」

父母眠るここふるさとの秋 豊か 生々庵

(「川柳雑誌」(昭38・2)「二人道中由縁佛」中島生々庵)

本名中島達太郎。佐賀県小城郡牛津町生れ。

人生の生々流転を生々楽天と観じたまを柳号にとり生々庵。大正14年大阪医大卒。昭和6年医学博士。昭和18年中島小児科診療院開設。昭和20年3月戦災により同院焼失。昭和24年大阪南区に診療院再開。昭和38年大阪市南区医師会会長。昭和44年大阪府内科小児科医会会長。川柳歴は昭和14年3月麻生路郎に入門。松坂クラブ川柳部へ入部にはじまり、

昭和18年不朽洞会理事長となる。昭和19年大阪府文芸賞を受賞。昭和40年麻生路郎師逝去後、不朽洞会有志と共に「川柳塔」を創設、推されて主幹・理事長となる。NHK川柳部門選者。山陽新聞読売文芸川柳部門選者。昭和49年日川協創立委員、のち、日川協会会長。

「私は毎朝仏壇の阿弥陀如来像の懸け絵図と木彫の母子観音像を礼拝してから職場に入る事を習慣にして居る。それは決して偶像崇拜ではないのである。私にとっては職場に入る直前にこの絵像、この木彫像を通じて、仏の「大悲無倦常照我」を感謝し、母の懐の暖かさを感得するだけである。言葉を換えてい

えばこの像を通じて、仏と語り母と語る寸時のよすがである。肉眼で見る像がなければ、仏と語り母と語る事ができないかというとうていではない。

私は句会で頂く賞品を選者と作句者との間におかれた一つの偶像に見立ててみるのである。金銀をちりばめた大優勝盃でなくとも一本の鉛筆でもよい。作者の苦悩と相通する選者の心構えなり努力なりにおきかえてみると理屈なしに明るい場が現来する。極論にいえば、形で現わした賞品が必ずしも必要でなくなってくる場合もある。ここに選者という問題も浮かび上ってくる。作句者にいのちある句を作る真剣さを要求するとなれば、それと同時に大悲の仏、大慈の母にも比せられる選者というもの心構えなり資格なりというのが非常に重要なことになる。」（「川柳雑誌」(昭35・8) 不朽洞賞受賞作家特集「中島生々庵」)

「中島生々庵氏と小石夫人は最も似合いの夫婦だと思ふ。夫唱婦随、時には婦唱夫随もあらう。舞踊、川柳、絵画と常に趣味を一つにし、その意気の合ったところで、立派な後継ぎ三人もの男子を育てられた。お二人とも凝性なところがよく似ている。三日坊主ではない。絵の方は正直いって小石夫人の方が上

手かもしれない。(句集「生々楽天」序・直原玉青抄録)

「今日になって考えてみると、私どもの家庭はよい意味での婦唱夫随であり、或る面では小石は生々庵の指導者でもあったとの感じさえる。世間の言葉に良妻賢母というのがあるが、私は良妻よりも賢妻、賢母よりも良母が望ましく思う。私共の家庭での小石はまさに私の望む賢妻であり良母である。」(句集「生々楽天」跋・中島生々庵)

小石夫人は明治40年3月東京生れ、東京千代田高女卒。昭和2年3月結婚。川柳は昭和21年路郎夫妻に師事、現在「川柳塔」同人。小石は夫と共に師事した日本画の木村杏園画伯の命名。茶道は宗寿。舞踊は小川流の名取で小川昭石。夫も日本舞踊・小唄に堪能。

句集「生々楽天」は、嫡子中島一彦三兄弟の父母への感謝をこめた絢爛豪華な大冊の本で、川柳塔社中の全面協力で昭和51年3月両親の金婚式を卜してのプレゼントである。

「そもそも父生々庵のいき方をみると、もの事を中途半端にすまそうとしないのは結構だが、世の中のことを自分の物指しではかろうとする。『中島先生はこわい』といわれる所以である。冗談も時には人を傷つけ、思も

与えようで相手に屈辱感をいだかしめるようにもなる。会長とか主幹とかいわれるようになれば何時もニコニコして、若いものに任かせておけばよいものを、一口口出し手出しをしてしまふ。とても「生々楽天」とはいかないようである。」(句集「生々楽天」あとがき抄録・中島一彦)

「さて私事で恐縮だが、生々庵30歳小石21歳で結婚。毎年毎年9違いである。何も不思議なことではないが、考えてみると、11年目毎に二人の歳の数が逆になる。生々庵43の時小石34。54の時45。こうしたことが40代から90代まで6回ある。本年は生々庵65、小石56残るところ三回。98と89まで生きるとすると恰度今年は中央である。」(「川柳雑誌」昭36年一月号)

昭和61年2月17日老衰で没・享年89、瑞龍院蓬山憲雄居士。昭和57年岡山に建立された句碑の句

浮き草は浮き草なりに花が咲き 生々庵

★次回は「住田乱耽」

俳風柳多留廿六篇研究 (三十二丁)

石田成佳・大屋六郎・八木敬一
鈴木 黄・石田晋一・南 得二
小野真孝・本多正範・多田 光

故岡田 甫

532 青楼のふた片手でハメられず

石田成 青楼の蓋は吉原の入口である大門。

片手は五百両の意。

紀伊国屋文左衛門はよく吉原に遊び、女を買占めて大門を閉め、その都度千両の大金を費やしたといわれ、句は紀文の豪遊をふまえて、吉原大門の扉を閉めさせて廓内買切りをするには、五百両の金では不可能であり、千両箱を空けなければならないことをよんだもの。

両方の手で大門を紀文

大門は片手わざにはいけぬなり

三二二八

三三三八

大門の扉片く五百両

二五六

八木 贊 「片手業」では締められない、と

いうことが、表の意味になっている。

石田晋 礎賛。八木氏の注は必要ないのでは

ないか。

南 礎及び八木説賛。

多田 賛。

岡田 礎稿に、紀文がたびたび大門を切る

豪遊……と書かれているが一度、しかもそれ

は虚説と言われる。

533 惣業式貼国府の中カへ置キ

石田成 登楼三会目には、床花と称し女郎に

祝儀を遣ることが習慣で、揚代の三倍位、三

分の女郎なら二両位、女郎がまだ寝床へ来な

いうちに煙草盆の引出しなどへそつと入れて

置くのを通とした。

「ほれ薬佐渡から出るがいつちきき」(二五

18)で、小判を二帖に二両をきかせ、国府で

煙草盆をあらわし、吉原登楼三会目の床花の

慣習をよんだ句作。

三会目国府の下へ式両置

多田 賛。

岡田 同。

534 灰吹へ一寸越川嬢八乗せ

五五

石田成「越川」は、有名な袋物屋で、越川のたばこ入でなければ持てないというほど流行したようです。

ドラ息子子の嫁が、亭主を前にして、世帯を持つ前と同じ仕種で煙管に火をつけた。越川の煙草入れと喫煙の動作により、水商売上りの嫁を暗示した句作か。

南「礎賛」越川の煙草入といい、ちよいと灰吹にそれを載せた動作といい、素人ばなれした粹な嫁、本句はその写生句であり、水商売出身を暗示する。

多田「賛」ドラ息子子の嫁かとも思っていた。

岡田「南氏の解でいいでしょう」。

535 色く〜と作りつくして横にさし

石田成「色々と作りつくしては、女の髪を結っている動作を、横にさしは髪形も整い仕上りとして最後に簪をさした姿を表わした句」。

花見又は芝居見物前の仕種、吉原の遊女的身仕度、種々考えられますが、一般女性の外出前の化粧姿と解します。

南「髪造りの大層さ、やっとな出来上って、最後の簪を横にさし込む。やれやれこれでお仕舞、はっとした情景の句かと思われます」。「色く〜と作りつくして」はその髪造りの過程、

「横にさし」はそのとどめというところか。多田「賛」男から見ると「色々と」といったいくらい化粧はたいへんらしい。

岡田「同」。

536 ロハ焼たが桑名へハ一番手

石田成「伊勢参りの帰りか、東海道を宮まで海を越る七里の渡しから船に乗る前に、富田の立場辺で名物の焼蛤をあわてて喰べ、口にやけどをしたが、桑名の船着き場へは第一番に到着した。そして一番船に間に合ったといったところでしょうか」。

八木「宮から桑名が七里の渡しであるが、宮の船着き場は海に近く、又熱い飯を出しながら「もうすぐ一番が出ます」という。それで半分も食べないで乗船する。ゆっくりした奴はとり残される」。

猫舌で取のこされた宮の舟

四二二〇

鈴木「八木氏説賛」。

多田「同」。

岡田「同」。

537 夜や寒く白魚に出る佃島

石田成「『新古今和歌集』に「夜や寒き衣やうすき片そぎの行きあひの間より霜やおくら

ん 住吉の御歌とむ」。

十二月から早春にかけて夜の寒さがことさらにになると、幕府本丸、西丸の食膳用として献納すべく又一般江戸庶民の食膳に供するため、佃島名産である白魚漁がはじまることを、住吉明神の御歌の文句取りによりよんだもの。白魚につくだの手紙ぬれて来ル

宝二一義二

石田晋「夜が寒くなる頃白魚漁が始まる佃島」、「夜、寒さの中を白魚漁に出る佃島」、どちらの解が正しいのか。礎は前者だと思いが私は後者の方が良いのではないかと思ひます。

多田「同」。

岡田「石田晋氏説のように考えておりました」。

川柳塔柳箋

一冊 二百円

送料 二百四十円

水煙抄

黒川紫香選

今治市 野村京子

髪梳いて梳いて女の花暦

手拍子に踊れぬ見栄が一つある

両の瞳が犯されそうな椿寺

恋知って少女に海は昏れやすく

そして又恋路へ通う夏帽子

熊本市 宇野昭代

気軽さがちよつと気になる頼みごと

二代目にゆずつてからの酒うまし

気がつけばうまい話が雲隠れ

少し儲けて次のプランを練っている

廻り道などは嫌いな若い足

高槻市 笠嶋恵美子

カトレアにくちづけ甘い夢を見る

民営に慣れぬ笑顔を持ち歩く

へそくりを増やす本だよ買わないか

おくやみの言葉に詰まり泣いてくる

敗戦の将の笑顔が美しい

広島市 流奈美子

追従の笛今日も吹く寒い椅子

ただ一言母の言葉が的を射る

毬ころころと春の笑いをつれてくる

彼のスケッチにいる点ほどのわたし

アドレス帳に黒線を引く寒い春

名古屋市長 藤井高子

かごめかごめの鬼は一番可愛い子

金魚にもあくびをさせている無風

自画像へピンク少うし足してやろ

不眠症はにわの咳を聞いている

言いくいことを説でさらり吐く

八尾市 高杉千歩

いく曲り拳句の果てや啞になる

号令が耳底にひびく青田波

終生に悔いひとつあり万年青の実

日々多忙煎じつめればみなあそび

いつからか過去に呼吸を合わしてる

富田林市 池 森 子

わたしの中でちぎり絵をする恋ごころ

灯を消すと亡父と私の時間です

平凡な女に見える日の平和

妻母女おんなを主張する四十路

こころ包んで挨拶を渡します

高槻市 河 瀬 芳 子

虫干しへ仙台平のしゃべりすぎ

「おばあちゃんがいつち好き」だと市場かこ

新参者です隣の墓へ亡夫のこと

屑籠に私の私語が溢れてる

クリスタルで薔薇婉然と自尊心

熊本市 永 田 俊 子

俗塵の風には乗らぬ君子蘭

タイミングよく出た軽いくしゃみ

まん中の椅子に坐って身構える

一生懸命に生きても小さな椅子の上

九回の裏で裏切る浮動票

熊本県 大 川 幸 子

辛口の小言が骨身にしみてくる

火の車一台が処理しきれない

二〇〇〇年に満期保険が一つある

バタバタと音がしそうなつけまつげ

フォーカスされる若さで街を行く

竹原市 信 本 博 子

男と女危なくないか車間距離

終章までいっしょにいてね青い鳥

自分史で自分を探すペンを取る

待つだけの女になった日の長さ

それぞれの人影同じ彩となり

夏帽子きつと変心見抜くだろ

泳がねばならぬ④の海がある

リズムに乗れぬ蟹が斜めにばかり這う

古都暮色酒におぼれた蝶が死ぬ

宵待草の昔語りに月が出ぬ

富山市 舟 渡 杏 花

こそ泥が見切りをつけた島に住む

授かった双子へ軍手の穴がふえ

鼻の骨抜かれ天狗は絵にならず

涙もろい妖怪ドーランはげたまま

失うものばかりはくろの数を読む

長岡京市 木 本 如 洲

吊り橋を橋を渡って母の道に出る

お花見のむしろ酔えない膝を抱く

泥の靴生きる言葉をもっている

娘のいない部屋で無口な夫婦箸

人妻の電話を待っているコーヒ―

久留米市 鶴 久 百万両

ありし日の母の逸話に彩はない

大日如来のお慈悲にまずは亡母のこと

春の叙勲に洩れた恩師の樹が炎える

日の丸をなびかす風の演技見る
離婚印捺して魅力を取り戻す

羽曳野市

吉川寿美

嗚呼惜春 風と落花の舞の中

噂話ときに諸刃となる恐さ

身に覚えない噂がひとり歩きする

弱い者苛めが好きな督促状

病夫に見せるひとり芝居も底をつく

大阪市

上田柳影

運のない男の指が荒れている

はつきりと不倫と知ったコーヒー皿

母の手の外は信用されていず

また寄席に行こうな仏具新しい

呆けてなお生れ故郷を恋しがる

京都市

松川芳子

母の目を背に意識して疲れてる

踏んばった仁王の足の力瘤

パチンコを日課に自転車こいでいる

雨無情やっぱり私雨女

老いらくの恋らし何時も褒めてはる

和歌山市

桜井千秀

御近所はパートで昼間は過疎の町

十を悟る機敏で階段踏み外す

今日だけの才媛でいる披露宴

平凡な日々なり冒険誌読み耽る

有頂天になれるからまだある若さ

旭川市 朝倉大柏

味方にはしたくない神だっている

失意の胸からふるさと行きの汽車が発つ

年寄りと月とが渡る歩道橋

苦勞したようにも見える背の丸み

大川に出て来るまでの水の青

あたたかい移り香うしろを通る風

風もないのに矢印が揺れ動く

左足から靴下をはく癖に慣れ

距離置いて見れば都会の美しさ

浮草は流れにゆれてさからわず

岡山県 矢内寿恵子

納め札一枚ずつにのる懺悔

南無大師想いちりぢり花の寺

花の駅訣れ言葉に聞きあきる

栄転は巢身血圧上下する

寝屋川市 井上すみれ

釣人も景色になって天神峡

人の身のはかない話団地角

人の世の軌跡素顔を染めて行く

湯気の中束ねた髪はもう大人

吹田市 井上照子

正直に言えば幸せこわれそう

雨の窓指かむ癖が顔を出す

九十九折ぬけでて広がる青い海

姑母の手にふれるとほどけたわだかまり

岐阜市 金子匠果

したたかな相手を見抜くドアチェーン

初対面互いの温い目に魅かれ

合掌屋根遠い民話が呼吸する

平熱を喜びあって凡夫婦

西宮市 秋元てる

田植機へ本家の嫁は大学出

黙んまりの愛を信じている案山子

煮え切らぬ男にさっと花吹雪

早起きは善と信じて老母達者

京都市 木村たけし

爽やかな風に少女のマンドリン

遠くから竿売りの声春炬燵

親友の酒血圧を聞いてくれ

芋ぼうを出て夜桜の道をとる

西宮市 松本一郎

馴れましたきまま主人と半世紀

草笛を吹く少年の瞳がきれい

音沙汰のない兄弟で皆達者

草をひく母がいたのは去年のこと

滋賀県 安田志津

待ちばうけひやかしてゆく青葉風

指のきず春ひとつきを棒にふり

ひび入って身近におもう飯茶わん

着こなせる自信ないのに春の柄

寝屋川市 宮崎菜月

山の辺の道しばらくは薫風と

立看板寄り添うように矢車草

花もよし湖もよし城まつり

散り際のドラマ見つめる老いの目よ

東子市 小山悠泉

郷愁をのせ故郷へ雲走る

長生きがしたし青竹踏む日課

妻軸に廻る我が家の夫婦独楽

片道切符買うて気儘な旅へ出る

兵庫県 東浦砥代

手鏡の隅へ隠してしまふ恋

たまさかの敬語が喉にひっかかる

また来いと包んでくれる父の汗

ちと派手に泣いて女の保身術

熊本県 高野宵草

娘がひとり混じればピンポン台なごみ

思い出の中に軒もあつた亡父

楽しかったなあと雀の藪昏れる

夫婦喧嘩棚からこけし目を細め

唐津市 相葉あき

夜の地図確かめに行く男達

楽聖のデスマスクあり亡夫がいる

現実と一緒に歩く影法師

尼崎市 新井泰子

病癒え置き場に困る千羽鶴

マニキュアを落して私の指になる

偏差値も受験もなくて本を積む

耳に快い話こちらで止めておこう

広島県 田村新造

しじみ汁捨てた故郷が惚ばれる

男勝りで下町の風肌に合い

終りには本気で叱る愛の鞭

開運を願うハンコを替えてみる

守口市 森川まさお

心こめて一年草に水をやり

俯いて木洩れ日のなか神父来る

雑談が説教じみてくる社長

気くばりをされてわが家を早く出る

鳥取県 太田幸枝

衝動買いの好きな手を出し足を出し

水商売足を洗って老けました

天に向かって麦笛を吹いている

茶ばしらが立つてストレス消えました

出雲市 金村青湖

祭笛乗せて五月の風走る

数鉢のさつきで和む部屋になり

受付に笑顔忘れた娘が一人

また趣味を一つふやして闘病記

尼崎市の場 十四郎

わが家にも青空見える窓がある

屑籠に疲れた花が一つある

宿帳に影を落して一人旅

旅立ちの切符は妻が持っている

鳥取県 土橋はるお

お地藏さんに目薬入れてあげましょう

尺貫法で亡父の仕事を継いでいる

目をつむってありったけの知恵をしぼる

外孫が来て夜通し泣いてくれました

尼崎県 鈴木良征

偽善者の喉にささった雑魚の骨

反対の鉢巻き締めたイヤリング

嫁はんのつくったパンに膽がない

待合室の椅子に忘れてきた小枝

黒石市 相馬英三

進学を諦め今日もミシン踏む

占いを信じはせぬが不安なり

時々地球の生命考える

終電車吞んでいないと恥ずかしい

鳥取市 山田草人

親のプログラムをナウに書き換える

攪乱の鬼が次善の策を出す

朝顔がええ顔しとるちよっとの間

自画像はちび筆で描くと決めている

堺市 矢倉五月

初恋も酒のさかなに同窓会

夏祭幼馴染を誘い出す

ジャンケンでいつもパー出すお人好し
投稿者顔は知らぬが名に馴染み

貝塚市 池田 寿美子

木漏れ陽に竹林の私語聞いてみる

喝采が届かぬ蔭の骨折損

肩書を失くして円い貌になる

久々に入歯の仲間と初鯉

静岡市 沢田 きん

花形の足跡つけて猫の客

みつ蜂の甘い言葉へ許す花

顔ばかり磨かないでと靴が拗ね

子だくさん過保護もなくて育ち過ぎ

尼崎市 山田 保蔵

難聴でトント聞えぬよい話

雑草も踏みつけられた意地がある

アゴヒゲの名刺はタダで帰らない

気ままもの叱る母さん気ままする

新発田市 上鈴木 春枝

一円貨夫の財布で落ち着けず

見送りを信じ振り向く曲がり角

夫からの電話用件だけで切れ

割り勘へ無理をしました二日酔

島根県 小田川 智重子

みそ汁をちよつと濃くして今朝の膳

新品のタオル額の汗きらう

目の位置に時計が置いてある客間

大学出と肩を並べて書を習う

藤井寺市 高田 美代子

インテリの妻で包丁錆びてくる

樹に登る山の向うが見たいから

怖いことコンピュータに喋らせる

用済みのてるてる坊主がぶらさがり

寝屋川市 太田 藍子

教育費増えて日曜はゴロ寝

決めかねて一つずつ買っておまんじゅう

雨つづきアイデア料理も底をつき

噂とは違う相手と結婚し

静岡市 安本 孝平

自画像に自問自答の癖がつく

厳しさと頼り甲斐ある父の胸

転落の詩集奏でる粗大ゴミ

七癖の一つを隠す妻の知恵

久留米市 中垣 米之

SLが消え人情も薄くなり

サングラスはずすと優しい娘に還る

タカガ阪神サレド阪神アア猛虎

妻テレビ僕はステレオ断層よ

大阪市 山田 妙子

無い袖が時々振れる世のこわさ

倅せの片道切符は手離せぬ

トントんと事が運んでこわくなる

花粉症梅田のビルにもせめて来る

大阪市 井上白峰

妙案にふっと吐き出すタバコの輪

定退の気楽さ今日もルーブタイ

足跡に内助の功がつきまとう

居眠りが同じ真を繰り返す

吹田市 栗谷春子

孫ひとりものを見つめる目になって

桂林の写真に欠けた歯を思い

蒸発が出来たら虎杖でもさがそう

茶も菓子も五月の薫りいっぱい

守口市 結城君子

新緑はこんな色かと立ちどまり

地唄舞の姿が生きる亡姑の額

友訪えばここでも出会う豆御飯

冬物をしまいい切らずに早や立夏

岡山市 清水悠貴女

安楽死の切符はしくて合掌す

歯が欠けて芯もいびつな夫婦ゴマ

かきつばたに降る雨なればむらさきに

開け放つ障子を白く白く張る

草津市 久保和友

中国へ旅

蓑と笠ジャンクの姿ここにはない

五顔六色哀しい芸に拍手する

九点三刻日本の「おしん」のテレビ見る

瀬江下りところに鳥が寄ってくる

尼崎市 森安夢之助

うつむいているけどポスト狙っている

渦の巻く真中に居てくたびれる

紳士面して跡取りが帰って来た

噛みついて損ばかりする男です

河内長野市 大西文次

三つ目の辻で後ろを振り返る

ごもつともごもつともです妻の愚痴

縄のれん潜れば仲間たんという

大掃除どこへ逃げてでも邪魔にされ

米子市 足立由美子

青畳五月の風と空に合う

何事か妙に荒れてる風の音

女神にもきつとあるだろ泣きたい日

佐賀市 江口萬亀子

シグナルが赤赤赤で気がかわり

月番をかわつてもらう母の病み

打ち水にパニック起きる蟻の列

静岡市 西村千代

打ちあけぬままに別れの駅に立つ

逢えそうな気がし一汽車早く乗る

吊り橋を渡ってからの迷い道

熊本市 北川一進

次点ではマスコミ遠慮するマイク

結局は引分けだった乱打戦

酒・煙草止めてみたらとは無情

熊本県 岩切 康子

永続表彰ある日引き際考える

健診を気楽に受ける自信体

一人暮し気楽なものとは他人は決め

熊本市 鶴田 謹爾

裏通りしずかな店で語り合い

郊外に出でてスミレの畑に逢い

初夏の陽を待っていましたペダル踏む

鳴門市 八木 芳水

茶柱を信じる母へよい便り

それとなく子に見せておく地獄絵図

虫のよい話互いにそう思う

和歌山市 青枝 鉄治

溪流に装備一流釣果ゼロ

ドイツ語の癌のスペルを辞書にきく

この柄に身覚えのある貸し衣裳

岡山市 中嶋 千恵子

半分に聞いて歩幅の合う話

三歳児パソコン欲しいとひとり言

名目は何であろうとサア乾杯

和歌山県 三宅 保

風のない日は退屈な鯉幟

肩書がついて名刺を出したがる

こんなにも食べているのか冷蔵庫

広島県 森川 抜智

奈良漬が好きだと言えばまた届き

遺書よりも佳い句を一句残したい

三月の入試合格発表の朝

合格を知らせに来たか庭に鳩

和歌山市 田中 輝子

答一つ出して静かな雨になる

諦めの底に母居る父も居る

足手まといの電話をかける思慕一途

堺市 宮本 かりん

やましがついおしゃべりになって来る

飛ばされた位置を示して芽がのびる

流し目をすれば野良犬ついてくる

堺市 山本 半銭

冷やっこいよいよ夏は本番に

里帰りして来た声がはずんでる

旅の空大阪弁が値切ってる

竹原市 石原 淑子

ゆきずりに優しさもろうた牡丹寺

面白い話の好きなダイニング

高値でもカーネーション翔ぶ母の日よ

大阪市 亀井 円女

動物の子別れを見ては泣いている

野仏のどれもこれもが亡母に見える

自画像をちよつと美人に画いておく

堺市 梶本 靖郎

連休も共に休めぬ共稼ぎ

ドル安で来る外人もしぶくなり

いい言葉探す間に話題それ

岡山県 千 原 理 恵

鉢巻の父ちゃん沖へ出たまんな

家中で一番威張る三歳児

遊び上手な男と暮す泣きボクロ

桜井市 前 山 美恵子

ふと夜中隣のいびきに感心し

曇のち晴ですごちそう作りましよ

苦勞する子がいてコンパスのなかにいる

米子市 門 脇 晶 子

二人三脚そろそろ紐がとけました

風の音ききわけて行く森の道

ひたすらに月と歩いて海に出る

兵庫県 森 脇 和 子

行きずりにロマンを拾う太鼓橋

追伸へ本音匂わす花言葉

石一つ投げていらだち抑えとこ

和泉市 中 川 楓

売上税選挙に火種つけまわる

何もかも胸にしずめる熱いお茶

水たまり老母のリズムくるわせる

倉敷市 田 辺 灸 六

元気だと言われるほどの医者通い

強がりも言っても注射には勝てぬ

本心は味方を騙すのが最初

大阪市 川 原 章 久

落書の壁が泣いてる子供の計

旬が来て旬の野菜を食べ飽きて

拝観の列が戻った坂の街

高槻市 津 田 スミ子

豆腐屋を待たせてサイフ取りに入る

鍋の中えんどう豆がジャンプする

お隣に留守をたのんで春うらら

尼崎市 木 下 義 嗣

腰上げて空を見上げる潮干狩

決心をつけて一人の旅に出る

裏切った女の電話になやまされ

和歌山市 森 茜

飲んで泣く女ぎりぎりに美しい

幸せになってから友へだす手紙

手漉和紙心をこめて書きたより

箕面市 椎 江 清 芳

古ぼけていても時計の正直さ

狭い店壁遊ばさず物を吊り

アルバムにモンペ姿の母を見る

静岡市 浅 子 まつゑ

礼文島エーデルワイス白い花

昆布巻の中からあゆが顔を出し

土地探し疲れるだけが足に来る

高槻市 芦 田 静 江

三本のビール二人のさつき晴れ

不退転風が厳しい曲り角

山茶花の今年芽吹かぬ夫の忌に

尼崎市 吉 永 伊三郎

すっかり呆けましたなどとワープロで

補聴器を外して騒ぎ切り抜ける

囁きもぐちも聞いている波枕

島根県 菅 田 かつ子

飴玉が甘い朝です靴が鳴る

神棚へお願い事がまたふえる

午後からは天気予報に裏切られ

十和田市 阿 部 進

孫がきて休む暇ない祖母の腕

体重に似合わず心やせている

もぐら叩き女は手加減などしない

唐津市 浜 本 治 幸

性格は変らぬものよ顔に出る

のどもとを過ぎればあとは悔いばかり

あまりにも近くにあって疎遠なり

京都市 小 林 英 子

ヒヤシンスのぞいてみたい旅日記

綿ぼうし風の出番を待っている

野鳩からコールサインをもらいう窓

青森県 福 士 ト キ

食卓がパンとごはんで二分され

春爛漫ちよつぱり翺んでみたくなり

おんぶしてくれるだろうか孫の背な

山口県 高 崎 雀 声

これ以上ほめ言葉ない祝辞継ぐ

同窓会老いを励ます声ばかり

膳の上春が並んでまだ寒い

鳥取県 山 根 八 重

母というでかい財産亡くしたよ

シャボン玉きれいな色は短かすぎ

茶柱が私にヒントくれた朝

米子市 小 村 てい子

六〇歳ロマンを手繰るメガネ換え

抜けた歯をじつと見ていて泣き虫に

喫茶店ダークスツツと待ち合せ

竹原市 岩 本 笑 子

完成の一步手前の深呼吸

ギブアップ妻を残しては行けぬ

宿題へ父子の意見がちと違う

福岡市 吉 川 一 郎

中流で堰止められた兎小屋

補聴器が四季の噂に煽られる

可笑しくてやがて哀しいボケ始め

鳥取県 津 村 八重子

蝶の寝言は花こっそりと聞いている

高い肉にらみ野菜をたんと買う

夏休み蟬の受難を許されよ

熊本県 立 道 善太郎

生きて行く自信をつけてくれた妻

お茶煎りを終えてお茶のみ母のこと

手もみの茶便りも添えて宅急便

静岡市

大石 たく

裏庭にひっそり咲いたすみれ草

毎日が基本通りにならない世

若かりし頃の恩師に夢で逢い

尼崎市

尾宮 弘治

病床に鰻欲しがる程に癒え

スナツプの隅にいる娘が現在の妻

十階で小さく威張る孫の鯉

泉南市

坂根 流水

人住まぬ生家の前に竹ちつくす

散歩みちゲートボールをすすめらる

和尚さんお読みなさいと経くれる

ロサンゼルス市

加藤 明美

ワイキキの浜辺に映えるサンセット

春の陽に眠気を誘う針仕事

母と選るドレスに嫁ぐ日も間近

岡山市

後安 ふさえ

七分がゆ食べて嬉しい回復期

夫婦喧嘩うらやましいと寡婦の友

温い一言老いの血をわかつ

静岡市

丹羽 定次

ふるさとも帰ってみれば臭いなし

戸障子の破れで子等の元氣知る

夕焼に想い出す人美しい

愛媛県

石手 武

底をつきストロー変な音を出し

曖昧な微笑に男惑わされ

年上を理由に厭な役がくる

鳥取県

西川 和子

家の新人類麦飯を食べている

郷愁に古里の地図又広げ

六帖のピアノに金魚鉢おこう

今治市

渡邊 伊津志

褒めるのが上手な母は聞き上手

何時の間に主役になった貰い猫

エプロンの白さで母の元氣知る

島根県

喜島 ノブ

あっさりと縁切りました酒たばこ

音沙汰もなく珍客が不意に来る

ごつい手で息子が盛った母のめし

大阪市

榎本 落児

大阪はマイドマイドで用が足り

石仏にあまえかけてる黒揚羽

野良犬は野良犬なりの意地を持ち

岡山市

戸田 種子

百姓で一生終る鍬を振る

性格が弱いばかりに馬鹿にされ

年金を使うて趣味に生きる母

唐津市

入江 喜久夫

淑やかに見えたか妻を友は賞め

髪型を変えても幸せ近寄らず

賛成といわず辻棲合わす友

川西市 田中喜俊

N T T 持たぬ株だが気にかかり

今日もまた画布に絵具のせきれず

同年代会えば血圧案じあい

田辺市 染道佳明

ラケットに五月の風を遊ばせる

退屈なブランコゆれる午前二時

表彰台上的とききに蹴蹴く

佐賀市 古川一徳

凡人の猿真似貧しき透けてみえ

日の丸を自慢して立つ父の胸

勝ち負けは言うまい同じ輪の中で

岡山県 江口有一朗

谷川に和して動ぜず水車回う

平凡な倅せ大きく深呼吸

風落ちて残月よぎる鳥の影

弘前市 真喜内 實

ハトポップ朝ですりんご咲きました

休耕をよろこぶ鴨が群れている

子の誕生夫婦に増えるりんごの樹

静岡市 片平静代

ゲートボール広場の空気を春にする

ライバルと肩を組んでた若いころ

お隣はゲートも出来る庭を持ち

八尾市 椎尾公子

山墓へ花見かねての老夫婦

讃岐富士薩摩富士とて相似たり

蛇の目傘舞妓が通る春の雨

豊中市 三宅 つえ子

思いどおり行く日いかぬ日車椅子

誰にでも笑顔を返す車椅子

主婦の座を守り続ける車椅子

島根県 岩田三和

児をだいて小川をまたぐハイキング

ポケットの小銭ならして喫茶店

コンパスでえがく円では丸すぎる

八尾市 松下蕉露

花嫁の父の震えと霞草

先方の敵意伝わって来る握手

頼まれた葉書が未だポケットに

藤井寺市 菊地 繁男

手の平を返したように退院許可

いらっしやいは客のふところのぞく目か

号令の届かぬ後はふざけてる

和歌山県 山田 久子

耳底に一言残し風は去り

冷酒で捨てる哀しみ知っている

改名改印運開くにも金がいり

奈良県 和田 萬里

楽しげにタンポポ風と翔んでゆき

いろいろと緑があつてハイキング

囀りとみどり微風午後ひとり

流山市 神田 治

嬉しさは浅瀬を渡る母性愛

町内の耳へ姑のアドバイス

蛙でさえ忘れていない故郷のこと

岡山県 伏見 すみれ

陳列をすれば盆栽格が出来

色のない世界が見える白い杖

目立たないうちに仲人頼み込み

榎原市 西本 保夫

店先で半分分けにする女

犬と遊ぶ妻へは全自動洗濯機

立ち読みで手相の本を見ておぼえ

豊中市 一瀬 福一

この歌手も皿を洗った過去をもつ

女房も帯をしめれば咲くボタン

気まぐれに買えば当たった宝クジ

岡山県 牧野 秀香

大空に威勢を見せて泳ぐ鯉

病む友に毒舌交せて力づけ

明るさに人の心が寄ってくる

大阪市 吐田 純子

西国三十三所巡り

石段の一つ一つにおく懺悔

春がすみ竹生島へのある祈り

庇い合う二人へ逃げた向い風

お雛様飾って部屋がせまくなり

ふる里の水はとてもうまかった

貧しさを裏でからかう試着室

母さんの使う鉢はよく切れる

子備校で学び大学では遊ぶ

仲良しはライバル意識もまた強い

大欠伸拾ってくれる夫がいる

言い勝ってむなしい夜にしてしまふ

麦笛を少し音痴で吹いてみた

麦藁帽子赤い服でも似合います

娘が二人食べる話に着る話

意地悪も教えられてる新社員

嵯峨野路は竹の音する風に会う

青年の顔が明るいUターン

磯の香に包まれ母の宅急便

水漕の魚の群れに明日はない

口喧嘩一ラウンドで妻に負け

尼崎市 中澤 向西

静岡市 中川 みつ

藤井寺市 福元 みのる

和歌山県 森 三枝子

鳥取県 田村 きみ子

河内長野市 植村 喜代

大阪市 今西 静子

静岡市 久保 きぬ

八尾市 鷺見 章

ちぎり絵の指から散らす牡丹の朱

愛媛県 八塚 三五島

つり銭をくれる女の指が触れ
旧道に回って山の良さを知る

吹田市 山田 里子

回覧板ついでに孫の写真見せ
毅然たる白てっせんへバラの思慕

静岡市 柳 沢 たま

コチコチと淋しげに鳴る古時計
病んでみて優しい嫁に惚れ直し

豊中市 小林 一夫

銭湯で父のないことなど話し
電卓の数字も見せて売る気なり

静岡市 滝花 喜平

話し好き聞く人がいて長くなり
家中を笑わす孫は喋り好き

大阪市 横山 為子

仲好しと語り明かした旅の宿
遊んではおれぬ不況が追って来る

鳥取県 乾 隆風

どたんばを苦い薬で切り抜ける
いいにくい言葉を眉に喋らせる

岡山県 杉本 伊久栄

若き日を偲んでナツメロ口ずさみ
明日の計立てて日記のページ閉じ

呉市 蔵重 成人

民謡を歌う故郷捨てている
腹話術鏡相手に確かめる

吹田市 西岡 豊

水割がきいてきました熟女の瞳
一輪の花を掲げて茶の講座

鳥取県 黒田 くに子

水枕かえて代ってやりたい夜
休日の午睡へ邪魔になるピアノ

岡山県 富坂 志重

だまされて季節感無い茄子胡瓜
時間との戦い始まる靴の音

青森県 波 ただお

筆持って色紙の上で迷ってる
バードウィーク巣箱の穴からコンニチワ

大阪市 宮下 とし

へボ医者とののしりながら又来てる
人だかりのぞいて見ればなぐり合い

静岡市 杉山 やす

春日和どきんとさせる人が来る
春風が目出たい話連れて来る

岡山県 土居 ひでの

反抗期ほんまは味方がほしいから
親と兎の絆を回す風車

岡山県 福原 悦子

静物画すこし優しい花器を書く
やわらかい雨が絵にする牡丹園

米子市 大田 みさと

歩いても走っても着くゴールです
向かないで後姿のままで居て

大阪市 島路 太郎

晴れた日の空へ小鳥を解き放つ
恋捨てた女均等法に生き

鳥取県 鈴木 ふみ子

屈強な男に吠える海の波
万歩計雨にぬれてもさわがない

弘前市 小寺 ギホウ

鏡に向って昨夜の顔を消す
青りんごなんぼに売れる袋掛け

鳥取県 乾 喜与志

実直な西瓜がでかく実りだす
天を衝く竹の子すごい自己主張

京都市 森 川 春子

道問えば人相よい人連れてくれ
朝寝坊パン半分にしとくなり

岡山県 池田 半仙

飼い主の方が散歩を犬にされ
金を持つ程度で人をランクする

岡山県 後安 江山

親孝行そんな言葉もありました
義理一つ果して晴れる雨上り

静岡市 三浦 つね

一帖が小さく見える大広間
勉強の出来が悪いが遅刻せず

泉佐野市 真崎 浪速子

野仏に知らぬ振りして花開く
車内販売という弁当の味気なさ

静岡市 青柳 金吾

追憶の足跡訪ね老いの旅
一徹に技を守って裏住い

大阪市 堀口 欣一

道端にオヤたんぼが咲いている
鯉のぼり湖西は今が田植どき

和歌山県 北山 凡太

投票へ決め手はやはり義理と欲
義理に詰ってつい承知してしまふ

兵庫県 奥野 テル

姿見にしぶさをたたむ姑の帯
ネオンなどない山里の灯の平和

豊中市 玉井 房子

“あんさんはどなたはんで”と恍惚の姉
歯が入る私は元の私かしら

京都市 山脇 正之

年老いて好物ばかり禁止され
ウインドに飾りたいよに孫育ち

富田林市 大澤 三四子

飽食で気持ち貧しい花見宴

燃えかすもお守りとなるお水取り

寝屋川市

立床晴風

馴れ染めは傘差し掛けてあげただけ
イヤリング夫がくれる気味悪さ

唐津市

野田旭恒

秘湯までギャルの狸に占拠され
残業で帰る夫の丸い背

唐津市

原野常善

酒は得手歌は苦手のクラス会
落選の慰めはそつと裏手から

八戸市

島田昭治

泥棒と思う婿だが頼もしい
もう一度殴ってほしい亡父恋し

島根県

今川三津江

よいとこへ来たと茶話坐りこみ
朝の冷え五月というに風邪をひき

新宮市

船越正

紀勢線ビールがうまい海光る
車窓より目ざしの如く鯉幟

大阪市

平井露芳

テレホンカード男もついつい長電話

金比羅大歌舞伎

演る方も昔に帰る大歌舞伎

東大阪市

大平太一郎

網棚に朝刊も行く通勤車

風見鶏許されませぬ世界の眼

呉市岡田寿美礼

散歩して春陽に一枚脱がされた
元氣かと声かけられて腰のばし

岸和田市三輪通彦

開店の粗品に長い列つくる
菅公と同じ気持になる左遷

出雲市久谷まこと

塾通い子の思惑を塗り替える
若竹が勢揃いして暑氣払う

大阪市富岡温子

連休はやたらアクビの多い午後
振り向かぬ夫へ手を振る業っ腹

岡山県平田たけよ

近道を曲がれば里の灯が招く
打水の庭に父子のへぼ将棋

和歌山市山田高夫

爪に垢溜めパチンコに浸りきる
一気飲みして憂さ晴らす五月病

出雲市高橋きよし

意思疎通どこの骨やら馬が合い
ブンとくる木の香を吸うてマイホーム

静岡市谷

清

丹精が孫誕生に合わせ咲く
孫軽く抱きたいばかりにパールを

奈良市 米田恭昌
日時計もサボタージュする花曇り
美しさ花音痴にもわかります

泉佐野市 大工静子
見も知らぬ人と語らう杖同士
喪の手伝い古里風を語り合い

鳥根県 児玉幸子
新緑へ吸いこまれそう山のだ
茶摘み歌なれた手つきへ風渡る

鳥取県 久野野草
耐え抜いた老母の背まるく茶をすす
極楽に向う発車のベル鳴らす

大阪市 喜多佐津乃
風の私語聞く参道の石畳
娘のお産安産祈願山ほどに

和歌山県 田中隆積
学問にひたすら打ち込む優等生
先生の長所ひき出す生徒達

鳥取県 木下芙葉
茶柱に今日の運勢かけて見る
いなば富士背に恩師句碑初夏に立ち

和歌山県 三谷周三
老いてまだ甘える女そばに居り
ミシン踏む子の下着から幸を知り

熊木県 石本 織

角とれた父を大事にしてくれる
病院へ行くと老人友が居る

大阪市 松岡久留美
朝日さす縁側で祖母ひとり言
サンルーム倅せに酔う老夫婦

大阪市 渡部トキワ
琵琶湖上レガッタの背に風薫る
水上バス我が物顔のツインビル

奈良市 井上大
堂塔を見下す昭和の恥知らず
スーパで考えている内需かな

豊中市 額田明吉
終電が延びたとたんに値上げされ
長谷寺の牡丹を眺め人眺め

大阪市 朝田晃世
五月晴 港まつりに鯉泳ぐ
腰をすえ三途の川で妻を待ち

吹田市 木原 絹
腰をすえ三途の川で妻を待ち
制服になじめずそわそわ春の道

枚方市 二宮 撰子
春の朝空の青さがまぶしくて
たん生日家ぞくでみんなケーキ食べ

枚方市 二宮 正彦
(中二)

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

橘 高 薫 風

大黄河さて箱庭もまた愉し

谷 垣 史 好

黄濁の水を流して五四〇〇キロ、黄河のス
ケールは想像に余る。さはさりながら、地肌
むき出しの流域の山に較べ、まるで箱庭の
風情ながら、日本の川の清らかさ、山の緑の
美しさは格別で、大いに誇って良い。

辞書繰ってろくな字のない女偏

岸 野 あやめ

なるほどなるほど、奴奸妄妬羨媚と目白
押しに並ぶ女偏の字は、男尊女卑の世を象徴
する。中に好の一字を見付け氣を好くした。

ふところ手電馬を真似てみたけれど

赤 川 菊 野

桂浜には竜馬の像が海を睥睨している。共
に討たれた中岡慎太郎の像と広い海を隔てて
向き合っているのだという。雄渾で余韻ある
結語はすばらしく、男性の作品だと思った。

じいちゃんが好きとは可成り出来た奴

矢 野 佳 雲

ぶつきらばうな表現で孫への愛情の深さを
示された。一見乱暴ともみえる下半句は仲々
に緻密で、手放しの情愛ぶりも可成りのもの
である。

取扱注意の札を医者がくれ

高 杉 鬼 遊

「こわれもの注意」「天地無用」の貼り紙の
必要な年になって来た。

口答え大事な人が出来たよう

吉 岡 美 房

おとなしい娘が、父親にはじめて口答えを
した。後へは引かぬと思わせる氣息に、父は
娘の変化成長を感じ取る。

嘘ひとつ入れて話が盛り上がる

堀 端 三 男

河岸変えてもとの話へ逆戻り

石 川 侃 流 洞

過去はみな笑い話につくり替え

都 倉 求 芽

話三題、それぞれ味のある句で、濃淡はあ
ろうが、酒の匂いが漂っていきそう。

平凡の良さしみじみと通夜の席

津 守 柳 伸

人の死という厳肅な事実、上下つけた体
面を慮るか。作者は否と言ひ、そのような時
ほど、裸の付き合ひの庶民の良さを感じると
言うのだ。

不思議にも涙の似合う白い足袋

波 多 野 五 楽 庵

喜びにつけ悲しみにつけ涙するのが人生と

いうもの。慶巾交々へ白足袋の訝え。

噴水の高さが変わり園も春

片 上 明 水

春はすべてのものが噴出する。ましてや噴
水においてをや。春を端的に象徴させたのが
噴水であったことにユニークな発見がある。

悪人になれぬサクラの散るばかり

中 川 滋 雀

落魄慨嘆の身の上でありながら、悪に走れ
ぬ人物の孤影が、春日落花の華やかな舞台に
あつて一際あわが深い。私はこの句から、
石川五右衛門の「絶景かな」を想起した。

二拍子のリズムに乘れぬ生きる道

若 宮 武 雄

勇往邁進という言葉があつた。人生もリス
ムに乗り過ぎると破綻の道をたどる。「重き
荷を負いて遠き道を行く」しかないらしい。

春愁やなんにもせず五十一年

新 家 完 司

あなたは五十年、私なら六十年だ。人それ
ぞれ同じ感慨を抱くのではなからうか。俳句
的表現に余情が、大まかな述懐に人柄が強調
された。空空漠漠の過去の長さに、今一刻の
春の物思いが生きる。今のいのちを生かすこ
とが、「いのちある句」につながると思ふ。

均等法女は乳を飲ませます

春 城 武 庫 坊

ポストまで歩いただけの雨続き

平 松 か す み

教会の誓い忘れるほど生きた

菅 井 と も 子

愛染帖

橘高薫風選

織女星逢うてわかれて織るばかり
通リゃんせそしてかならず戻りゃんせ
哀しみをまるめていると船になる
上弦の月にも酒をついでやろ
鳥取県 新家 完司
倉吉市 田中 八太郎
ロボットよ酒は美味いぞさまあみろ
地下足袋は減塩なんか大嫌い
和歌山市 西山 幸
冷えた手で繰るロザリオが冷えてくる
生きてゆく難しさかな紫陽花も
青森市 工藤 甲吉
蒼天や胃癌検診異常なし
初恋が無かったとは君ウソだらう
笠岡市 木山 遠二
寝たきりに妻はにこにこ叱られる
寝たきりが呼べば走って猫が来る
堺市 高橋 千万子
夫婦喧嘩の合間あいまに浴衣縫い
人形を逆さに抱いて猿真顔

図書館の隅で一日匿れよう
春城 年代
尼崎市
雑踏の梅田に戻る寛ぎよ
奥田 みつ子
西宮市
鈴つける役目を終えてから不遇
大坂市 亀井 円女
電話機を拭いて電話を待っている
死ぬ時は自分のドラマに手を振ろう
攻防戦のあととはスカッと嫁姑
今治市 山田 宝保
観想に現前するは慈父菩薩
島根県 小砂 白汀
楼蘭と自分の文字で描いて見る
固いめのご飯が好きなさるすべり
三日見ぬ白木蓮のさらし首
鳥取県 江原 とみお
恍惚の海で鯨をおっている
下町の意地デパートへ背をむける
堺市 桜沢 あかり
貧乏を知らずに白い麦のめし
子育てがすんでポツンと古ミシン
今治市 渡辺 伊津志
生活のための必死な鳶の舞
良い芽だと思ふ豊かにふくらんで
豊中市 田中正坊
小さきは小さく泳ぐ鯉のぼり
ロボットのよう初孫五歩六歩
名古屋市 藤井 高子
すぐ乾く髪を洗ってせんもなし
名古屋市中 越村 枯梢
千手観音私の缦る手が足りぬ

金太郎飴から進めない私
政岡 日枝子
米子市
恋う人はみな夏に逝き正秋忌
前川 千賀子
近江八幡市
鉛筆で耕す刻に要る地酒
神平 狂虎
和歌山市
玉手箱開けたら夫婦和合の書
浜田市 佐々木 裕
守口市
年回にまぶしい人が来合わせる
森 川 まさお
米子市
贖罪に赤い糸吐くまんじゅしやげ
米子市 青戸 田鶴
米子市 川上 より子
櫓こげば君の水輪を裂く故に
寝屋川市 岸野 あやめ
空々漠々ひとりで湯豆腐を食べ
鳥取県 土橋 螢
後退りした足跡は消しておく
寝屋川市 宮尾 あいき
ガキ大将先ずそれで良し武者兜
藤井寺市 福元 稔
大学は遊ぶところと見付けたら
堺市 山本 半銭
立食いのきつねうどんに帰りつく
岡山市 矢内 寿恵子
千手観音のみ手につるした千の罪
羽曳野市 中村 優
竹林を這う風の音や父が見え
吹田市 栗谷 春子
新茶にはそぐわぬニュースしきりなり
宝塚市 丸山 よし津

事ごとに下手な日だった夜の雨

福岡市

吉川 一郎

花一輪五月の母は美しい

大阪市

古川 美津枝

旅行けばわが身しみじみ老いを知る

鳥取県

清水 一保

絵だらうかこの豪なる五月晴

島根県

船津 重信

親の欲じつと見下ろす鯉のぼり

和歌山市

松原 寿子

ひとつの計ひとつの誕生輪廻とや

岸和田市

古野 ひで

青空がひとみに痛い紙の鶴

伊丹市

榎谷 寿馬

バラ色の過去に触れない坐りだこ

今治市

月原 宵明

猫の目の底に嫉妬の凍てつける

富田林市

藤田 泰子

吊り橋の途中で聞く死者の声

真面目市

椎江 清芳

淋しいと思う夕日の燃える彩

豊中市

上田 登志実

横顔へ世間話を美容院

京都市

堀江 光子

このところどうも老妻理屈ばい

茨木市

堀良 江

アルバイト学校の差で値が違い

鳥取県

森川 春子

観劇も旅も花見もこのボツト

富田林市

片岡 智恵子

桐の花咲いて忘れぬ北の窓

岡山県

川端 柳子

先帝祭女の歴史見え隠れ

和泉市

岡井 やすお

泡立草一喜一憂する噂

島根県

神原 秀子

年いつか親を越えてる親不幸

西条市

片上 明水

病んだ日は遠くに今年のうつき咲く

岡山県

清水 悠貴女

柑橘の種類で伊子の季が替わり

大阪市

島路 太郎

誰からも愛されてない栗の花

岡山県

松本 元江

男性と女性のこの世枇杷をもぐ

岡山県

江口 有一朗

花遊び孫に教えて野に昏れる

岡山県

土居 耕花

愛情の槌で小さな殻破る

高槻市

辻 白溪子

葉桜に來て来年の事を言う

岡山県

田村 新造

JR愛想悪いのも残し

茨木市

井上 森生

食卓に旬が盛られて瀬戸ぬくし

広島県

大平 太一郎

照れくさや女房を誘うすしのれん

寝屋川市

江口 度

顧みて果しない道行けと祖父

和歌山市

桜井 千秀

悠悠自適大の毛並も梓のうち

流山市

神田 治

こつそりとやつてる妻のレオタード

今治市

矢野 佳雲

忘恩の徒とすれすれで生きている

佐賀市

古川 一徳

老人のガッツポーズを唾うまい

岡山県

山本 玉恵

千の憶い伏せてつづった一行詩

米子市

小西 雄々

百円のノートへ能のない男

吹田市

後藤 火鳥

若返りカラオケ歌う旅の恥

愛媛県

八塚 三五島

燃え尽きるいのち声まで囁れ尽す

和歌山市

山田 高天

出世とは無縁初老が青を着る

広島市

流奈美子

偏差値のはさまで青い実が落ちる

和歌山県

北山 凡太

マウンドの男の視野は円となる

和泉市

西岡 洛醉

盃に写る男は生きる顔

奈良市

米田 恭昌

民家集落良寛さんが出て来そう

愛媛県

藤原 無想

桜散る石の地蔵さん花衣

米子市

野坂 なみ

そして今善玉ばかり馬鹿を見た

鳥取県

西浦 小鹿

太陽がほほえんでいる大地あり

愛媛県 山崎 勲
だらしなく着て流行のだらしなさ

豊中市 奥田 満女
脳細胞思い通りに目をさまし

岡山県 千原理 恵
犬も猫も並べて家族披露する

米子市 寺 沢 みど里
肩よせて絆ぬくめる小鳥の巢

米子市 菅 井 ともし子
憧れの山がとおのく日暮れ道

米子市 金 山 夕子
飾らない素足が好きな女神です

八戸市 島 田 昭 治
無縁塚拾うゴミにもナムアミダ

東大阪市 中 尾 しんじ
信心もおついでになり花の寺

海都市 三 宅 保
生真面目を貫き通す時刻表

弘前市 斉 藤 島
葉桜もゆったり見てる花筏

米子市 茂 理 高代
降るは降るは天衣無縫のなごり雪

豊中市 辻 川 慶子
雲遊ぶ伊良湖の浜でにぎりめし

高石市 浅 野 房子
貧乏くじ引いた分だけ長生し

羽咋市 三 宅 ろ亭
裏表判らぬような君と住む

弘前市 相 馬 銀波
三割の稲田あましてする田植

大阪市 榊 本 路 児

青いから私は空も海も好き

和歌山市 木 本 文子
空箱のような美貌が鼻をつき

茅ヶ崎市 山 上 元孝
文豪の机落書き値打ちが出

兵庫県 東 浦 砥代
幾坂を越して気ままな隠居部屋

貝塚市 行 天 千代
毎日を服替えて行くパートかな

高知県 曾我部 裕
この人に自分を忘れかけた日も

大阪市 今 西 静子
看護婦の個性ピツリ外科内科

吹田市 西 岡 豊
当確に勝関あげて樽を割る

唐津市 久 保 正敏
全集は柳誌が絶えてから読む

島根県 堀 江 芳子
盲人の胸に埋めている温み

島根県 堀 江 正朗
耳鳴りを倍に耳打つ町議選

町野市 吉 川 寿美
惜春や猫がうつした偏頭痛

岸和田市 原 さよ子
お互いに年金があり老夫婦

兵庫県 北 川 とみ子
ライバルを越せる背伸びの靴をかう

西宮市 瀬 尾 六郎太
出る前が楽しゴルフのスコアよみ

岡山県 灰 原 泰子
こんな日は殊更ゆるむ涙壺

米子市 木 村 富美子
一服の薄茶一句を誘い出す

岡山県 土 居 ひでの
釘折れの文字をたどれば母の無事

唐津市 浜 本 治幸
弓引けば鉄砲弾が飛んでくる

唐津市 原 野 常善
病院の窓の病む子の鯉織り

広島県 森 川 抜智
耳遠く皆大声になる家庭

米子市 新 正子
マイホーム生えた雑草僕のもの

唐津市 浜 本 ちよ
呱呱の声わが家の夜明け叫んでる

豊中市 中核塚三丁目13-15
投句先 千560

橋高薫風苑(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題「癖」 選者 橋高薫風

締切 7月10日

投句先 (ハガキに三句以内)

大阪市東区馬場町3-43

NHK大阪放送局「ふれあいラ
ジオセンター」係

発表 7月26日(日)ラジオ第一放送
午前11時5分から

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

月原 宵明

円高・エイズ・売上税と本年前半列島を襲った嵐は息づまりそうで、明るい、ほのぼのとしたものが欲しかったが、川柳はこれに応えてくれたので今回は明るいものを拾った。
落書きが上手天才かも知れぬ

松川 芳子

幼にして才能のはしりが現われるもので、ブロック塀の漫画は見事であつたと親馬鹿は思う。白壁の土蔵があれば、寺院の白塀が近くになれば、それこそ大変なものである。

新人類やはりお守り持つてゐる

永田 俊子

日本の単一民族の中に「新人類」が誕生した。こうした現代新語を川柳子が見逃す筈がない。手厳しく槍玉にあげてゆくその一つに新人類も「人」であることを喝破する

料理用と妻が書いてる酒の瓶

北川 一進

家の中のこと、しかも台所のことなら、殊

更に「料理用」など書かなくともよいものを深夜冷蔵庫を開けて、飲みものを探すがあるからか。まさか一進さんでは……。

かんじんな事は聴いてた老母の耳

菅田 かつ子

老母の耳は精巧だったり、不良だったりして、勝手○○とも言う。かんじんな事とはお嫁さんの極めて痛いところであらう。

年金の暮しで鰯好きになり

安本 孝平

年金の枠内で第二の人生に立ち向う逞ましさと、諦めに似たものが入り混り、余生観ならぬ人生観が窺われ、強い開魂のようなものを感じざるを得ません。

国会中継ばやき漫才見る如し

森川 抜智

国会の質疑の状況、殊に野次の烈しさをきき、あれが選良かと思うと恥しく悲しくさえる。海を距てた米国の議会など、ユーモアいっぱいやりとりは、微笑ましいものがある。

大胆に脱いで我が家のありがたさ

杉山 やす

夏の外出帰りは皮も脱ぎたいばかりで、憩えるところは我が家である。先賢の句に「ぬぎすててうちが一番よいという」がある。何といつても我が家は有難い。

助太刀に抜いた刀が錆びている

井上 白峰

正義感に燃える熱血漢には金が無い。世の中は案外皮肉に出来ている。抜きさしならぬ

とはこの錆びた刀のことか。笑つてはならぬが笑いたくなる句である。

夫婦愛とりとめもなく笑い合い

岩切 康子

欲も得もない老夫婦の或る日か。幾度か修羅場を抜け喜怒哀楽を通り越した二人が、打ち興い笑ひこけている原因は、実に他人に言えない他愛もないことで、平和な老後です。

御馳走のように煮ている注射針

江口 万亀子

厳寒の治療室にぐつぐつ煮えているものがある。滅菌のため注射器を煮ている。治療室とご馳走の結ばれないところが皮肉で面白い。診察を待つて一冊読みあげる

高野 宵草

医師が次第に増えて時間待ちが緩和されたと思つてゐるがまだまだ。一冊なら小半日は待つたであらう。「読みあげる」とは如何にも老練な手法と感心しました。

尼さんが親子どんぶり食べている

乾 隆風

尼さんはお茶粥に梅干の非栄養的な精進料理と思ひきや、食堂で井を注文し、しかもそれが殺生禁断の親子丼だったとの驚きと、現代に生きる尼僧の逞しさを偵察したもの。

その他の共感句

ワープロに意地張つてゐる硯箱 信本 博子
バーゲンのように肩書き寄せ集め

秋元 てる

草餅のあとで胃薬のむつもり 森川まさお
お騒がせ売上税のゆきどころ 福島 紀一

苗香のむ

小出智子選

手漉き和紙万年筆と折れ合わず

大阪 西出 楓楽

しみそばかす心の灰汁が出てきたか

非常梯子まだ練習はしていません

大阪 天正 千梢

桜吹雪ままごとの子をよろこばせ

手鏡のわたしと亡母をだぶらせる

出雲 園山多賀子

れんげ草小さな借りがあった筈

負けてやる兄の力をまだ知らぬ
米子 石垣 花子

青信号疑い持ったことが無い

春雷や心の鈍を突き破り
島根 松本 文子

寡黙から饒舌になる風の向き

マンネリを拭ってくれる男文字
大阪 津守 柳伸

励まして欲しい私を叱咤する

桐の花咲いておろかな夢を見る
鳥取 さえきやえ

合掌の手から誓いがもれていく

二兎三兎追うて満開見えず終い
和歌山 福本 英子

いろいろとあつて女をまだ捨てぬ

郷愁を誘う港の灯がともり
広島 流 奈美子

キャッシュカードがいつもわたしをおびやかす

子の顔に似た夕ぐれの雲がゆく
鳥取 広本 文子さんりんぼううえいっとばかりに真紅を着る
大阪 山田 妙子かくれんぼ尻尾は見ない振りをする
藤井寺 高田美代子均等法妻もゆずれぬ票を持つ
鳥取 羽津川公乃美しく老いる白足袋白く干す
岡山 灰原 泰子お手頃な値段に合す試着室
和歌山 山口三千子朗報にふと才能を過信する
高石 浅野 房子母の忌の薔薇も牡丹にもくむべし
和歌山 西山 幸腕種におんなごころを一つまみ
和歌山 後藤 正子ネクタイの端が頬打つあいだがら
寝屋川 宮崎 菜月初心から出直す靴をはき替える
和歌山 木本 文子それなりの言い分がある薔薇の棘
大阪 上江洲勝子百面相婆はひねもす見て飽かず
米子 林 瑞枝しんみりと過去を聞いている花の下
京都 小林 英子人生暮色独楽もわたしも空まわり
岡山 嘉数兆代賀空白を埋めるヒントを子に貰う
宝塚 吉田 笑女虹消えてからの女はよく眠る
熊本 永田 俊子豊かさに馴れた無いものねだりかな
羽曳野 吉川 寿美みかづきが明日へ指切りしてくれる
島根 堀江 芳子点火しておんなは風を待っている
富山 油木 祥子波乱の過去信じられない安楽死
岡山 清水悠貴女どの景も子どもを置いて見てしまう
松原 佐藤 藤子年輪があなたを燻し銀に変え
堺 小西 小雪手抜きした料理が父をかなします
寝屋川 井上すみれ御先祖の羽振りを偲ぶ献灯籠
和歌山 桜井 千秀落粥の好きな二人は戦中派
鳥取 西川 和子

諍うているのが洩れている電話
国宝にまさる子宝もてあまし

おにぎりがこんなにくまひ花むしろ
林真理子に勝つものが二つある

娘が捨てさせてくれぬ亡夫の古帽子
世渡りのうまさ拙なさ春がゆく

結納も済んで娘が惜しくなり
子育てに明け暮れた日を懐かしむ

ゆさぶりをかけて愛情確かめる
つらぬいた愛に失うもののいくつ

責任の持たぬ相槌ふたつみつ
素通りはできぬ子安とあるお寺

プライドを捨てて仏の顔となる
花の種もらって土を買いにゆく

円高もどく吹く風と鯉のぼり
ワックスをかけて少うし若返る

五月晴れ愛に膨らむ鯉のぼり
怖がって走れば犬が追いかける

嫁がせる父の心にひそむ渦
的を射た答が返る母の皺

亡父のふみ落ちて来そうな白い雲
真髓に触れると痛みだす奥歯

淋しさは秘めて別れる駅灯り
野の草を確かめながらハイキング

尼崎 春城 年代
桜井 前山美恵子

和歌山 前田 美子
田辺 染道 佳明

高槻 河瀬 芳子
大阪 町田 達子

和歌山 松原 寿子
寝屋川 大田 藍子

大阪 板東 倫子
堺 鈴木三千代

堺 高橋千万子
富田林 片岡智恵子

茨木 堀 良江
米子 茂理 高代

大阪 松尾柳右子
貝塚 池田寿美子

倉吉 淡路ゆり子
和歌山 谷所 玉枝

岸和田 清野 こう
佐賀 寺中三枝子

大阪 川原 繁子
島根 喜島 ノブ

和歌山 森 茜
吹田 茂見よ志子

大阪 堀 いくの

麻酔からさめた娘の名をしかと呼び

米寿なおへチマコロン肌の艶

赤べんは持たないことに決めました

娘も中年生きて行く知恵教えられ

フルムーンオランダ坂に陽が沈む

孫の知恵かりてクイズの紐をとく

もぎたてと書いて朝市うりされる

初年金パーマもかけて服買つて

夫にも茶飲み友達増えてゆく

燃えるものそうと秘めて遠会釈

理由もなく逢いたくなって母を訪う

いざという時の秘策を練っておく

青森 富士 トキ
和歌山 内芝登志代

米子 大田みさと
宝塚 丸山よし津

吹田 園田 文子
出雲 小白金房子

和歌山 寺田 裕美
富田林 浦田トシエ

松原 北野 久子
吹田 山田 里子

和歌山 田中 みね
京都 山脇 タネ

それぞれの立場で、連休というのは生活のリズムが狂
うもの。こんな月にもご投句をありがとうございます。

ゴシックの一句目。古いものの良さと、現在のなとの

対照がおもしろい。二句目。さり気なく詠まれている

のに、思えばぞつとするような。三句目。子供を巣立

たせた母親の心を、夕ぐれの雲に託されました。母の思

いは複雑。四句目。「えい」とばかりに」と口語体を入

れて新鮮な作品。五句目。人の世に知らん振りをしてお

かねばならないことは多い。それは気にすれば気になる

尻尾ではあるが。

ハガキに雑詠3句 毎月10日締切

投句先 〒544 大阪市生野区勝山南1-18-10

小出智子

■追悼川柳大会に寄せて

―路郎・葭乃・生々庵三先生を偲ぶ―

旅の宿

尼 緑之助

昭和二十五年頃だったか、大会に路郎先生をお迎えした時のこと、その翌日草庵に御足労を煩わし、昼食を共にした。その頃の拙居は座敷から東、南とも見通しがよく、遙かに山を視野に入れることが出来た。先生一筆「遙山亭」と書かれた。拙居の庵号の由緒。また戦後というものの物資不十分、野菜料理で恐縮しながらの会食、今でも冷汗が残っている。

その夜、川雑まつえが歓迎会をするというので、私も松江へお供をした。湖畔の宿「なにわ旅館」故勝谷山川児の居宅。十人ばかり集まって酌み交わすの一夜だった。

終って、数日來の疲労からだったか、床に就くまで少時間、先生と二人、夜の宍道湖をぼんやり眺めていたように思う。

翌朝、昨夜書き残しの短冊に先生は一筆
男同志会話短かし旅の宿 路郎

先生の達筆、勿論保存しているが、即吟。私は性来饒舌派ではなかったから、興を欠いたことと思ったことである。

川柳家には里がよい

工 藤 甲 吉

思い起こせば二十五年前の三十七年七月二十日だった。路郎先生は橘高薫風子さんと藤村メ女さんを伴って長い長い深夜の青森駅ホームに降りられた。

三十五年秋。失語症、失書症から奇蹟的に助かり「来年になれば日本を見直す意味であつちこつちへ旅行をしたい。実現出来たら青森へも」という手紙を貰っていたので、東奥日報社の第十六回青森県川柳大会へ特別選者としてお出でを願ったのである。

大会は二十二日だったが、先生は「川柳一と筋に」と題して講演。明治三十七年からの川柳生活を皮切りに

○：川柳は人間を陶冶する手段だ。句の上
に自分の悪い点を出してみせる。君もそう

か、俺もだ」と同じように人間同士が胸を打たれる。お互いに反省していい人間になるようにすべきである。

○：人に通じない句なら作る必要はない。自分のアクを出しきると人の句になる。いい句を作って共鳴し合うことが大切だ。

○：近ごろの川柳家の川柳は、笑いから遠ざかっているが、これはよくない。

などなど勢いの赴くところ予定時間のオーバーもなんのそのと熱弁をふるわれたのが、今もあざやかによみがえり忘れることがない。大会翌日の二十三日は四人で国立公園の十和田湖を遊覧したが、

十和田湖よみなさけになれ旅人へ 路郎は、そのときの一句である。

薄暮、街にネオンがきらめき出した頃、青森の街と青森湾を眼下に「俳句は自然が相手だから山がいいだろうが川柳は人間が相手だからやはり里がいい」と帰りの車の中でもらした一と言が、今も私の耳の奥に生きている。あの温顔と共に。

路郎先生と弓削

浜 野 奇 童

路郎先生が岡山県北の農村へ足をお運び下さったのは昭和二十四年一〇月、丸山弓削平が「農村に文化の灯を」「日本一の川柳町」を

と標榜して開催した第一回西日本川柳大会であった。

私が川柳に手を染めたのは、その翌年の五月であったが、その頃の例会には「川柳雑誌社美術支部 弓削川柳社」の旗が掲げられ、先生の胸像が据えられていた記憶もある。そして、先生と弓削の結びつきを一層深くしたのは、第二回西日本川柳大会の「路郎句碑建立」であつたろう。大会の模様は、雑誌の巻頭から六ページも割かれている。

先生は、それから第七回大会まで、毎年足をお運び下さった。宿舎である「ふたば旅館」では、賑々しく前夜祭が持たれた。社会人としても、川柳人としても駆出しの私は、遠く末座から先生の酒豪ふりと、快活に話される先生のお姿とご高説を微笑ましく拝聴していたものである。故家本富主が、当時町内にあった窯元から素焼きの銚子、湯呑を持ち込み揮毫をお願いしたところ、何点かに快く応じられていたご機嫌な先生のお姿など、微笑ましい先生の一面であつた。

昭和三〇年、川柳雑誌社岡山支部に端を発した支部問題は、会長福島鉄児を随分悩ませた。鉄児の依頼で私もお願いの書を認めたが不朽洞会末席の私にさえご丁寧なご返事を下さった先生である。けれどもその内容は厳たるもので、一步も譲られるものではなかつた。先生の指導には敬意を表していたが、弓削独自の主体性を放棄することもできず、これ

を機に先生との袂を分つたのは、実に淋しいことであつた。

久米南町の町長室には「一ト握りああ人生は和にしかず」の先生の筆跡が町是として掲げられ、駅前「俺に似よ」の句碑は、四〇年の風雪の中で、通勤通学の人々に話しかけている。先生を存じ上げる者は少なくなつたが、先生は今なお弓削の地にお元氣である。

若き日の路郎先生

(松山支部設立の頃)

長 野 文 庫

早春、稀に見る快晴の二月十一日(昭和四年)建国の佳節、我等の川柳雑誌主宰者、麻生路郎先生が橋本二柳子・岩本素人を帯同し支部設立のため松山に來られた。丁度午後一時、直ちに会場に到着、道後公会堂に於て組織にかつた。支部長は浅井冷々子と決まつた。直ちに句会に移り、一題を選句の後「子規と川柳」の題下に約四十分に亘り講演後、次に二柳子が「川柳の将来」と題して講演をして聴者に多大の感銘を与えた。

一応解散、午後五時より、道後温泉望月楼に於て懇親会を始める、参加二十四名。

宴酣に及んで、一芸回しの議起り、銘々が得意の芸を披露して大いに盛上りを見せた。中でも伍健の「野球ステテコ」芽の助の「踊」時雨楼の「紀の国屋」また素人先生の「中国

語の会話」等は、流石の道後の美妓連中も煙に巻いた。因みに当日の参加者は六十三名で主な参加者は次の通り。伍健、喜峰、大棲、時雨楼、斜松楼、かき松、句浪人、広穂、双葉、花之介、一止、靈子、拓川、巨城、玄々子、柳女、大驚、芳之助、源氏、仏手相、十四公、虹、二、楊帆、逢川、水樹、芽之助、冷々子等である。なお素人氏はこれが縁となつて松山に住む事となり、川柳雑誌支部を引受けて同社の発展に貢献したが、意外な事件に巻込まれて失脚した。

なおこの記事の作者は浅井冷々子、芝田靈子氏で両氏とも今はなき人であるが、丁度六十年振りに当るので、これを取上げてみた。

臉に残る葎乃奥様

西 田 柳 宏 子

麻生路郎、葎乃夫妻並びに中島生々庵先生お三方の年忌法要並に追悼句会が高野山で舉行されるに当り、私に葎乃奥様の想い出を書くようにとのことである。現在同人の中で果して何人の方々がお三方を知っているであろうか。生々庵先生は未だしも、路郎、葎乃ご夫妻に至つては過半数以上の人がご存知ないのではなかつたと思われる。

川柳雑誌社の句会の席でちよこんと坐つてニコヤかに応対して居られたお姿……。

住吉区万代のお宅にお伺いした折にも、いつも居間兼書齋寢室の大きなベッドがでんと置かれた部屋で私達の話をも静かにニコヤカに横に坐つて聞いておられたお姿……。

そこに伺えるのは

福寿草 松に従がいそろかしこ

の句であり、常に情熱の人川柳一途に打込んだ麻生路郎に付き添い、寿美子、ロンドン、アート、奈々、梨里の五人の子女をもつけられ、母としての子育ても果された賢夫人霞乃を如実に表していると思われる。更にまた

飲んでほし やめてもほしい酒を酌ぎの句に主人を思ふ妻の気配りが伺え、先の句と共に霞乃夫人を語るに欠かせぬ二句である。

更に晩年、生駒に移られご子息アート氏の許に居られる奥様をお訪ねした折、路郎先生が岡橋宣介氏を訪ね、炬燵の中で一杯やりながらの対談を、宣介氏が炬燵に隠したテープレコーダーで録音したコピイをお土産代りにお渡しして、そのテーブを端座してじつと聴き入り時折ニコヤカに微笑しておられたお姿……。いつも静かに路郎先生に寄り添って、内助の功を果し、それでいて一杯機嫌の折には一さし舞われたお姿……。

いずれも懐しく暖かいに灼きついている。

やはり雲の上でも路郎先生を中心に亡き先輩柳友達との句座、柳宴をちよんと横に坐つてニコヤカに聴いておられると思ふ。合掌

霞乃先生の思い出

藤村 女

霞乃先生との出会いは昭和九年私の結婚の時、主人と主人の兄が路郎夫妻と親交が厚くよく店や宅に見えて夜おそくまで話して帰られていました。

霞乃先生はとてもお酒が好きで路郎先生よりはお強かったのだと思います。お二人とも川柳の道で毎日忙しく、娘さんが留守をまもっておられ、アートさんは事務所を使い走りをしていられ、又その頃辻久子さんと共にヴアイオリンのお稽古にはげんでおられたようでした。戦時中はお互いに疎開、私達は岡山から笠置へ、そして二十九年大阪へ帰り、帝塚山と東天下茶屋で近く往き来することが多くなり、川柳婦人友の会へすすめられて入会、川柳の友となりました。川柳のことでお逢いすることが多くなり本社句会の帰りはいつも法善寺横町のお店でたこ焼やお好み焼、おでんで一杯飲んで帰りをお送りするのが私の務めでした。新年句会や川柳まつりの懇親宴など先生の踊りのレコードを持ち廻ったものです。

私の一番好きだった踊りはおてもやんで、今も目の前にちらつきます。おかめの面をつけて一寸背を丸めた姿で「おてもやんあん

たこの頃」と出て来られる姿の、ひょうきんで可愛くて、とても好きでした。路郎先生のお顔もほころび楽しそうでした。その内女も教えてもらえ、とお言葉を添えて下さり霞乃先生に花傘音頭を教わり、どうにかレコードに合うよう踊れるようになりましたが、今はすっかり忘れてしまいました。

路郎先生亡き後は生駒へアートさん夫妻と共に静かに暮らしてました。

その後、戦時中、奈良と上野に近い所へ疎開したが、月ヶ瀬の梅をまだ見たことがないと申されていたので、一度二案内しようと思先生はじめ小松園さん夫妻、天笑、岳人、薫風、新之助、私と霞乃先生の九名が新之助さんと天笑さんの車に分乗、出かけました。梅見をすませ、ダムがひと目で見える江戸時代からの古い旅館でお昼に鶏鍋を囲み、句会をはじめ、色紙にそれぞれ一句ずつ旅館に残して帰宅しました。懐しい思い出です。

生々庵先生を偲びて

本田 恵二 朗

思い出は果てなく回る走馬燈

生々庵先生から頂いた沢山のお便りは洩れなく、宝物のように保存している私である。その葉書や書簡を丹念に読み返しているうちに、なつかしさのとりこにされてしまい、

時の経過を忘れてしまったことである。こまやかで温い情があふれるようなお方であったことを今更のように回顧している。

二十年ほど前に、生々庵先生と小石奥様とがお揃いでご来駕下さって、拙宅にご泊頂いて、時を忘れての歓談の花を咲かせ合った思い出を今ここに綴るスペースの無いのが残念である。その節、小石奥様から頂いたお手紙は額にして掲げたいほどのものである。超高級紙に美事な絵筆が走っている。そして定評のあるご達筆が小川のせせらぎの風情で流れている。昭和五十年四月十七日付の葉書に生々庵先生のご達筆が紙面狭しと飛んで跳ねているではないか。『只今 テレビで下津井港の光景が放映されて、それを見ながら色々感慨にふけり、なつかしい記憶を辿っています云々』先生は若き医大生の頃にも下津井を訪ねられて、夜の多島美と満月の素晴らしさに感銘されて、雅号を『津井円』と名乗っていたと述懐されていたことを私は思い起している。下津井の海の円い月を要約して『津井円』となったのだと伺っている。

何年前であつたか浜寺のお邸に薫風、久志良と私の三人が泊めて頂いて、テーマ無き放談会を開いて時を忘れてた思い出も生涯つきまとうであろう超佳境である。

先生ご夫妻がご来駕下さった頃には世紀の大橋などという語は夢にも無かつたことだが今や超大橋が美事な姿を見せながら完成へ着

々と近づきつつある。先生も雲の上から、その姿を飽きず眺めておられることであろう。先生のご冥福を心からお祈り申し上げると共に小石奥様のご健勝をお祈りしてペンを置く。

和と礼節

水粉千翁

多くの会員を擁するその頂天の人はやはり和と礼節が大切だということを生々庵先生は率先遂行されておられたと思います。

こちらの大会に何回かご足労を願ったのですが、四十三年五月の大会での祝詞の一節に次のようなものがありました。

『私の担当題が、円満』です。和を以て貴しとするという聖徳太子のことばですが、和と円満ということであります。そして和と円満にプラスするのがお互いが尊敬し合うということになります。

円満の兼題に続いて、『満足』『拝む』と並んでいますが、偶然と言えないような出題に驚いています。この三題のつながりは極めて大切な意義があります。和の上に更に各人が尊敬し合うこと、満とはみづる、みつるとは不平を言わないことです。更に進んで感謝する。即ち『拝む』ということです。集団とは別に家庭でもこの三題の心が大切なことです。たまには夫が妻を拝むことも家庭円満の呼吸

であります』と結ばれていました。

そのあとで川村好郎先生の『川柳ごばなし』が満場を唸らせたのがこの日でした。

そしてそれから五年後、更に大会にご来訪をいただきましたが、その時の祝詞はそのすべてに麻生路郎先生を引用されたものでした。

開口一番『ご教導いただきました思師麻生路郎先生の一端を偲んで』と題された『川柳雑誌創刊の前年である大正二年十二月発行の大正刊柳一、二七号に掲載の安川久流美氏執筆の路郎論と、その半年後、井上信子・剣花坊夫人宛の路郎書翰を掲げられて、その一節『私の川柳はただ苦しいから吐き出す排泄物に過ぎませんけれども、それは私としては至って真面目な排泄物であります』という一文から思師礼賛の一語一句に思師に対する礼節心が溢れて満場が大きな感動を受けたものでした。和と礼節の人を偲ぶあの日へ戻りました。

生々庵先生の思い出

小林由多香

新阪急ホテルでの車椅子の先生の温顔。つい先日のことのように思えてならない。生々庵先生の思い出としてはこれしか言えない、書けない私である。

しかし先生の遺された川柳に対する情熱とご功績については、これからも思い出として

あたためてゆきたいいろいろなものがある。

医者という忙しい職業の中、川柳の大家として名を残され、踊りもし、絵もかき、しかも夫婦ですばらしい句画集「生々楽天」も出されている。

この「生々楽天」の題字を書かれた橋本栗溪先生は、わが鳥取市のしかも近いところの出身であり、ここにさらに親しみを感じている。

川柳を初めて勉強する方々に、夫婦で楽しくやられるようすすめているのも、生々庵先生を手本としてのことである。

昭和四十二年に書かれた「川柳講座」も、現在初心の方に私が川柳を説明する手引きとして活用させてもらっている。

先生の温顔を思いうかべながら、川柳の輪を上げ、川柳発展のため、私自身勉強を続けてゆきたい。

生々庵先生の思い出

石垣花子

生々庵先生に初めてお声を掛けて頂いたのは四十六年頃の夏、川柳塔まつえ岡崎祥月様の還暦會でした。先輩の方々の陰になりながら、大先生へ敬意の目礼をさせて頂いておりました。投句め切りも終り昼食前の一刻、一緒に出席した千代さん、瑞枝さんと席を立つとした時、先生が私達の方へ向かって手招きをしておられるのが目にはいりました。

私はまだ先生に直接ご挨拶もしたことも紹介して頂いたこともないので、てっきり千代さんや瑞枝さんのお二人を招いておられるものと思い席も立たずにおりましたところ、三人共来てくれとのことに恐る恐るご挨拶に出掛けました。初対面の私にも色々話しかけて頂き、その上三人へ別け隔てなくお土産の短冊をご用意して来て下さっておりました。可愛らしい目になって来た酔っている

生々庵

後日戴きました浮草の色紙と共に大切に致しております。

昼食は小石奥様とも同席させて頂き、とてもなごやかにすごさせて頂きました。記念写真も何枚か撮って頂き今は大切な記念の品になりました。いつ何処でお目にかかってもらえる温顔で接して頂いた思い出ばかりでございます。白柳先生の句碑建立の時、車椅子でご出席の先生に握手して頂いた手の温みは、昨日のように残っております。

診断にママこっぴどく叱られる

野村太茂津

葉隠れ武士、九州男児、というイメージを秘めた先生でした。

「太茂ツツァン、お孫さん元氣かねえ」はお会いする度に決まって最初の言葉でした。温かく優しい輝く目で、川柳の話題は一度も

交わしたことがないので。

昭和五十一年五月二十二日私の四番目の孫が生まれ、とても元氣な大きな声で泣く児でした。息子夫婦にとっては二人目の男の児で子育てには馴れていた筈ですが、まだ寝返りも出来ない時、二階のベッドに寝かせたまま、階下のテレビを見ながら夕食、若夫婦はのんきに談笑していたらしく、しばらくして、おっぱい飲ませに上つてみると、身動きもせず、うつぶせに死んだようになっていた。ゆすつても、起こしても、呼吸は弱々しく、元に戻りません。早速、中島医院へ電話、応急処置を聞き、車で連れてゆき、診断を受けたのでした。

その時、先生は、ママの状況報告を聞き、いろいろ心配なことを喋るママを、まるでご自分の娘を叱るように、叱りつけてくれたのでした。もうちょっと遅ければ、孫の命は無かったでしょう。今、小学六年生の孫は、中一の兄よりも太く、大きく元氣に遊んでいます。先生は私にとっては、孫の命の恩人なのです。川柳のお蔭で、生々庵先生に出会うことが出来たのだと思い、ご恩返しのため努力を惜しみません。

今でも嫁は「小児が催眠術をかけられたように、おとなしく診察された。しかし、あたしには怖い先生だった」と述懐しています。

ありがとうございました。「孫は元氣です」どうぞ安らかにやすみ下さい。

合掌

高野山

ところどころ

安藤寿美子

来る七月五日高野山普賢院において、麻生路郎・葭乃岡先生、中島生々庵先生の忌を修し、川柳大会が開かれます。青葉茂る高野の聖域に心を洗い、諸先生の御冥福をお祈りすれば、きっと良い句が授かることと思われます。また、ひととき山内を散策して歴史の流れに思いをはせ、素朴にお大師さんを讃仰いたしましょう。

高野山の総門としての大門は、町の西端にあります。最近解体修理され、それを記念して古来の音曲禁制がとかれ、門前において新能が奉納されたことは、まだ記憶に新しいと思います。また、ここはドライブウエーを上って来た所ですが、昔高野七口といわれた七つの登山道の一つ町石道が通っています。町石道は麓の慈尊院からつづき、高さ一丈一尺の石柱に五輪や梵字を彫り一つ一つが菩薩をあらわして一町ごとに立てられています。慈尊院は、大師の母君がはるばる讃岐から訪ね

て来られた時、大師は自らも女人禁制を守り山上の自坊にお迎えにならず、ここに止められたというお寺です。

大門から東へ行くと金堂、御影堂、根本大塔があります。御影堂の前の三葉の松は「飛行的三結」の伝承があります。即ち大師が入唐求法ののち帰国の船に乗られた時、「この妙典をひろめるのに最適な土地へ飛んで教えよ。」と祈って三結を投げ上げられたところ、ここの三葉の松の上に止って光っていたといえます。まさにミサイルも真つ青というスケールのお話です。この松葉をひろうと御利益があるそうで、きっと良い句が出来るでしょう。

更に東進し、いよいよ高野山真言宗大本山金剛峰寺です。格式の高さ、歴史の深さ、霊宝館とともに見学いたしましょう。豊臣秀次切腹の間など歴史の悲しさも感じることでしよう。この度の大会を開かせていただく普賢院は千手院橋にほとりし、高野五十三宿坊の一つですが、院主森寛紹師は金剛峰寺第四百六世座主でいられ、また俳諧に文学全般に御造詣深い方であらうとします。

更に東へ行くと右手に荻萱堂があります。石堂丸の物語は誰もが御存知のこと、長旅に病む母君をのこし、幼い石堂丸が「今道心はおわさずや」と父をたすねて、お山をさまよっています。幼い日に涙をおとした絵本をおもい出してここにも一炷の香を手向けましょう。

この先を右に入ると真別処があり、仏道修業の人々が俗人を近づけず行法にはげんで居られるそうです。庭前には沙羅双樹の花が香る頃かと思われます。

一の橋からを奥の院といえます。千年の老杉や檜の茂る霊場はさながら日本歴史の縮図です。一つ一つの墓石が徳川より豊臣あり、織田信長、明智光秀、曾我兄弟、市川団十郎 ETC……。御廟橋を渡れば燈籠堂です。白河上皇が手ずから灯された白河灯、貧女の一灯など、千年近い歳月を消えることなく灯されつづけています。御廟所の地下深いところの石室には、金剛定に入られた大師がおいでになり、今でも黄衣の御僧が朝夕の供御、夏冬の御衣のお世話をしてお供えになっているそうです。

万緑の山内には、ホトトギスや夏ウグイスの声も聞かれるかもしれません。お土産に有名なコウヤマキを買って仏さまにお供えになるのもいいでしょう。名物胡麻豆腐も膳に上ると思います。どうか皆様ふるって御参詣になり、川柳の御縁を深めて下さいませ。

話はがらりと変わりますが、よく昔「一寸、高野へまいてきまっさ」といってトイレへ立ちました。高野と後架の語呂合わせかと思いますが、由って来る所を、誰方が御存知でしょうか。たどたどしくも高野巡礼をしたつもりでしたが、最後にやはり馬脚をあらわしたようです。

路郎・葭乃・生々庵追悼

川柳大会ご案内

〈交通〉

★南海電鉄なんば駅から特急で1時間16分、急行で約100分。ケーブルカー5分。

高野山駅から南海電鉄バス千手院橋下車(約15分)

★割引乗車券をなんば駅二階中央口駅長室前(川柳塔旗が目印)でお渡しします。

7月4日 8時から15時まで
7月5日 8時から10時まで

〈宿泊〉

★部屋割は各部屋毎に入口に貼り出します。

★7月4日 夕食17時半〜18時。この時刻までに宿坊にお入り下さい。入浴16時〜21時。門限21時半。

★ゆかた、半纏、タオルは宿坊で用意してあります。

★7月5日 6時〜6時半 勤行、法要、焼香、四国八十八ヶ所巡りお砂踏み。

〈南海電鉄高野線〉

■ 7月4日(土)

	なんば発	高野山着
特急	9:20	10:48
	9:50	11:20
	13:20	14:45
	13:50	15:16
急行	8:01	9:52
	8:23	10:14
	8:44	10:38
	9:14	11:12
	9:34	11:30
	10:00	11:54
	10:30	12:25
	11:00	12:53
	以後、毎時0分・30分に発車	

●特急は全車座席指定 (700円)

■ 7月5日(日)

	なんば発	高野山着
特急	9:20	10:50
	9:50	11:20
急行	8:00	9:41
	8:19	10:10
	8:40	10:22
	8:59	10:42
	9:15	11:12
	9:35	11:30
	10:00	11:54
	10:30	12:25

■ 帰りの高野山発

なんば行

	高野山発	なんば着
特急	16:05	17:38
急行	16:05	17:52
	16:33	18:18
	16:57	18:46
	17:22	19:15
	18:01	19:46
	18:28	20:15
	19:01	20:45
	19:26	21:15
	19:50	21:37

〈大会〉

★11時開場、13時出句締切。閉会16時半の予定。修了後、高野山駅までマイクロボスでお送りします。

〈観光〉

★7月4日の前日観光は13時高野山駅集合。女人堂―大門―金堂―菴堂―奥の院―千手院橋(普賢院)のコースで団体貸切りバスを利用していただきます。

鑑賞
「やつこ風」

土居耕花川柳句集

田中正坊

句集の扉に句碑の写真が掲げられている。
次の世があつたら妻よまた逢おう

昭和五十八年十一月十三日、岡山県英田郡大原町にある笹岡公会堂の庭に建てられたもので、大原川柳社の主催で記念句会があり、私も橘高薫風先生のお供をして参加した。当時、耕花さんとは面識がなかったが、大原には今は亡き旧友の白岩文衛君がいたし、何よりもこの一句にひかれたからである。前年に妻を亡くした私は、やはり夫人に先立たれた耕花さんが、愛妻を偲んでこの句を詠まれたとはかり思いこんでいた。

当日、句碑の前に耕花さんがお元氣な奥さんと並んで立たれたのを見て、私はコソツと逃げて帰りたい気持であった。そのことを知るや知らずや、耕花さんは、句集『笹の花』に添えて問題の句を色紙に書いて贈ってくだ

さった。

余談が長くなったが、それ以来ずっと毎号の「川柳塔」に載る耕花さんの句に注目し、感銘を受けたり、共感させられたりしてきた。それが今回、第二句集の『やつこ風』として刊行された。文字どおり、「笑いと愛情」の耕花調川柳の集大成といえよう。

書名は、本田恵二朗さんがおそらく耕花さんの姿を詠まれたと思われる「北風にとらめつこする奴風」から名づけられたもので、序文も寄せられ、大滝出雲さんが跋を書いておられる。飄々とした人柄をそのまま句にしたような、枯淡なユーモア川柳作家として定評のある耕花さんの句に、私ごとときが何も付け加えることはないの、珠玉の中からいくつかの句を抜粋して鑑賞に代えさせていただく。

老妻の名を呼んでみて用はなし
脳軟化こんな優しい語をもらつ
つますいた石が丸くてありがと
オッサンと言うなよ今日はモーニング
履歴書を書いたら馬鹿がみなわかる
宝塚見て来て足を振ってみる
戦争の真似なら止せよ花吹雪
福寿草よ八十歳になりました

第2回

川柳塔勉強会

日時 昭和62年8月17日(月)・18日(火)
場所 兵庫県篠山町
国民宿舎ささやま荘

TEL 079555(2)1127

集合 17日午前9時45分

大阪駅中央コンコース噴水前

句会 お話 田中正坊

兼題「帯」 津守 柳伸選

「役場」 遠山 可住選

「猿」 黒川 紫香選

締切 午後2時(各題3句)

観光 篠山町デカンショ祭

翌日2時間観光コース見学

会費 五〇〇円(宿泊代五五〇円)

篠山口駅迄の運賃と観光料は各自負担

申込み

7月15日までに左記へ

〒661 尼崎市武庫荘5-25-17

春城武庫坊

TEL 06-43111152

主催 川柳塔社

寸又峡と静岡川柳会訪問記

松川杜的

新大阪と京都から一行九名、新幹線こだま四〇八号に合流乗車した頃は天候も恵かったが、東海道をひた走るにつれ良くなった。柳談に花を咲かせる間に浜松到着、ここで名物のうなぎ弁当を仕入れ在来線に乗り換えて金谷に行く。

金谷は大井川鉄道の始発駅、心はずませて待望のSL列車に乗る。汽笛一声発車したのが昼前、弁当を食べながら並行する大井川の風景に見とれていると専務車掌の沿線案内放送が聞こえてくる。お世辞にも上手といえないが、ぎこちないところがかえってユニークで面白い。突然、

「狸が沢山みなさまを迎えに出ています。左の窓を『覧下さい』との声に一斉に窓へ顔を寄せる。慌てて窓を開けて首を出すのもしいる。

出た出た、確かに迫って来る山肌に一匹、

二匹そして十数匹の大きな信楽狸が。一同車掌に騙されて呆気にとられてしまう。その専務車掌園田さんというて自ら二代目と称し案内書に署名までしてくれる愉快な人物である。すぐ懇意になって川柳談義の末、川柳塔の誌友になって貰ったのも今回の収穫の一つである。

右に左にときどき姿を見せる富士、川奈茶で知られた茶晶が緑いっぱいに広がる。一時間余りにして千頭に着く。この駅の構内はSL公園と銘打って明治、大正、昭和三代に生きたSLの巨体が展示されている。早速イギリス製の2109号の前で記念写真をとる。

ここから森林鉄道の名残りを止めるミニ列車に乗ったが、さすがに車体も小さく板張りの腰掛で立てば頭がつかえそうな天井、それでもお気に召したか太茂津さんの深い居眠り、そして当を得た鬼遊さんのギャグに笑いをの

高橋操子喜寿・句碑建立十周年
句集「万年青」刊行記念

川柳大会 秀句

勝ったと思つ負けたと思つ展示会

野村太茂津

最後かも十指でさする母の足

田頭 良子

正面を向いて歩ける過去がある

牛尾 緑良

制服の少女に化したチンドン屋

芳地 狸村

空港ができる自然を一つ消し

高須賀金太

七ころび八起に梅の香が匂う

藤岡 花梢

万年青

万年青の実日中友好二千年

田中 正坊

せて奥泉に着く。更にバスで三十分、十年程前金婚嫁が立て籠った事件で一躍有名になった寸又峡温泉に着いたのが午後三時。宿で少憩して夢の吊橋コース散歩としやれる。イベントは長さ二百米の吊橋。老骨には



きびしい試練でへっぴり腰の後ろから大きくゆさぶって揺らす性の悪いのがある。喚声と悲鳴が山峡にこだまして緑の風が翔ぶ。

夕食の膳に座った女達は、美人の湯といわれる温泉の効果があつてか心なしに若やいで艶が出て色気さえ感じられる。猪鍋、鹿の刺身、おまけにまたたびまで食べさせられ、賑やかな一と刻を過し、せせらぎの音を子守唄に眠りにつく。

翌日は六時起床。あわただしく緑のむせかえる中を寸又峡と別れ往路と逆なコースでバス列車と乗り継いで金谷まで戻ると、紫香さ

ん顔馴染みの渥美弧秀さん他に出迎えていた。在来線で静岡へ来ると賑やかに静岡川柳会の人達が車を持って来られていたので便乗して句会場の小鹿福祉センターに着く。

大きな部屋の一角では朝から始まっていた川柳句会が私達の到着で一段と熱気が上がる。お年寄りの方が多いとはいえ、みんな真剣だ。紫香さんの挨拶と互選吟の総評、鬼遊さんの豆秋さんの句を題材にしたミニ講座、最後は席題に出した「茂」の選評を太茂津さんがされ、その天位に会長の永倉僕川氏の呼名が出ると一斉に拍手が沸き起る。さわやかな中に和氣藹藹裡に終会した。車を運転される皆さんのご好意で石器時代の家屋を復元した登呂遺跡、染色工芸で有名な芹沢記念館、そして日本平と久能山東照宮をドライブして夕食のひとつときを皆さんと歓談で過した。

再会を約して皆さんと別れ静岡駅より新幹線に飛び乗ったのは午後七時すぎ。素朴にして熱のある作句態度の皆さんにお会い出来たこと、そしてSLの蘭田さんと心の触れ合いどれもこれもが川柳を通じての絆であったことが最大の喜びでもあった。静岡の皆さん本当に有難うございました。

その蘭田さんより二、三日して私等が川柳向上のため訪静した事が静岡新聞に載ってい

たと知らせてもらった。

SLに童話のつづき探す旅
SLの車掌サインも板につき
茶畑のなかをSL車で抜ける
川奈茶の香りもすがし寸又峡
寸又峡で女磨いた湯にはてり
柳友の温みに浸る登呂遺跡
日本平駿河の海は碧きまま
虎造節口ずさみつ久能山
静岡の土産やっぱりお茶にする

杜 的
芳 子
鬼 遊
笑 女
太茂津
栄
紫 香
佳 秋
花代子

近畿文字放送作品募集

題「遊ぶ」 橋高薫風選

3句 締切 7月15日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい
〒540 大阪市東区谷町2丁目36

大手前ウサミビル3階
近畿文字放送 川柳係

初歩教室

題 — 太陽

阿 萬 萬 的

川柳は詩である。詩にはころがなくてはならない。ありのままを言っただけでは川柳とは言えないと思う。ところで「太陽」の句だが、干した布団とお日様の句から

太陽の香り一ぱい布団干す

三津江

太陽の匂い一ぱいする布団

慶 子

太陽の匂い嬉しく寝る布団

靖 子

太陽と共に寝る気の布団干す

遊 光

太陽の温みの布団で母の夢

明 美

太陽の匂う布団が待つ退院

サワ子

(陽の匂うお布団が待つ退院日)

子供達の絵や遊びにはいつも太陽がついて回っている。

画用紙のお日様いつも笑い顔

タ ネ

太陽が紙一ぱいに園児の絵

秀 香

園児達太陽描けば目鼻口

正 之

どんな絵にもお日様を画く園児達

て る

(どの絵にもお日様笑う園児の絵)

太陽を大きく書いて絵が出来る

小 鹿

太陽を描いてクレヨン片付ける 春 枝

(一番最後に太陽描いて絵が出来る)

だが太陽を描かない子もいまして……

太陽を描く子が減った団地族

太 一郎

太陽も書かず怪獣ばかりの絵

方 子

(こまじやくれてもうお日様は描かない子)

そして遊びの中にも

太陽をくるくる回している遊園地

繁 男

(太陽をくるくる遊園地の真昼)

太陽の匂いと共に子が帰る

久 子

太陽が沁みこんでいるトンボ捕り

温 子

(太陽の匂いと帰るトンボ捕り)

太陽が遊べ歩けと我を呼ぶ

悦 子

(陽の匂い草の匂いの故郷の道)

そして男の汗には太陽の匂いがするらしく

太陽の匂い沁みこむ父の汗

白 峰

畑で迎える太陽の明るさよ

喜代志

太陽の下で働く汗光る

慶 子

(陽の真下男の汗は玉となる)

年老いて来るとお日様の有難さが……

祖母の口癖お天道様が見てござる

ツ 子

太陽は有難すぎてわからない

タ 子

太陽という神への感謝忘れがち

円 女

太陽の恵み忘れて愚痴ばかり

遊 光

つい忘れがちな太陽親の愛

太 一郎

太陽の恩を忘れて戦さる

昭 治

戦中派だから太陽に手を合せ

三津江

太陽の恵みに感謝の日を送り

伊久栄

血の色で沈む夕日に祈りたい

新 造

下五を「手を合せ」にしてみても如何。

太陽に向って言えぬ幸も多

朝日さす縁側で祖母ひとり言

悦 子

年金の暮し太陽先ず拝む

久留美

(年金暮した大有難く陽を拝む)

お日様を拝む心と言えは――

富士山で御来迎待つ八合目

遊 峰

雲海を抜けて太陽浄土なり

高 夫

御来迎すれば浄土近くなる

勝 美

そして自然の草木だって

勝 美

太陽にむかい向日葵たじろがず

倫 子

太陽にいい顔してるひまわり草

直 子

(陽に向い向日葵「よいしょ」しています)

東の間の太陽に草も木も媚びる

すみれ

太陽の恵み忘れず出す新芽

市 郎

太陽が誘い新緑萌えたきる

トキワ

太陽の季節若芽が目沁みる

美 子

太陽がいっぱい森は夏仕度

房 子

杉木立斜に太陽草を射る

高 夫

(杉木立幾何学的に陽の光)

陽がのぼり今日も騒ぐよ村雀

ふさ子

太陽一杯受けてミニ菜園

保 夫

(ミニ菜園の如露にもお日様笑ってる)

雑草もバラにも同じ陽の恵み

ただし

太陽を求めてのびる蒿かずら

ふさ子

太陽の愛うけトマト美味かろう

喜代子

お日様の愛でトマトは赤くなり)

原始では母は太陽今自立

隆 積

(太陽は母です大地生きている)

だが太陽に背を向ける動物もそして人間も
初夏の陽の葉蔭は虫の休む場所 だし
何を恐れてモグラは太陽から逃げる 喜代志
太陽が乱れ退転早やすぎる 重 信
死刑囚太陽の明るさ知らぬまま 織
娑婆に出て始めて知らず陽の光
太陽に遠慮あるらしサングラス しず子
（娑婆に出てお日様まぶしいものとする）
太陽より人を気にしてサングラス 露 芳
（サングラスお日様だけの訳でなく）
太陽に向えばサタン姿消す 博 子
ともあれ若いということはいいことだよね
太陽の国情熱の瞳に出会う 知恵子
太陽と仲よく育つ健康児 金 吾
太陽のような娘の片えくぼ 倫 子
太陽を浴びて若人ボート漕ぐ 房 子
（陽を浴びてボートは若い唄で漕ぐ）
キラキラと海は夏の陽はね返す 三千子
太陽の広場で人の輪を創る 白 峰
太陽がいっぱい未来へ向く瞳 てる
太陽が残した影に立ち竦む 清
太陽を背に受け燦燦砂丘往く 明 吉
（砂丘の足跡明日を信じる陽の真下）
オーソレミオ口ずさむ日は若返り 達 子
太陽の下黒黒と歯で笑い しんじ
（陽の真下歯だけで笑う黒い肌）
太陽が再起の元氣信じさす 一 郎
燃える夕日に心の憂さも解けてゆく
（夕陽赤く燃えて男の憂さも消す） 三千子

夕焼けへ膨らむ明日へ賭ける夢
燃えながら夕日が海を染めてゆく
（燃える夕陽に男は明日を信じてい）
太陽は公平なお人好しだけど
太陽熱鏡並べて吸い取られ
太陽は催促しない光熱費
（太陽熱利用で2DKの風呂）
もやしっ子の動き太陽菌痒がり
原子炉を止めて無音の太陽熱
お陽様が世の醜さを笑ってる
（太陽は苦笑原水爆試験）
太陽の恵み邪魔するビルが建ち
太陽が顔をむけてる公害煙
（煙公害お日様顔をそむけてい）
だが大自然は太陽を中心に狂いなく
太陽系廻る惑星狂いなく
太陽にも溶けぬ万年雪もあり
太陽がほほえんでいる地球がある
（太陽の微笑に地球はぐくまれ）
では最後に諸々の太陽で締め括るとしよう
太陽の力を借りた旅役者
古いお話より私なら
（太陽に背を向け替女の旅続く）の方が：
オリンピア太陽熱で幕を開け
ロマン秘めサンタモニカの陽は沈む 鉄 治
幼な妻でも太陽を持っている 純 子
太陽が沈むと亡夫の声恋し 治
宮庭で軍歌唄えば陽は沈む サワ子
眼科医を出て太陽が眩し過ぎ 新 造
金 吾

太陽を信用している花時計
（太陽を信じて回る花時計）
人柄で太陽よりも尚眩し
（太陽より眩しく見えるお人柄）
太陽の塔も太郎もマイベース
お日様に二枚舌など使えない
太陽を浴び大奮闘の河川敷
（太陽も苦笑OB・OBの河川敷）
以下文句なく私の好きな句です
陽をもろにゲートボールの笑い声
発掘の埴輪に太陽眩しすぎ
太陽の匂い知らない紙オムツ
太陽が眩しいやっぱり不倫かも
太陽が笑えば顔出す露の臺
太陽と水が育くむ露地莓
太陽にひとり気を吐く油蟬
太陽のおしゃべりが好き野の仏
春の陽に眠気を誘う針仕事
題「太陽」に対してもっと迫力のある句を
期待したのですが。皆さん、もっとと若さを持
っていただきたいと思います。

◇

題「古都」 7月10日締切（9月号発表）
ハガキに5句以内
「香」 8月10日締切（10月号発表）
宛先 〒598 泉佐野市中庄二〇八一—九九
阿 萬 萬 的

現 実

森 山 盛 桜 選

現実に馬鹿正直がここに居る
 夢多い春現実の風が吹く
 現実と理想に揺れるやじろべえ
 現実に戻りウインドから離れ
 じやが芋も夫も現実しなびて
 現実を透かしてみれば骨と皮
 現実には甘くなかつた兎飛び
 そのかみの夢に貧しさなどは無し
 現実に妻と呼ばれるパンの味
 現実を占う甘い星が落ち
 現実にもどり落目の策を練る
 あるままに生きて居場所を今日みつ
 現実には張り子の弱い虎である
 笑つても泣いても俺の値が下がる
 現実にはカボチャが馬車になどならず
 現実を逃避している影法師
 首の数珠外すと酔いが廻りかけ
 現実にまた舞い戻る髪かたち
 バチンコがあつて現実抜け出せぬ
 地獄絵に似た現実を語るまい
 現実のピンチを救う右の脳
 現実を一期一会にしたくない
 高 夫
 重 信
 正 坊
 太 郎
 花 村
 軒 太
 重 人
 宵 明
 掬 水
 優 水
 白 漢
 裕 郎
 悟 郎
 弘 朗
 奈 美
 道 子
 明 水
 清 芳
 佳 雲
 し げ
 有 一
 太 郎

現実になると薄れる虹の色
 夫婦茶碗のヒビ現実になつてくる
 現実の真只中で胡座かく
 現実を障子の穴で覗かれる
 現実を知つてそれから失語症
 現実へ魔法の杖が届かない
 現実を信じてのびる豆のつる
 反対の首を現実へと廻す
 現実と夢と少女の二本立て
 現実の波は背丈を越えてくる
 神の鈴振り現実を逃げてくる
 現実を直視しすぎた玉手箱
 イン트로で現実を消す白い風
 現実の一步わたしはうしろ向き
 現実の花が見えないサングラス
 大 柏
 三 枝
 本 蔭
 達 子
 テルミ
 克 枝
 さと美
 三五島
 文 平
 保 子
 京 子
 正 敏
 倫 子
 可 住
 雄 々
 虹 汀
 テル
 人
 地
 天
 軸
 哇道に立つと乱視がひどくなる
 ブリズムに酔い現実がよく見えぬ
 高 子

仕 事

保 西 岳 詩 選

終電車仕事づかれの顔並ぶ
 部下の尻拭いも仕事管理職
 仕事にも性に合うのと合わない
 傍目には印捺すだけの廻り椅子
 円高のひずみ仕事場軋みだす
 年寄りに仕事が欲しい初夏の風
 残業で帰る夫の丸い背
 傘寿まで退屈しない職を持ち
 仕事場に女は入れぬ刀鍛冶
 勤続表彰仕事の鬼の曲り角
 仕事場の人間国宝喋らない
 尺貫法で亡父の仕事を継いでいる
 仕事とはいへ正月の救急車
 退社ベル仕事離れた顔になる
 とつときの悪い大工の仕事振り
 仕事する母の背中で子は育ち
 今日生きる仕事にリハサルはない
 副食の足しにと余暇の手内職
 お金より仕事が欲しい定年後
 仕事らしい仕事を貰う三年目
 老眼鏡掛けて教わる賃仕事
 ヘルメット男仕事の貌になり
 悠 泉
 知 恵
 素 身
 弘 朗
 章 久
 三 枝
 可 住
 旭 恒
 虹 汀
 康 子
 雄 々
 はるお
 一 徳
 克 枝
 よし津
 あやめ
 テルミ
 三千子
 やすお
 やすお
 諷 云
 泉

父ちゃんが一家を守るなれば服

大ジョッキ仕事の汗と馬が合い

年寄りが大事がられる薬仕事

老眼になっても好きな針仕事

二度三度仕事の修羅場乗りこえる

お役所の仕事お世辞がとても下手

仕事仕事で母は淋しい子を作る

いつでもぞぞ大した仕事してません

ご近所に初めは内緒にした仕事

仕事仕事と唇を一枚ずつめくる

変形の指は居職に耐えた父

仕事持つ俸せ今日も湯が溢れ

縁日を待つてる掏摸の初仕事

食つための仕事ではないループタイ

佳

子育てに母が夜更けの針仕事

仕事らしい仕事がほしい二度の職

仕事着を着ると言葉が荒くなる

太陽が笑う仕事の鬼走る

ロボットが熟練工の肩叩き

人

よちよちを視野においてる手内職

器用貧乏ただの仕事を背負い込み

地

蜜蝶に仕事をさせる花を追ひ

天

赤ちゃんの仕事は泣いて飲んで寝る

軸

グループ

小池しげお 選

グループの強さ風に耐えている

船頭が多いグループ浮き沈み

グループの中に行儀の悪い奴

気の合ったグループで行く小旅行

グループの一人が消えた酒の味

グループのひとり離れて行く出世

グループのボスが母星追いかける

グループが皆んな味方とかきらない

グループにボス猿が居て木をゆすり

グループの一人は知っている不倫

対立が避けグループの花薙

誘導尋問にグループの一人引っぱり

グループに好きな女が一人いる

つまらないグループだから仲が良い

グループに裏切り者が一人居る

グループの一人が走ると皆走り

グループを信じるだけのザイル持つ

園児にもグループがあり手をつなぎ

グループを抜けると強い風あたり

グループで咲かせた花が手折れない

グループの彩に染まらぬ数珠を持つ

悪一人いるグループは悪になる

グループは弱虫ばかり仲が好い

死期知ってからグループを象離れ

グループの先頭嫌な面構え

グループの中ほどにいて惹無い

グループで登れぬ山が一つある

グループがまとまり過ぎて蟻になる

グループに一線がある挙手の礼

わからない男グループに一人居る

グループの声をひとつにしたタクト

グループで旅行したのがきつかけよ

グループ旅行先すカラオケを予約する

グループがおいて車内はホッとする

グループの見舞病人疲れさせ

グループの中のひとりで背が高い

グループに噂の種が芽生えてる

佳

グループが寄ると故郷の国説り

グループのめだか機嫌よく泳ぐ

グループがやさしく余生あたたかし

グループで土産を値切る大阪弁

グループの中に玉虫色がいる

人

グループの手話はとつても仲が良い

グループを外されそうで抱く火種

地

生きぬいたそんな女のグループで

天

グループ旅行でものにしたのがいまの妻

軸

柳界展望

集録一敏・武庫坊

主催 大阪府・市

大阪府教育委員会

大阪市教育委員会

★第18回奈良新聞川柳大会

日時 7月12日(日)10時

会場 法華寺

JR奈良駅又は近鉄西大寺

駅よりバス法華寺前下車

宿題 各題二句

「情け」

「笛」

「紫」

「道」

「風呂」

「瓦」

席題一題・投句メ切正午

会費二五〇〇円(拝観料昼

食含)欠席投句五〇〇円

投句先 奈良市北市中町71

杉野睦郎宛

出席申込 奈良市三条町

奈良新聞社文化事業部
川柳係
★高橋操子喜寿・句碑建立
十周年・句集「万年青」刊
行記念川柳大会は、五月十
七日高石市の「新東洋」で
開催。岸和田市長の原昇氏
をはじめ、各界や川柳関係
者が多数参加、出席者二百
十名の盛会であった。
当日の文化協会会長賞は、
本社常任理事の田中正坊氏
の「万年青の実田中友好二
千年」の句が獲得。
★汐風川柳社(月原青明会
長)の第33回愛媛川柳研究
大会は、五月二十四日今治
市中央公民館で開催、二百
五名の盛会。山内静水・小
島蘭幸・墨作二郎・古川寛
然坊氏等が出席された。

新同人紹介

加藤 藤 彩人

一葉・五楽庵・甲吉・薫風推薦

第5回 夜市川柳大会

とき 昭和62年7月11日(土) 午後1時

ところ 堺総合福祉会館4階大広間

兼題 名前

波

縄

生(なま)

謎

南極

斜め

各題2句 席題なし

各題終了後、南海高野線堺東駅前

懇親宴

会費四、〇〇〇円。参加希望の方は、

河内天笑までお申込みください。

主催 堺川柳会

大阪、京都で活躍する九人

の講師が「川柳教室」(永倉

僕川主幹)で川柳の手ほど

きをした。

前日、川柳塔一行を乗せ

た大井川鉄道SL車乗務員

の園田博司さんが、川柳塔

を見て感激し、詩心のある

好する老人約四十名参加。

■静岡新聞5月20日付に合
同句会の記事掲載
『川柳同人誌「川柳塔」の
選者、黒川紫香さんらを招
いた「合同川柳教室」が19
日静岡市立小鹿老人福祉セ
ンターで開かれ、川柳を愛
する老人約四十名参加。

賞
各題秀句に大阪府知
事・大阪市長、府・
市教育委員長から
「川柳賞」を贈呈

会費 五百円(作品集代を
含む)
出句は出席者に限る

■昭和62年度大阪文化祭
第39回川柳大会
日時 昭和62年11月14日(土)
会場 大阪市中央公会堂
中集会室
宿題「切符」阿萬 萬的選
「時事雑詠」柏原幻四郎選
「黒」 高橋 古啓選
「専科」 米沢 俊夫選
「横」 龜山 恭太選
「門」 永田 帆船選
当日席題一題
各題2句・メ切1時



藤後実男氏を悼む

保 西 岳 詩

五月九日川柳あしなみ会吟行句会が、高砂市の鹿鳴神社鹿鳴殿で行なわれている最中にご家族から「主人が今朝九時、入院先の泉外科で亡くなりました」と電話で知らされ、あまりにも突然で瞬間啞然として、何とお悔みを申し上げてよいのか言葉を失ってしまいました。

私が藤後実男氏を知ったのは、昭和三十五年春、当時毎月大阪から指導に来姫されていた正本水客師から「姫路駅に藤後実男という名で川柳をしている人がいるから入会を勧めてみては」と教えられて調べると、姫路駅運転本部にその方がおられたので、早速電話でお話して句会に来て頂きお会いしました。そして七月から入会して頂き、八月句会に投句

で初参加され、水客師の「艶」の選に、艶出しをぬってハ靴が気にかかりの句が入選しております。以後、職務に精

励の傍ら川柳作句の意欲も旺盛で、各新聞の川柳欄や川柳塔誌へもさかんに投句をしておられました。昭和五十二年十月に植村客遊子氏等の推薦により川柳塔社同人になってからは「層句に磨きがかかったようです」

ところが、五十五年十一月に「直腸潰瘍病変」で兵庫医大病院に入院手術、五十九年五月に「結腸潰瘍」で高砂泉外科へ入院手術ということで、体調はすぐれなかったが、川柳を愛する心は変わらず、句会には必ず出席しておりました。

今は人生八十年代というのに五十八歳の若さでこの世を去るとは、残念でなりません。

焼香の煙と涙遺影消す

岳 詩

どうか安らかに眠り下さい。

合掌

藤後実男氏遺作より(三句)

池の底小石の愚痴も聞いてやる

お遍路の道連れ蝶の前後ろ

妻の留守枕元にもある葉

藤後実男さんを悼む

吉 原 紅 月

五月九日吟行句会中に突然、実男さんの訃

報に接し、私は何と表現したらよいか、ただ心の中にぽっかりと空洞が出来たような感じでした。

実男さんは川柳塔社の同人であると共に私たち「川柳あしなみ会」の同人でもあり、「あしなみ会」発足の初期から共に川柳を創り、また川柳を語って来た仲間なのです。幹事として「あしなみ会」の発展に尽力されて来た実男さんでした。

何時も隙のないバリツとした服装で夏でも蝶ネクタイ姿で出席されていたのが今も印象に残ります。去る四月十一日の例会会にも出席されていたのですから。

七年前前に兵庫医大病院で手術をされてからは遠方の句会には出席されませんでした。が作句意欲は衰えることなく、各新聞の川柳欄「国鉄川柳」等にも投句を続けておられました。

「国鉄川柳」五月号雑誌欄から

実 男

駅前のめし一ぱいの温かさ

杯の底に元氣な亡夫がおる

〃

しつけ糸切って明日へ夢があり

〃

私より若い前途を持つ実男さんの追悼文を書くなど思いも寄らぬことで悔まれてなりません。衷心より御冥福をお祈りいたします。

伊達男実男の呼名もつ聞けず

紅 月

合掌

本社 六月句会

六月八日(月) 午後六時

メンズファッションセンター

三十度を越す季節はずれの猛暑が数日続く。今年是多発する地震といい、気にかかる異常現象ではある。

君のはなしは上手ではないが、真実味がある。だから最後まで聞けるのタ」と亡き生々庵氏から言われたという黒川紫香氏が今年の柳話。四月の北海道の旅での見知らぬ中年の男性との出会い、五月十八・十九日、寸又峡から静岡川柳会訪問の見聞を話され、旅をする、行く先々で人の情けに出合う。これからも出来るだけ地方に出向き、多くの方々と手をにぎり合つて川柳の絆を深めていきたいと結ばれた。

初出席は小林英子、松川芳子のお二人。月間賞は吉川寿美さんが獲得。

(進行・天笑) (受付・月子)
(記録・射月芳・月子・隆二)

出席者―笛生・武庫坊・年代・敏・小路・

池田寿美子・柳影・千代三・寿美・亜成・水客・佳秋・三男・狸村・杜的・松川芳子・凡九郎・白溪子・河瀬芳子・眉水・翠公・律子・作二郎・雀踊子・幸・小林英子・太茂津・紫香・鬼遊・章久・いわゑ・はつ絵・白峰・満津子・道子・勝美・悦郎・重人・萬的・射月芳・柳宏子・白兎・庸佑・福本英子・隆二・文秋・吐来・淳一・たつお・諷云児・正坊・外吉・勝晴・柳伸・規不風・天笑・月子・季柳子・雄次郎・千寿子・登志代・美代子・英千子・洋敏・美房・冬葉・東雲・山久・楓楽・吸江・度・史好・頂留子・喜風・葉・薫風・みつ子・藤子・寿子・金太・岳人・元紀・恵美子・浩一郎・形水・智子

席題「スイッチ」 中田 たつお 選

一日のスイッチ入れる妻が起き
スイッチへ鬼が出番を待っている
工場のスイッチ仕事の鬼にする
スイッチを入れ間違えたまま生きる
スイッチをひねり独りの夜が長い 福本英子
スイッチが入ったままでよく喋り
ばく専用のスイッチが一つある
老人ホームにスイッチが多すぎる
スイッチオン朝の空気が動き出す
スイッチを入れぬ日もある町工場
スイッチで動く人形と暮らしている
スイッチを消すと海鳴り聞いている
年代 元紀

退社ベル僕のスイッチ切り替える
そしてその後スイッチオンは慎重に
スイッチを押したら愛も流れます
スイッチを消すと母に近づくそば枕
まだまだ生きたいのでスイッチに触れぬ
スイッチ故障誰かをかばうことになる
スイッチを白い手袋嵌めて押す
スイッチが壊れ静かな日曜日
ロボットにスイッチを入れて昼寝する
児が背伸びするスイッチを付け替える
スイッチが遠くで木馬眠くなる
スイッチオン少うし運が向いて来た
スイッチの生活にあって脱都会
スイッチは嫌だと老母は薪で炊く 河瀬芳子
スイッチが保温に変わり父帰る
愛の灯のスイッチならば今日も押す
スイッチがいくつ日課の中にある
スイッチを切り幻想のなかにいる
スイッチオンすべてが過去に流れ出す
スイッチをまた迷つてる白い足袋
スイッチを押すだけ恋も熟しきり
ミサイルのスイッチ神に委ねよう
梅雨に入る女もスイッチもしめる
スイッチはなくても回る夫婦独楽
金の要るはなし補聴器オフにする
タイムスイッチきれいに焼ける朝のパン
年代 天笑
敏
恵美子
白兎
作二郎
白溪子
いわゑ
岳人
小路
作二郎
恵美子
月子
河瀬芳子
はつ絵
千代三
幸
浩一郎
年代
道子
敏
三男
恵美子
正坊
外吉
たつお
山本翠公選
柳伸

午後からの足どり消えたサスペンス
 午後からは社長ひとりのスケジュール
 約束が三つ重なる午後の駅
 午後からが油ののってくる文士
 王様に取って置きたい午後の雨
 雑巾が乾きすぎてる長い午後
 午後の部の玉三郎へゆく着物
 カルチャーの予定不倫の午後となる
 本店へ叱られに行く午後のバス
 浮き浮きと割符を握る午後六時
 銭湯の午後はきれいな蝶が浮き
 午後からは自習万才しなくなる
 梅雨の午後カーッと起きている花しようぶ
 点滴が続いて薔薇は午後届く
 午後は哀しい中年の水すまし
 カルチャーの午後は主婦から脱皮する
 退屈な午後は六法全書繰る
 異人館の午後は祈りが軽くなる
 蚤を取る猿にふたりの午後が過ぎ
 自叙伝を書く氣にさせた雨の午後
 嫁の荷が届いたあとの午後の雨
 午後のおなんと気だるいドラマばかり見る
 べ切りを午後のポストに急かされる
 夕顔の白さに明日を疑わず
 午後からの謀反を少し考える
 午後三時園児はみんな起きてくる
 午後からの会議が延びて酒が出る
 絵具箱午後の港を抜けてくる
 ざるそばで午後は充実させられぬ

三男 柳影 武庫坊 吸江 狸村 幸 河瀬芳子 天笑 紫香 章久 千代三 美房 度 作二郎 白兎 楓 葉 元紀 雄次郎 いわゑ 浩一郎 たつお 寿美 冬葉 年代 洋敏 白漢子 作二郎 楓 楽

午後の雨髪でも切りに行こうかな
 時差ボケのホテルで午後の顔洗う
 昼からにしろと集金叱られる
 月曜の午後は不倫に空けられる
 土曜日の午後は顔くイヤリング
 午後からの約束ならばする女
 雨の午後決断つける足袋を履く
 午後からは角が出てくる蝸牛
 北浜の午後は新値で湧いている
 紫陽花が語るに落ちた午後の雨

兼題「眉」

津守柳伸選

月子 たつお 外吉 笛生 千代三 惠美子 佳秋 狸村 たつお 翠公 眉のあたりに面影を追う血の絆
 眉の太さにさびしさがつたわらぬ
 金を払った女に朝の眉が無い
 遣り手程眉間に傷の二つ三つ
 眉薄き女の幸も又薄し
 娘をやると決めても眉はまだ険し
 うたがいを持たぬ素直な妻の眉
 水鏡はとけの眉の漂えり
 長い眉毛が明治生れを主張する
 細い眉こけしの顔は憂いもつ
 天皇が眉動かした名勝負
 思わくがあつて太目に眉を引く
 長生きの相で行儀の悪い眉
 披露宴眉唾で聞く美辞麗句
 口説くのがとつても下手な太い眉
 眉つばであつても信じたい心
 険しい眉にブリズムを全開す

手答えはあつた男の眉動く
 均等法おんなの眉が太くなる
 セールの眉唾物にだまされず
 銭稼ぐ眉だ念には念を入れ
 午後五時のこれから男欺す眉
 正義漢仁王の眉に負けられぬ
 眉びくり第六感が湧えてくる
 少年の眉のあたりにある決意
 思いやりがあつて無口な地藏眉
 眉引いて女のいくさ始まりぬ
 よく喋る女の眉が太かつた
 眉太い男を過信してしまつた
 観世音眉の辺りの暖かさ
 欲の皮引つ張り合つた太い眉
 正論も吐いた男の太い眉
 自画像の眉は逆立てないように
 暗黙のうちに通じた眉動く
 眉間から危険信号とんでいる
 朝顔の種子播く眉を動かさず
 何かある妻丁寧な眉を引き

川柳塔社

高橋操子氏（岸和田市）より
 喜寿・句碑建立十周年・句集「万年青」
 刊行記念川柳大会御礼として
 金一封拝受致しました

妻 子 文 秋 笛 声 杜 的 雄次郎 道子 隆二 月子 惠美子 金太 萬 的 楓 楽 淳一 吸江 金太 幸 太津 柳宏子 作二郎 柳宏子

中曾根の眉は世論を気にしない
眉くもる布団に針が入れてある
まだ馬鹿になり切れないでいる眉毛
満中陰眉が変わった未亡人
しあわせな眉でおかめを演じきる

兼題「争う」

堀端三男選

ふところが暖かい日は争わぬ
もう妻と争う年でないを知る
切り札も争う構え崩さない
言い勝った男へ影がつきまとい
争いの火種となったラブレター
僕払うわしが払うカウンター
争いのテンポが延びる大阪弁
どんぐりの争いたかが知れている
争いに峠があつた夫婦独楽
ちっぽけな争い仁王に見下され
争つてみて夫婦という絆
争つた日から崩れている積み木
酒出ると口争いがびたと止み
争いは止せ止せみの虫揺れている
政争に時代錯誤のお墨付
呆けたなと思う闘争心がない
ライバルが居るから闘志湧いてくる
ライバルと争い妻となりました
争わぬように遺言書いておく
いさかいの最中血圧気にかかり
椅子一つ争う熱い日がつづく
ほろ酔いの争いごとは本音かも

度 惠美子 吐来 外吉 柳伸

楓 柳 寿 萬 博 雄 狸 新 悦 萬 吸 幸 月 杜 白 太 柳 敏 幸 勝 柳 福 子 本 英 子

いつからか争う種は拾わない
争わぬ夫が少し物足りず
争つてみても体重ちがいがすぎ
一刻を争う下駄を借りて出る
争いの訳はコケシが知っている
本家争い華道は花に見くびられ
一日の争いが始まる出勤簿
紺の背広で争いの第一歩
骨肉の争い始まる一周忌
争つて失うものの無い強み
争つたあとの空気を入れ替える
信号が付く水争いのあつた辻
争いもなく分校を閉鎖する
傘の中口争いがまだつづく
争いはきらいな鏡で曇らない
争いの余燼しずめる鍋みかく
争いを知らぬ父子の夏帽子
争わぬ人にいつでも負けている
水争いの記念碑があるニュータウン

兼題「檻」

金井文秋選

海中の檻大サメと対話する
割切つて檻なら三食昼寝つき
何不自由ない檻でストレス蓄めている
不自由の怒りを吠える檻の虎
身に合つた檻で気楽に生きている
檻の狼がうらやむ仲の良い夫婦
二三人檻に入りたい永田町
怪訝な顔で人を見ている檻の虎

年 代 小林英子 柳影 水客 耕花 萬的 杜的 重人 佳秋 美房 年代 雄次郎 作二郎 惠美子 千寿子 英千子 惠美子 楓樂 三男

悦郎 満津子 柳宏子 市雄 楓樂 白溪子 みつ子 萬的

岡山県芸術祭参加

第39回西日本川柳大会

とき 昭和62年9月6日(日)

午前8時半開場

ところ 岡山県久米郡久米南町下弓削
久米南町中央公民館

(津山線弓削駅下車徒歩5分)

兼題

号令 卜部 晴美選
盛ん 河内 天笑選
代る 但見石花菜選
鳴る 鳥本 泰選
余生 水粉 千翁選
甘党 山田 止水選

会費 出席千五百円(発表誌・記念品
昼食呈)

各題2句・締切11時

投句先 岡山県久米郡久米南町下弓削

〒709-136

弓削川柳社

主催 弓削川柳社

人間をクルルに観察するゴリラ 河瀬芳子
 猛獣の檻で雀が餌拾う 白峰
 檻の動物うらやむこともあるノルマ 楓楽
 安住の檻で猛獣呆けてくる 太茂津
 檻のバンドも人を見倦きて眠くなる たつお
 檻のライオン怠惰な視線投げただけ 年代
 真実に耳をかさない檻の中 洋敏
 友好の空輪の檻へ気を使い 庸佑
 道化師の妻が檻から出て行った 作二郎
 仲間を信じきっている檻の中 冬葉
 ライオンの檻へ気を吐く酔っぱらい 美代子
 鉄の檻母としきりに逢いたがる 浩一郎
 野良猫の自由がほしい檻の虎 正坊
 サカスの檻がジンタに急かされる 淳一
 動物園目当ての檻へ散る園児 庸佑
 贅沢な檻でバンドが昼寝する 雀踊子
 家庭内暴力檻をつくりたい 勝晴
 單身赴任妻の檻から放される たつお
 色変えて檻は情けを通さない 頂留子
 トントンは檻を故郷と思いこみ 吸江
 檻の中夢は千里を駆ける虎 正坊
 檻は生涯地獄の汗がしみとおる 元紀
 警察の檻でわめいていたお酒 河瀬芳子
 虎のうつ往つたり来たる檻の中 博子
 親子の情教えてくれたさるの檻 博子
 兎小屋バンドの檻に憧れる 三男
 サファリを檻の人間一回り 笛生
 アベックに当てられました檻の猿 敏
 住めば都檻の中にも四季がある 杜的

人間の驕りを唾う檻の中 吐来
 ライオンが王の威厳を捨てた檻 博子
 ストレスもやわらぎ檻に住みなれる 文秋
 兼題「器用」 西田 柳宏子 選
 それぞれの器用貧乏住む長屋 どんたく
 器用に酔って上座から消える 荒介
 使われる器用さ隣でも嬉し 重信
 落人の里に器用な芸残る 萬的
 物真似は器用に出来て無位無冠 淳一
 不器用やさかいコツコツやってます 美代子
 とても器用にポテトフライを揚げる父 たつお
 嫁ぐ娘へ不器用な父鶴を折る いわゑ
 二年B組釘を真つすぐ打つ器用 岳子
 親切で器用に近所の人気者 天笑
 私より器用に喋る九官鳥 幸
 器用すぎて未だ裏町を抜けられぬ 元紀
 薬包紙馴れた手付きの舟となる 荒介
 出世せぬ父で器用な日曜日 山久
 負けて勝つこつ心得る器用な手 浩一郎
 椅子とりゲームとても器用な尻をもつ 惠美子
 とても器用に歯医者の椅子に坐ってる 作二郎
 器用ではないが素直に生きたいな 金太
 お好みを焼くと器用なお父さん 狸村
 小器用な男が通夜の席にいる 水客
 多事多忙こなして器用に恋もする 敏
 白い指とても器用に嘘をつく 登志代
 病む妻へ器用にさばく台所 山久
 定職も持たず器用に生きてはる 天笑

「川柳わかやま」より
 二百号記念大会・句集「あおい海」
 第二集刊行お礼として
 金一封拝受致しました。

川柳塔社

なまじ器用で世間を甘く見てしまつ 楓楽
 妻母嫁 妻を器用だなどと思う 律子
 器用に嘘がつけな微熱のある男 萬的
 ドンの眼が器用な真似を許さない 翠公
 鶴を折る指に微塵の隙も無い 荒介
 夜の金魚器用なひとを知っている 作二郎
 小器用になって寡男の針仕事 妻子
 不器用な夫婦のぬくい屋根の下 吐来
 物騒な街で器用な鳩の首 白兔
 口先が器用で妻に叱られる 外吉
 小器用に生きて何にも残らない 楓楽
 妻だけに器用を見せたことがない 冬葉
 庖丁を持てば器用な妻泣かせ 章久
 他人から見ればなんでもない器用 小路
 男とは器用に別れたく思ふ 惠美子
 無器用な夫で私だけ愛し 月子
 誰とても器用に添えるかすみ草 寿美
 又しても独りアクセクする器用 柳宏子
 (清記・楓楽)

老地神壇

締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。

担当・玉置重人

西宮北口川柳会

奥田みつ子報

航路より少しはずれて噂たつ
やがて航路が事の次第を言うだらう
カルガモの親子に未来都市を読む
決められた航路外してみたい年齢
美容院今日のおかずを読んでくる
真南に航路を取れば亡父の島
母の日の母へ届いたシヤレた傘
母の日の忘れぬ嫁が居てくれる
カルテ読む主治医の目の色じつと見る
父母の居る灯台やつと視野に入り
これも愛女の意地を通し抜き
母の日に母が見舞いに来てくれる
強引な誘いに乗った蟻地獄
均等法強い女はよくしやべる
母の日の小包涙もろくくなり
母の日も老母は雑巾縫っている
この航路最後に陸へあがる漁夫
電光ニュース列車が着いて読みそびれ
貝割菜土の温みを知らず伸び
予備校と決めて桜の花も咲いて散り

タカ子 凡九郎 和友 恵美子 笑女 照子 静子 美智子 園香 幽歩 紀雄 はつ絵 佳秋 諷云児 白溪子 陽露子

会葬に年がいもなく数珠忘れ
新入社員タイピンの位置落ちつかぬ
三人連れ赤い爪の娘だけ喋り
寒風の航路に光る北斗星
伸びをした猫がゆっくり膝へ乗る
世渡りに馴れてお酒が強くなる
何をすることも掛声をかけている
それからの話になってから強い
人生航路八十路趣味持つ顔のつや
岩波文庫青い目が読む神戸線
ミシガンの航路五月の湖を行く
手の先が確かな文字を読んでいる
強いのが一人乗らない縄電車
企みがあつて孟つぐばかり
女房に心読まれている平和
紙兎孫賢こなれ強くなれ
よく見れば誰かに似てる石の顔
週刊誌読みに行くよな美容院
なんと遠い想い出だらうつるべ井戸
朝夕にただ読むだけと般若経
一本杉妥協ゆるさぬ強い意志
チャネルへ故郷の唄を呼ぶ航路
ロケットと頭脳産業だけの街
この気持読んではしいと仔犬の目
蛇を見た日から別れが近くなる
髪染めた女航路を見失う
芯の強さタンポポ母によく似合う
航路からはみ出し過ぎてから受胎
揉み手から洩れた世辞なら聞き流す
すらすらと読めぬ弔詞に泣かされる
ひと仕事済ませてうまい酒の味

保蔵 萬の 青珠 光代 武庫坊 嘉矩 千世子 正坊 英子 杜的 柳影 伊三郎 春蘭 いわゑ 江美 年代 清太 春子 かすみ 米朝 香子 伊升 散歩 みつ子 良征 千秀 文夫 新造

戦中派食糧難の話する
はずしたい航路を星が許さない
群衆の中に自分の席がない
母の忌に母の日記を読むしじま
読み終えた聖書ボタンと無が坐る
急カーブ車窓の景色は斜交いに
縄電車つまずいたのは私です
伸びるまで待つてくれたる兄の服
雑草の踏まれなれした顔で伸び
海峡を跨ぎ民話が伸びてくる
カント読む少し背中をまるくして
絵画展先ず経歴を読んでもみる
鯉職父鯉のいる威勢よき
よちよちの歩幅に合わす散歩道
神の書くドラマは誰も読めません
女性優位一番風呂で歌うママ
航跡も消えて故郷が遠くなる
死刑囚の一人が死んだ今朝の記事
強いのは大上段に構えない
犬のため残った馳走もろて去ぬ

高槻川柳柳の花

辻

白溪子報

衛生中継茶の間に入りこむ世界
煩悩の世界で聴いた亡夫の声
傾高で世界の名画買ひあさる
湖の青釣りの世界へ舟を漕ぐ
ふとん干す腕白小僧の世界地図
動乱の世界カメラで駆け巡る
山の湯にたつた一人の別世界
世界記録の重荷ソウルをただ走る
幽玄の世界に揺れる影法師
ジュース飲む人にも配る紙コップ

ノブ 白李 保 曲ん手 文平 勝美 善太郎 勝紀 定人 天樹 紫香 隆子 森生 御前 俊子 枯梢 鬼遊 薫風 紫香 白溪子 杜的 一郎 千枝子 房子 如洲 逸子 佐代子 白溪子

紙コップ灰皿にして話の輪

雑魚は雑魚同士で呷る紙コップ

紙コップ知らない人がくれました

紙コップメダカ一ぴき泳がせる

紙コップ握りつぶした負けゲーム

なみなみと満たしてコップなお軽し

紙コップそろりそろりと席につき

平社員は祝賀だから紙コップ

制服がもの言っているお巡りさん

制服の研修らしい人いきれ

制服の顔が重たい二十四時

スチュワーデスの制服妻も憧れる

応援団に入り制服着せられる

制服を脱ぐ更衣室花ざかり

制服でどの子も同じ顔になる

制服でないのが一人秘書の室

制服を脱いでゆっくり飯にする

コヒートの湯気で平和な国をみた

方便の嘘から嘘を信じられ

少年が夢弾ませる剣道衣

日数をかぞえて老母の独り言

京長閑お寺に鳩がいてくれる

メンデルの法則証す兄がいる

野仏に何時の日からか手を合わせ

腰痛のことは書かずに花便り

音もなく流れつくのは過去ばかり

振り返る位置に男の墓がある

水掛け不動のお顔に水が届かない

尼崎をはま川柳会

上田

目に効くと八ッ目鰻も食べました

鰻子

諷云児

悦子

恵美子

森生

さと美

享子

眉水

明子

静江

満喜

百合子

佳秋

敏正

栄子

鬼遊

白李

紫香

実男

曲手

英子

花代子

萬的

越子

よ志子

とる

冬葉

年代

佳秋報

向西

一〇〇円の笑顔で孫が肩をもみ

孫の顔見詰めてあやす百面相

鯉のぼり立ててみたいな女系族

つぶれ耳大関までは行くだろう

ベンチのサイン耳も巧みに使われる

耳痛の親の意見が今わかる

図星か少女耳まで赤く染め

早耳の女の口が軽すぎる

ライバルが居るから昇る縄梯子

植木屋の梯子があらぬ方を向く

浮かれ過ぎ妻に梯子を外される

失った切符が浮かぶ洗濯機

またおいでそつと切符を握らせる

竜宮城へ行きたいが切符がない

母の日は杉良太郎の切符にす

嫁さんの都合で早いめしになり

職のない男に淡い昼の月

尼崎いくしま川柳会

上田

雨女喜劇をひとつ持っている

よいプラン立てて待つ日が雨となり

雨が曇り時には晴れという予報

たまゆらの乳房に走る雨の音

雨続く飯場に故里の花が咲く

哲学をかじって雨の日は菴る

雨の日も読書三昧とはいかず

母は子を感じ切っている菜種梅雨

恋の芽が笑いこぼれている二十

逆境を笑顔の妻に支えられ

美人から洩れる笑顔にフアイト燃え

よく笑う女で今も不仕合せ

弘治

敏之

美代

よしつぐ

貞吉

いわを

すみ

紫香

十四郎

歌子

佳秋

武庫坊

昌子

夢之助

江美

定人

牧郎

佳秋報

静夢

ときお

みち子

伊升

正一

柳影

一郎

年代

文夫

定人

美代子

牧郎

幸子

春先の泉風邪には気をつける

泉からいつも湧き出る相聞歌

秘境地の泉に沈んでいる枯葉

許すのは森の泉に着いてから

森番が聖書を読んでいる泉

老眼で手古摺る糸へ孫が来る

運命の糸が引き合うめぐり逢い

意地もつて通つづける母の糸

怪事件糸引くつづかかかれてる

少し酔うと男は黒田節を舞う

長旅の疲れそろそろ腰にくる

羅漢さんの微笑に出会う一人旅

旅やよし思わぬ女と露天風呂

ロボットもいつか手品をするだろう

行く道に指定席などない凡人

極楽も鳩が嫌われそうになる

ほろ酔いで聞いた言葉に縛られる

水掛けて春眠の不動呼び起す

歯並びがきれいでちょっぴりおませな娘

思いやる彩を残して落椿

うみなり川柳会

森田

長病みに芽生える庭を待ちわびる

倅せな杭が二つ並んで生き

工事場の埃に労使向いて生き

石地蔵埃落としの雨を待つ

悩み抜きトイレの中で答出す

地の愛に包まれ芽生え忘れない

美辞麗句並べて嘘が歩き出し

軒並みに努力重ねて街栄え

子の寝顔並んで明日の夢を見る

すゑ

玉子

白漢子

佳秋

作二郎

伊三郎

春江

静江

保蔵

良征

風云児

メ女

紫香

暢子

かすみ

和友

園歩

杜的

萬的

かず子

熊生報

よし子

美佐子

茂登子

一止

小鹿

希満子

黙光

貞山

雅女

蛙泡

喝采の中でふたりは肩を寄せ
 自信ある答まつすぐ手を上げる
 春の陽が差し埃が浮いて見え
 アイラブユー答保留のままにする
 倦怠の芽生えか無口の日が続き
 春風へ胸の埃を解き放す
 反抗期芽生えて大の字を覚え
 新園児今日のおけいこ並ぶだけ
 記念写真並ぶ顔顔がこまより
 せいといばい我が答を成しとげる
 ひとり歩き自生ええ右曲り
 雑草が芽生えて自信持てと言ふ
 城北川柳会 神夏磯道子報

堂 華子 幸子 芳泉 静生 草人 銀嶺 豊生 葉士人 熊生 敏子 正之 正行 秀夫 だし ふうみ 寿美礼 テルミ 仙吉郎 亀男 魚子 頼一 有佳 晃世 文子 悟郎 市郎

候補者が拝む手をする足をする
 糸切れた風が家裁の門叩く
 麦笛が聞こえるような風景画
 銀婚の夫婦に新婚あてられる
 霧笛がひびく港でめぐり合う
 潮騒に心ときめく古い恋
 母がいるただそれだけで満ちる城
 海峡へ女の涙置いて来る
 父の背に海の匂いが染みて居る
 今年また花のトンネル通り抜け
 春うらら雀が火種持つて来る
 汽笛から汽笛に終る百余年
 十年祭もう十年たったのか
 蒸発の父から電話それっきり
 車座の新人類に花吹雪
 核家族雑魚寝姿を恋しがり
 焼け石と知りつつ情の水を掛け
 嘘の無い愛を包んだ手話の指
 良寛と夢二と春の子供達
 川柳藤井寺 赤木
 実年へ肩の力を抜き給え
 任天堂子供通帳知っている
 西行のように死にたし花のもと
 公約は何でも出来る美辞麗句
 トップとビリは姿をみせぬ同窓会
 名を捨てて生きた道有り幸も有り
 公約はたすき掛けてる間だけ
 われるまで夢はふくらむアドバリン
 選挙カーの花の宴にも顔を出し
 九回裏選挙にもある逆転打
 まだ脈があるのか赤い顔をする

倫子 白峰 達子 明美 志保 久留美 登志代 純子 ふさ子 満津子 道子 新一郎 綾珠 静子 トキワ 佐津乃 公一 右近 静歩 和子報 美房 重樹 つやこ スミ 吸江 きよし 喜道 かな女 志洋 治子 美代子

離職してはじめて知った重い肩
 黒い顔してSLが泣いてゆく
 赤点に一役買ったのはファミコン
 楊貴妃も小町もおわす通り抜け
 家の中男ばかりで赤がない
 主義主張よりも連呼の地方選
 当選へ内助の功の妻がいる
 候補者を迎える列に花吹雪
 大正のロマン消えゆく赤煉瓦
 肩寄せて歩く恋路の先を読む
 仕合せな猫がテレビでコマースヤル
 赤旗を振るメーデーの五月晴
 申告がすむと一気に春がくる
 恋してるリズムが軽い赤い靴
 作秀 本蔭 伴子 てつお 茂 ときお 正人 秋園 うめ 祐二 敦子 末一 昭子

佳句地10選 (前月号から)

山下みつる選

桜が咲いたさくらが散った癌の人
 長男はヤッパリ父の肩を持つ
 一粒の点になるまで見送られ
 確実な歩幅で登る父の坂
 言い出して引けぬ明治の力こぶ
 裏方の汗には拍手届かない
 均等法僕にはメシが炊けません
 おろろと立つても開く自動ドア
 ドレスアップ青春の手毬がよく弾む
 父親の肩の高さでみた景色
 蕉風 遊光 鬼遊 金太 鈴江 芳仙 重人 正坊 寿美 糸葉

市長リコール金魚も笑う郡山

税務署で働き蜂が絞られる

注意してなお騙される四月馬鹿

再会へおろかな夢がうつろたえる

夕茜とても愛した妻だった

肩に散る花はそのまま立ちつくす

挙式終る赤いボルシェは春駆けける

百度石廻っているうち数忘れ

選挙戦タレントさんの手も借りる

格好良い先生だけでは役立たず

マドンナにラッキーだった選挙戦

花びらを散らして走る選挙カー

一票に飢えて路傍の手にも媚び

生きたとはこんな日もある泥まみれ

藤澤川柳

稲田

豊作報

華やいだ恋が花火のように消え

馴れ初めの縁は花火のうたげから

一瞬の夜景声のむ揚げ花火

終章を飾る花火を持っている

恋多き女花火の如く炎え

線香花火の終焉あわれ深紅一滴

新人類も花火見物は浴衣がけ

よみがえる過去の花火はかなしかり

若い歌手花火のように消えてゆく

人生も花火のようにぱつと散り

靈魂の不滅信じる目に花火

川柳化粧檣

植村客遊子報

金に縁ない者同土屋台の灯

果籠の鳥に枝切る日を延ばし

因縁をたどればやがて神に会い

はめてくれた人へ一枝剪つてあげ

風来坊

ふゆ

清心

正枝

和美

雅美

彩枝

三郎

かよ

美佐

秀伸

庄太郎

和子

豊作

承平

和江

三香

文古

たみ

八恵子

一咲

健太郎

進一

岳詩

大鷹

葉香

紅月

枝ぶりを褒めて茶席の人となり

帰りにグツとふくらむ旅かばん

笛吹いてこの町に住むビエロです

こけし買手誰かに似てる瞳を選ぶ

同権へ言葉に女の宙返り

嫁が来て言葉を選ぶこと多し

一浪と決めて明るい孫の声

春雨に降り込められて読書する

宴果てて南十字星仰ぎ見る

処世術子から教わる歳となり

沈丁花墓へ一と枝しのはせる

唄うまい飲んだらあかん酔っている

過去の事皆んな忘れて老翁生き

御先祖の供養すませて心足る

作句する頭上で蝶の戯れる

輪をかけて掛けて褒める通夜の酒

倉吉川柳会

渡辺

アドバルン森の祭りを見張ってる

旅ならばなるべく秘境にいきたいな

見ぬふりをする公園のバトロール

公園で知恵の輪解きが出来ました

あの旅行から毎日雨がふっている

頭には旅行日記が書いてある

性格が後姿に書いてある

炎天の路上へ毛虫はつて出る

感情に走った口に刺がある

走るのをやめたらあたり見え出した

走り込むランナーに温い師の腕

極楽の往復旅行なら参加

国引の風と出雲の旅をゆく

舶来のシャリでトロ食う日も近い

故実男

秋月

越山

白石

李礎

礎石

悲子

サワ子

みつこ

とし

輝月

遊峰

遊光

永楽

和子

客遊子

普句報

康子

坐牛

雄々

ゆり子

秋女

寿朗

かつみ

千秋

秋人

みなと

幸苑

満春

松女

柳風

公園のゴミ拾う人捨てる人

公園はつじじりやら子供会やら

足並みが揃えば走る傭の兵

旅行カバンは夢がいっぱい入る

立ち上り雲掴まんとするわらび

連休の旅に疲れたとも言えず

旅行地図エイズ地帯を載せている

ひた走る汗に幸福駅がある

走るのが苦手で逢瀬摘んでいる

スピードが過ぎるとお巡りさんが呼ぶ

退屈をさせない人となら旅行

川柳ささやま(丹波川柳大会)

脇田米朝報

惜しまれて花道がある花も咲く

惜しまれて天道を惜しむ眼が痛い

ゴミ箱に明治を惜しむ眼が痛い

人柄を惜しむ悲しい通夜の酒

女盛りの毬がはずんで咳止まる

嵩高い咳に不満がありそうな

咳込んだ老父の背中にあるあせり

土くさき掌に内職のベン走る

内職の背で純情な子の育ち

おとなしく夫に陰の手内職

気となしく叱られている下ごころ

サンクラス叱りもならず父の獄

よく叱る母ちゃんなのに好きという

我慢して和の花咲かす強い母

父の我慢素直に継いだ土性骨

舌三寸男を料理する刃

チンと鳴る料理へ包丁錆びてくる

老い二人気楽にすするところ汁

叱っては呉れぬ背中が身にこたえ

小生

碧水

荒介

次男

石花菜

螢

とみお

瑞枝

完司

独歩

苦句

文平

エキオ

白砂

越山

靖朝

米朝

裕子

孝風

美代子

こつる

双入

百合子

初子

まさの

久恵

ゆう也

和子

貞子

可住

熊本川柳会

有働 芳仙報

椅子一つ貰い労組へ離縁状

真吾

薬づけこんなに呑んでいいものか

しゅくろ

そのうちに別れる指輪はめてやり

哲翁

物溢れ心貧しき平和かも

謹爾

しんしんと雪の夜こけしの独り言

アヤ子

こけしから北の便りの届く部屋

緑

「各地柳壇」 担当交替

並びにお願い

各地柳壇の原稿整理は清水健司が担当
しておりますが、今般、玉置重人に交
替致します。

なお各地句会担当者をお願い申し上げ
ます。

一、締切は毎月25日本社必着のこと。

遅れると翌月回しになります。

二、必ず原稿用紙20×20を使用。最上
段より句を書き、雅号は下三段にそ
ろえて下さい。

三、文字は楷書で誤字のないようお願
い致します。

編集部

思い出が一つ一つにあるこけし
年金の余生散歩の犬と呆け

一言も物言わず日が暮れる

立仕事すれば眠るくせがつき

静岡市川柳塔同好会 永倉

ライバルに裏を読まれたお人好し

一徹に技を守って裏住い

許すのは君ではなくて俺の意地

夢を追う男の肩幅広く見え

放蕩の揚句髭だけ負け惜しみ

花形の足跡つけて猫の客

心臓の鼓動止まらず地価暴騰

嫁を褒め姑をほめていい家庭

進学の孫が笑顔を見せに来る

一日の動き知ってる万歩計

負け惜しみ言うなと父に叱られる

屋上の広場で泳ぐ鯉のぼり

母さんの使う鉢はよく切れる

行き摺りに交す笑顔の顔見知り

売り上げの税が総理の身を締め

テレビ飽きヨモギ摘んでる日暮時

七十を過ぎて迂闊によく転び

金儲け裏に危ない落とし穴

わかあゆ川柳会 小砂

只の石に文字を刻んで水まつり

湯気やがてガラスの面に凍りつき

村界に睨みを利かす石地蔵

拝むのも踏み石になるも同じ石

孫二人洗って風呂の湯気に酔い

怪我させた石ころにも言い分あるだろう

プライドを持ってる石にある序列

一進

方円

康子

宵草

僕川報

弧秀

金吾

紀代志

定次

孝平

きぬ

まつゑ

やす

たま

たき

みつ

庚子郎

喜平

静代

千代

僕川

白汀報

ヒデ子

聖子

翠星

世似

英子

かつ子

惠美子

未来図を湯気に託して露天風呂

私等の秘密は湯気に見せとおき

おでん屋の湯気が明日を忘れさせ

盆景の石がささえた無言劇

消火器が落ちつき払っている遠火

川柳塔唐津支部 久保

気紛れな種が忘れた頃に咲き

子の夢の高さに吊るす鯉藏

山菜にそこそこの値がついている

市議選へ部落が躍る泥試合

日記帳総理へ訴状書いておく

二十一世紀やがて出番のパンの耳

二枚舌使って当選又使い

時々表情替えるコケシです

春眠や嫁の時計は進まない

逆立ちの子に手助けをしたくなる

大釘が抜かれ田舎が遠くなる

川柳泉尾 吉川

笹の葉の淡雪春の香に解ける

折り合いのつかぬまま漕ぐ夫婦舟

ビバレイカを入れる生放送

オクターブ下げて悪戯孫叱る

父の背をよいしよしいしょの通り抜け

春眠の朝の布団にある未練

悔むまい花の咲かない人生も

ほめ言葉も聞き飽きた桜の木

政治家の年に似合わぬ顔の艶

大輪を咲かせる夢は持ち歩く

咲くはずと待つて人生古希迎え

咲くもよし散るも見事な花吹雪

ひと筋に生きた道具の艶の跡

鈴江

歳栄

清泉

はるみ

白汀

正敏報

虹汀

久仁於

掬水

朴竜

四郎

高明

旭恒

あき

花代

香代子

正敏

寿美報

美子

シメ子

美南子

清子

三世

敦子

淑子

三千代

伴子

広子

和子

シマ子

昭子

今ならば許せる父の艶話

艶のない任地の靴が気にかかる

嫁に来て折れて勝つこと教えられ

よめはんに折れるばかりの定年後

新しい時代へ親の方が折れ

定員割れ殿様大学折れて来た

花だより二分咲五分咲散りはじめ

触れ太鼓掃りの客の背なで鳴り

ふつかな娘をよろしくと腰を折る

侵略をしずかに救す赤珊瑚

咲き誇る牡丹も散りゆくあさきゆめ

川柳ねやがわ 高田 博泉報

せせらぎのメダカの学校も春が来た

如才なくしつかり者であわて者

私にもなんと優しい春の風

習性かみの虫淋しい一人もの

記憶だめし孫の入試を解いてみる

お百度参り自分で踏める有難さ

見ていない顔してみている隣の目

老いの身に買うものはなし売上税

紙人形そつとなでと目をつむる

あときの鞭が土台となった位置

朝めしを食べぬもやしの子が育つ

妻の目を外せばうまい朝飯よ

故郷の記憶ふわつと暖かい

物想う妻鉛筆を削りすぎ

曇のちとときどき雨で恋育つ

落書がない学校の丸坊主

給食が美味で学校休まれず

桜の下でばけを案じ合う夫婦

すばらしい習性蜘蛛のハンモック

トミ子

満州子

文子

敏

美代子

素子

義一

白水

キヌ子

弘子

寿美

友子

峰子

なつめ

権太

吉峰

増造

勝美

平

創吾

勇太

菜月

藍子

歌堂

おさむ

淳朗

波留吉

君子

春子

手に乗せるインコが歌う妻歌う

後輩と聞いて余裕を取りもどし

ああシヨック父からアナタドナタさん

廃校に名残りの桜只一つ

茜空ガンの序列に明日がある

味噌汁の朝が恋しいバスボート

ポケットの朝を探り禁煙思い出す

一人前になった息子を見えています

受話器へも頭の低いお付き合ひ

朝ごはんつくる嫁はん欲しくなり

凶悪犯も蛙も故郷へ舞い戻る

学校の成績順でない出世

朝めしを監視されているように食ひ

同窓会記憶の中の顔がない

赤絨緞踏むとバツジの胸が反り

卒業をすると漫画家になる積り

風見鶏これから腕の見どころ

名案はないかと上司なにもせず

夜爪はつまぬ習性老母が居て

宝くじ当った数字忘れない

スーパリーの出口で定期だしかける

栄転の裏で転校子は嘆き

朝めしは軽い話題ですませとく

遠い記憶童話のなかで眠ろうか

朝めしはパンにしますます雀の子

寝たきりへ売上税の声がする

忘れな草思ひ出させる人もない

物おじをせぬ習性でよく溺れ

飢えた日の記憶フランク揺れていた

記憶よい妻でどうにもやりにくい

校門を出ると一年生走る

シマ子

あやめ

かすみ

とし

静江

一途

光

冬葉

晴風

速水

一矢

まさお

博泉

章

亜成

良三

頂留子

英千子

三千子

度

敬山

吉之助

礫

鬼遊

亜鈍

あいき

小路

麗水

眉水

紫香

通り抜けへもネクタイを締めて行く

久世川柳クラブ 二宗 吟平報

妖精の嘘にビエロになる男

一枚ずつ脱げて緑の風が吹く

日本中売上税で今日も暮れ

初対面おんなじ趣味の暖かさ

お水取り済んで奈良から春が来る

玉子酒家中軽い風邪を引き

そびをかう孫が障子に穴をあけ

年寄りに貯金するなと利子を下げ

にこり酒酌めば春だと思つ

素人がよい枝ぶりを切り落とし

十二単衣程着ぶくれて身を支え

チャンネルを嫁に合わせている平和

春うらら飛んでみたから籠の鳥

戻り寒弥生の空に雪の花

梅の花実りあやぶむ雪帽子

血眼の鳶悠々と人は見る

一本のマッチが叱る春の風

焚き火の輪囲み噂の種をまき

残り火は誰にも見せず伏せておき

最終のランナー見守る聖火台

仲たがい元をただせば金かもと

金メダル胸に優勝泣いている

脛かじり論しながらも金をやり

三世代朝をせわしく食うて散り

初物を食うて寿命がまた延びる

健康が金のかからぬ趣味えらび

川柳大阪 山下みつる報

鯉のばりメーデーの声聞いている

薫風

美恵子

あき子

保恒

藤江

さわえ

ふさえ

江山

千代女

虞人

甫正

小安芸

つゆ草

つた子

禅心

秀香

定山

半仙

山人

吟平

種人

邦人

知代人

伊久栄

静香

光水

勝子

志重

与呂志

孝行が死語となる世へ貯金する
ほけたくはないまっすぐに背を伸す

あご張ったことも似ていたる宮参り
偶然の一致仕組まれたとは知らず

年金に指図されてる酒の量
うす味に馴れて夫婦の老いを知る

新妻がそつと差出す母子手帳
紙オムツ泣き虫娘今は母

桜咲きさいふも心も皆開き
宴会に散らす花びら三昧の音

桃われの娘さかりの色つばさ
桃の花春が近いと告げて散る

梅過ぎて桃が間をもつお水取り
公園の四季が楽しい散歩道

音痴でも流石センセとかつぎ上げ
甘く見た違反に戻る橋がない

正道を歩めば強い風当り
北斗七星夜空にロマンあるかぎり

雪不足北の地方が負う痛手
雪追つて北の空へと飛ぶ娘

ゴールまで亀の歩みを笑えない
逆行の政治路線を憂う春

片足は野党片手は与党ねじれてる
京都塔の会

旅先で疲れた時の水すまし
二月堂青衣の女人在すやと

帽子掛け古い思案がぶら下がる
旅人になって三年坂くだる

春宵一刻あいにく月は欠けている
独り言聞いてはしそな声で言い

窓越しに春少しずつ少しずつ

本 重 人

柳 弘

天 祥

も と み

三千雄

遊 心

喜 楽

鉄 心

喜 醉

醉 舟

笑 風

金 太

一 介

天 平

司

比 呂 志

洛 醉

み つ る

杜 的 報

敏 正

英 子

武 庫 坊

年 代

求 芽

芳 子

杜 的

上り坂の真中へんで振り返る
生あくびこらえて小唄の会に座す

聞き上手相手の心理よんでいた
ふるさとの小川の流れを信じてたい

洗濯の好きなお人て喋らない
雪椿はころび浮かぶ亡夫の顔

嗜好きの女へあいさつだけしとく
算盤ではじきはしたを負けてくれ

心浮き浮き小犬の頭までていて
N T T株が浮き浮きさせた春

浮き浮きと春の下絵を描いてる
目の前の緩いボールを打たされる

ラストボールは緩く気配りして別れ
ちとゆるい宿の鼻緒で出る浮気

有頂天心の鍵が緩くなる
緩やかな流れの底にあつた渦

住み馴れた長屋本音で生きている
監督の本音をマイク喋らせてる

愛という支えに本音は伏せておく
本音吐く男の心透けてくる

消壺でまだ燻っている本音
柳柳塔まつえ五月例会

恒 松

魚屋の儲けを四季の風が呼ぶ
六道湖の魚眠れぬ日が続き

三枚におろせず魚もてあまし
魚好きこうまででいかに骨にする

魚釣り風がうたでに帰らない
天然に太刀うち出来ぬ養殖魚

小魚も献立表に入れておく
円高の海で魚が欠伸する

冷凍魚海に帰せば泳ぐだろう

達 子

孝 江

巨 詩

実 男

白 李

花 代 子

美 穂

紫 香

陽 露 子

飛 鳥

水 客

葉 子

萬 的

風 云 児

榮 女

白 漢 子

明 代

紅 陽

幸

叮 紅 報

芳 子

由 郎

み え

桂 江

満 子

笑 円

静 恵

三 男

魚屋へ魚が運ぶ四季の味
亡き妻にそっくりさんが居て慌て

ときめきを覚えそっくりの人に逢う
そっくりな仕種が父を悩ませる

そっくりの目鼻で分るあそこの子
眉太が祖父そっくりで可愛がられ

そっくりな電話の声がとまどわせ
そっくりな程よく似てる背なを追う

初恋の女そっくりな人に会い
有り金をそっくりりたい嫁にやり

吹出す程のそっくりでチャンピオン
小説のような不倫へ身を焦がす

転落の女不倫の枷を負い
不倫だな別れた人を愛しぬく

蝶々の不倫を許す春の恋
むらむらと不倫を誘う倦怠期

流行の不倫エイズが待つたかけ
不倫など何処の人種か米をとぐ

さまざまな角度で不倫あばく記者
さくらんぼの朱不倫には気付かない

蒸発の原因不倫に泣く一生
夫婦のきずな不倫をよせつけず

子供の日も休まぬ父を淋しがり
三歳児も流行を主張する

悩みあり子供供心にかえりた
子供の国の大統領は女の子

子供だと思つておつた瞳にあわて
女房が新車バックにポーズ取る

大げさなポーズで笑つて和が出来て
薫風の墓の花にもあるポーズ

満開の牡丹県花というポーズ

正 朗

代 男

き み え

寿 美 子

育 子

鳳 人

秀 子

貢 治

美 範

静 翁

友 子

雄 々

舞 吉

昭 二

蒼 流

愚 童

敏 雄

登 美 也

多 賀 子

翠 星

小 生

快 哉

芳 枝

静 丸

鶴 根

与 根

巡 歩

日出子

川柳塔きやらぼく

石垣

花子報

蝶が来て野の花々も喋り出す
お喋りが花のねむりをさまたげる
おしゃべりの鳥もいつかは答えだす
古手紙今日も喋ってくれるのか
コーヒーをのみお喋りな風になる
おしゃべりの続き聞いている電話口
巢立たせた娘のおしゃべりを聞いてやる
おしゃべりがしたくて春の花が咲く
人並におしゃべりしたい水中花
おしゃべりの糸手繰る途中で纏れそう
赤電話まだ喋る気が金を入れ
おしゃべりをやめて聞こうよ風の音
オームでも喋りすぎると嫌われる
間違いをしゃべって長い湯に浸る
よく喋る女を軽蔑せぬように
雨はおしゃべりで女を振り向かす
むらくも川柳会
一年生声を揃えていい返事
大蛇出て昔にもどす祭り笛
立ち話見えなくなった孫は何処
昔より世界だんだん狭くなり
新緑へ家中の窓みんな開け
呱呱の声どの子も忘れぬ母の胸
バスが来た早く早くと立ち話
バラソルを廻してはすむ立ち話
野仏に声なく心見透かされ
病床の窓新緑の風が舞う
また会って昔にふれる立ち話
あの昔あるから黙って妻と老い
鶯の声へうっとり歟やすめ

純子 やえ 荒子 富美子 夕子 とも子 田鶴子 玲子 恵子 花子 日枝子 瑞枝子 千代子 百代子 正朗子 千里子 林蔵子 文子 みどり 武衛子 よし子 やス子 鶏生 マサコ 義良 是代

元氣かと嬉しい元氣な孫の声
隣室で話すお客の笑い声
ご近所のメンバー同じ立ち話
立ち話また会いますと市場竜
豊中もくせいい川柳会 田中
もう妻が折れてくれてもいい頃だ
折り畳み傘に私もなりそうで
伊勢エビの価値は折らない髭にある
折りいった話と言われ緊張する
名所巡り石垣だけが残る城
往年の悲喜劇話まった城の中
吊皮に城を守りに行くラッシュ
大阪城ビルの谷間に沈みそう
癖のある足音させて母が来る
癖のある男横丁へ曲がる
癖のある顔で羅漢の石並ぶ
ワープロに古い頭が叩かれる
古巣へはもう戻らないツバメの子
新築へ半分古い家具を置き
旅枕津軽の三味も夢の中
踏まれてもふまれても麦の土根性
草萌えて花の咲く日の美しさ
雑草の花おわるまでおいとおく
花菖蒲涙もろきは母に似る
悲しみを重ねてあしたの糧にする
郷愁に買う啄木の初版本
話上手な友は嘘もまぜながら
大急に大きくなっててもあます
説得の反響はない蝸牛
禁煙車隣の妻がすまなかり
五月雨や酒か女かマージャンか

吉野 竹乃 芳子 明朗 正坊 英子 薫風 登志実 房子 美祢子 福一 隆 典子 寿美子 萬的 洋子 きく子 よし子 め女 富子 慶子 春子 作二郎 美幸 つえ子 喜代子 眉水 白溪子 曲手 博史

問答は無用にあらず木堂忌
岸和田川柳会 植山
車座で同期の桜老いにけり
命綱夫に預け志摩の海女
喜寿の年平穩にある春炬燵
桜一輪売上税のウソを聞き
夫婦茶碗欠けても続く平和な日
走りたくない人生も残しとこ
選挙カーお願い連呼でめぐる町
雑草に負けられはせぬ子の育ち
一日の仕事をしまうコンパクト
立読みの本はまともに開かない
嫁りともない娘飾って人に見せ
焼き肉の匂いも混せて花の寺
人生の節目となつて春を逝く
突然の計報悲しや菜種梅雨
何時の間か親父を真似た歩きよう
雨の味知らずハウスで四季実り
銀婚式渡した忘れ感謝状
茶室から出ると女はかしましい
女には女同士という強味
ネクタイをゆるめ叫んでみたくなる
花冷えに風邪ひきそえた月詣り
泣く時はいつでもおいで広い海
生き甲斐を感じ多忙な日々の喜寿
川柳わかやま 神平 狂虎報

正坊 武助報 正坊 通彦 圭一 ダン吉 寿美子 加代子 ゆづる 浪速子 一弥 狸村 富志子 さよ子 ひで 住生 春栄 希久志 勝助 武助 射月芳 甘平 操子 光代 栄美子 緑良 隆積 千寿子

飽食がリングの気持ち判らない
花束を贈る気持ちが伝わらぬ
この気持ち通じてほしい辻地蔵
連弾のピアノをいつも輝かす
ウインクのように輝く亡妻の星
朝露に輝く苗と対話する
偏差値も無く輝く一年生
そろばんをはさずと輝く設計図
朝日爽やか皆宝石にしてしまふ
何色が輝くだろう白い画布
夕涼み輝く星へ夢描く
別々の趣味で退屈せぬ夫婦
退屈な尻尾を敵にねらわれる
退屈が考へついた下駄を履き
退屈が生んだ特許のおもいつき
妻も退屈ケンカ買いくる
退屈を少し分けてはくれまいか
大海を豊かに漕いで出る欠伸
障害を乗り越え春をつかみ取る
手をつなぐすべを覚えてきた利害
一利一害六月の雨見つめよう
善人に利害を問わぬ顔がある
害悪な言葉に気づかぬ喋り好き
おもてうら必ず害はついてある
害虫を潰す虚しさだけ残る

川柳たけはら

森井

著居報

おたんじょうびいつもあればいいのね
おとうさんテレビをひとりじめにする
みていたらおしごともしんどそう
新学期早く自転車になりたいな
四年生男の先生になりました

小四晴美

武雄
英子
稚代
幸

うれしいなバスに酔わずに来た花見
宿題がいつも多くてあそべない
いたすらをするけどかわいいうちの大
雨のせい駅の桜がすこし散る
スキーでの賞状持つて山を下り
窓ガラス拭いて春の陽を入れる
女同士で母と私のすれ違い
短大生短いですぞいざグッシュ
順風満帆ピンクの絵の具ばかり減る
カタカナ語に国鉄もなりにけり
今年まだ足腰確か花巡り
もう一度訪ねてみたい一分咲き
選挙戦友情までが冷えてくる
ケセラセラ照る日曇る日明日がある
窓あけるまでは気づかぬ春の雨
お彼岸や亡母は私と同じ年
寝たきりの話の伽になつてあげ
ひとときりつて降ろうが降るまいが
おちよろ舟唄ぶ木江のたたまい
神木や三千年の威厳みせ
リングかむ八十いくつが羨まし
くつろげてわが家に限る四畳半
うぐいすも片言で啼く春彼岸
春の声いほ鮮かに駆けつける
金のない時には時のひとり者
母想い三瓶山の景に付つ
花便り花の匂いが鼻をつく
雲海を眼下に六甲山の早春
隔世遺伝火のつきやすい血を貰う
残り火を燃やし尽くさん老春よ
不器用は雨の一日もてあまし

中一純
小五由博
小四聡子
中三早代
小四祝幸
中二亜貴子
高三紀
大真弓
静水
伯峰
房子
ヤスエ
静佳
喜美子
春美
キヨ
光頼
雪子
八重美
喜久恵
麻代
勲
俊夫
千年枝
君枝
浪子
房枝
静風
千恵
光子

雨降ったおかげ朝風ひさしぶり
はこべ草刈るには惜しい露光る
子を放つ島はゆつくり春になる
逃げ道をあけて鋭いことを言う
寄りそって何語るのか父母の碑よ
ここにきて貧乏育ちが活きてくる
下宿して家がえちばんいいと言う
相性っていいなあだまっていって通じ
風が鳴るすこし不安になつてくる
シャボン玉虹を求めて舞いあがり
まだ効き目ない開運の札である
母似だと言われてからの娘がまぶし
片ちびの靴が知ってる内緒こと
若人に一目置いて持つペンよ
実印の重さ夫がいてくれる

南大阪川柳会

中川

滋雀報

寝がえりを何度もうっている疲労
退屈な人にも疲労はたまつてる
掌で結局踊つていた疲労
消しゴムで消せる位の疲労です
心よい疲労に酒が旨すぎる
よく喋る女と別れた疲労感
身軽さへ蛇口ゆるんでしまらない
冥土からの使者へ身軽にしておこ
身軽になった私の懺悔録
身軽さがとりえでうまく使われる
咲き終えて皆んな身軽な花吹雪
チョンガーと言う身軽さで飛ばされる
身軽さへ旧人類の後指
一徹になつて自分を支えてる
老いの一徹こちんと意見はね返す

愛子
榮恵
蘭幸
政己
笑子
令狐
清水
比呂子
淑子
一路
康子
博子
シゲヨ
貞子
信治
千里
恒明
春蘭
ハル子
公一
楓楽
文秋
雀踊子
妙子
善信
慶三
勝美
智子
度

一徹がだまって居れぬ長談義
一徹がこもりと詐欺に騙される
一徹を縫いで居職の灯は消さず
一徹で通した父の道具箱

結局は父が押し切る志望校

路地裏のリッチが花粉症を病む

少うしリッチな食事へ化したバイト料

五月晴れ少しリッチな旅にでる

俄かリッチ眠れぬ風の音を聞く

リッチにはまだ程遠い預金帳

チョコレート頂くほどの仲でない

お預りします頂くとは言わず

御祈禱を頂く老婆のきれいな瞳

一日の疲れは靴と共にあり

退職金貰って身軽になる離婚

駒つなぎ川柳会

里

言い訳は輪の外にいてせずにおく

ギリギリでシナリオ通り妥協する

強烈なボルノ雑誌を父忘れ

奥さんが陽気で失業救われる

猫も母もつらつらとさす陽気

セールの天才に聞くその秘密

変哲も無いのを天才凝視する

強烈な色彩感でねむられぬ

北の海気戻ってくる陽気

雲をにらんで天才の独り言

強烈な色彩大陸的にめられる

致死量のギリギリ花はまた咲こう

言い訳に元氣な孫のボール投げ

言い訳にワイングラスがゆれている

ギリギリの手の内読まれていたらしい

小路報

柳右子

国公

東雲

新造

柳影

章久

悟郎

冬葉

庸佑

一高

花仔

曲ん手

善信

美津枝

恒明

しんじ
章久
曲ん手
寿美
綾珠
作二郎
柳宏子
柳伸
柳坊
新造
滋雀
庸佑
頂留子
晴風
雅風

強烈に的を射ている才女のペン
妻は陽気でよその男によくもてる
天才が魚眼レンズで探す地図
天才の不幸は祖国から追われ
言い訳をしない夫を信じてる
ギリギリのところで蹟く愛ばかり
強烈なゴッホの黄が燃えている
一樹すつ目覚め陽気に喋り出す
湯豆腐は半分ずつでよい陽気
天才が家計に響く趣味を持ち
天才がまたひとり逝く流れ星
言い訳の土産の折しも酔っている
強烈な愛も演技でなら出せる
悪友が集まり陽気な通夜にする
ギリギリの夫婦は過去を隠し切る
言い訳をするのに妻の知恵を借り
明日の絵をととも陽気に描く家族
強烈なパンチよめはん先だたれ
ギリギリの線を譲れず野に下る
強烈な出会いの後に来た別れ
天才にされて淋しい夜がつづき
よく流行る店に陽気なママがいる
直線だけ知って天才孤立する

サークル檸檬

松本今日子報

円高もNTTもたべながら
食べ物に勿体ない言葉消え
紅かなめ朝日にもえて初夏となる
缶ビール小一本の甲斐性かな
羨まし意欲燃やして励む人
メニュー程食べた気のせぬ披露宴
少しずつ燃やす私のマッチ箱

勝美
壯之助
喜代治
史好
眉水
千代三
博子
白兔
恭太
覚然坊
射月芳
雀踊子
文秋
柳宏子
美幸
重人
浩一郎
笛生
金太
真砂
萬的
柳伸
小路

ハッタイ粉はどなかしい罐はなし
打吹川柳会
子報うらぎって山好きが山で去く
日の丸に理屈はいらぬかしら右
一将が雑兵の血で歴史書く
すれ違ふ人の心の香が残る
哲学の議論が尽きぬ書生下駄
もう一つ俺の怒った顔がある
つまずいた小石に文殊さまがいた
買つては儲かる話に乗った損
エイズでは品行までも疑われ
思わず口突いて出る感嘆詞
決断の受話器にクサビやつと打つ
気まぐれな空が旅でもしろうと言っ
先輩と思ひへ理屈ゆずるとき
身は病めど心は病まず種を蒔く
田満な夫婦で顔も似て見える
チビツ子の芸は大人をたじろがせ
気力ある花でさざんか赤く燃え
恍惚へ不運と言わぬ無邪気な瞳
芸のある方が出世の宮仕え

うみなり川柳会

森田

熊生報

習い事通ただけで身につかず
塾通い教育ママの見栄背おう
宣伝カーやつと寝た子に容赦なく
夢覚めて古傷痛む夜が長い
通院へやさしく春の陽がのぞく
連休をさけてのんびりプラン練る
通う血が奇蹟となつて孤児と逢い
姑さんが留守でんの気に朝寝する
過疎に住みのん気に老後送つてる

今日子
三四子
美緒
雅子
千代女
智恵子
泰子

薫風
たつみ
白峰
柳風
規仔
紫映
とみお
佳女
温子
ただし
晴月
菊枝
亮二
寿美
孝美
高代
節子
雄々
弘朗
辛子
小鹿
唯津子
華子
とし江
よし子
蛙泡
富美湖
茂登子

夢の橋出来て本校に通う子ら

一喝へ敵父慈愛の血が通う

幸せを寡婦連休も置いて生き

一瞬の目覚めに愛の箸を裂く

胃カメラが少しのん気になれと言う

命に保険かけてのん気に生きのびる

まっ赤な血通うから他人欺かぬ

ミサイル弾のん気に誰とかくれんば

古時計のん気な刻を守ってる

三幸川柳教室

桜井 千秀報

気がついて一人騒ぎの幕を引く

高速を一人よがりのサーキット

騒ぎには欠かせぬ顔で人気者

仰々しい話へ作業の手も止まり

ウォークマンまわりの騒ぎ知らんぷり

子の騒ぎたしなめて出る電話口

胸騒ぎ夕べの祈り深くなる

落ち着かぬ心へ小石投げてくる

喧騒のるつぽに孤独溶かしたい

妻の手で丸く包んだ一騒動

待ちわびた程に連休何もせず

寝た切りで連休もないうつろな目

にらまれる覚悟連休釣りに行く

天皇で始まりジャリで締めくくる

連休をまだ知らぬ子とレンゲ摘む

連休が来てははずまぬ毯二つ

愛想よく受話器を受けてため息し

顔色に返事はノーと書いてある

おいと呼びはいと答えてつつがなく

孤児の子が呼んだ餅が返らない

天人

黙光

希満子

大漁

雅女

螢

草人

葉士人

熊生

鉄治

政子

重延

育子

和子

千香子

茜

三千子

保子

孝子

福重美子

芙美子

力子

隆行

前田美子

由梨

重次

静

文子

忠昭

金一

行間に根みつらみが見えかくれ

主義主張曲げた返事にある自責

平手打ちこれが私の返事です

手鍋さげ応えてくれた妻の愛

俺が継ぐと家業に燃える子の返事

一刀両断の返事で迷いの雲を切る

賽銭をはずめど弥陀の返がない

幾色も飲んだ効いたのはどの薬

呑み込んだ苦のはなしがもつれ出し

県勢の浮上いつしか飲む話

川柳はびきの

本当のことは仲人重い口

五月晴れ孫が指さす鯉のぼり

地方選友も桜と共に散り

若作りエッチな風のクラス会

美を競う女子学園のクラス会

格子戸の素足が覗く徘徊りめん

恋めいた話に父の耳が立つ

年よりも若く見えろと言われない

閑職の椅子で投書になじみだす

還暦を祝うお寿司の紅生薑

陽役の味に徹する紅生薑

言い訳をそつと上手に聞いてやる

蝶迷うえんどうおたふくエトセトラ

寝ころべば気概休まる花の雲

逆風に細木数子の本を買う

淋しさにメロンも花も購うてみる

肩車父より偉い人になれ

葉ざくらのはんばりにまだ夢がある

OB会いま黙禱から始りぬ

決めてなき薬に迷う春遅々と

桂香

靖子

高夫

邦郎

みね

千秀

愛子

幸子

千枝子

智水庵

隆二報

憲太郎

隅谷義一

たけし

シメ子

トミ子

志洋

志洋

優

隆二

末一

伴子

忠宏

重樹

寿美

美代子

蛙声

白水

胡村

へそくりの癖がぬけない会計課

へそくりが出来たいつでも別れよう

へそくりが寒い話を聞かされる

馬鹿がいて古曲落語の息つなぐ

馬鹿でいて母実権を握ってる

やり直し教育ママは許さない

やり直ししたい心で若がえり

生残りかけて人生やり直し

千日手互いに避けたやり直し

やり直しできぬ無言の通夜の席

やり直すスタートライン消えている

占いの神も訪ねたやり直し

カップルが観光バスで舟をこぐ

カップルになる筈だった招待状

二匹目の泥鰌をさがす役廻り

役付いて仕事ばかり重くなり

二番目もお嫁に出して二人きり

いずも川柳会

目と耳が忘れていないきのこ雲

耳底の声に一票向き変える

耳許で愛確かめたこともある

踊りながらささやく位置に耳があり

耳さとなつて孤独の椅子にいます

耳寄りな話は買が待っている

久し振りに笑いころげる耳の穴

密謀も聞き逃がさじと壁の耳

潮騒の生涯消えぬ寡婦の耳

権力を握ると耳が遠くなる

耳寄りの話に悪の手がのぞき

福耳はわしに似たぞと孫を抱き

長い耳持った企業が生き延びる

弘子

昭子

重人

淑子

繁男

健三

三千代

ダン吉

吐来

清子

美子

一屯

満洲子

敏

吉岡きみえ報

夢酔

まこと

春雄

芳正

青湖

為一郎

智子

代仕男

功

義磯

芳風

雅水

雅水

雅水

雅水

王の耳民の雑音聞こえない
辻棲の合う方便に騙される
方便もお世辞もいらぬ土に生き
方便はいらぬ親子の血の絆
雷がへそを取るよと孫に言う
善人も時に方便という嘘もつき
方便もあまり過ぎたは毒の味
方便で咄嗟に大きな嘘をつき
方便と言つては嘘を撒き散らす
方便も世渡り上手の一手段
方便と承知の母は金送る
方便が誠になつて結ばれる
我が道を守り通した老いの背な
身を守る養虫小枝を信じきる
家守の父も晩酌加減する
守られてる倅せに今日励む
守りたくても解釈違へば守れない
駆引に負けて内堀まで埋める
老い一人駆引なしの此の暮らし
駆引で還らぬ島が北にあり
横丁に駆引うまい隠居いて
猫の恋駆引がある屋根の上
駄菓子屋で駆引のない釣りもちう
欲しそうな顔で植木は値切れない
世渡りを教えて母は老いてゆく
ネオン河浜で渡る夜の蝶
海峡に渡れぬ橋が架けてある
ニュー商法渡る世間は金ですむ
住みついて郷に従う渡り鳥
骨一本抜いて気らくに世を渡る
因習を渡る愛には橋がない

勝子 独仙 桜水 ノブ 軒太 風子 勝水 鈴子 義登 満江 智枝子 昭二 多賀子 巡歩 桃昭 敏昭 秀子 睦子 篤子 芳枝 草丘 きみえ 幸一 里チエ 清吉 主詩朗 元之介 愚童 智恵子

離縁抱えて渡る寒の橋
虹の橋渡れば明日が見えますか
地球儀に国境のない渡り鳥
悔いいくつ残して橋を渡り切る
七彩の虹を渡れば亡母の声
競売で人に渡った涙判
渡る世間鬼になつたり仏にも
荒波を越えて渡った夫婦舟
とらの子を渡して老いの城崩れ
母の背を踏んで渡つた今日の幸
翠洋会
楽しみを母と分け合う旅に出る
野はみどりもう駆けたりはせぬ夫婦
金ためて極楽行きの切符買つ
幹事さん切符一枚たりません
楽しげにタンポポ風と飛んでゆき
改札で他人の顔になる切符
空想はみどりをバックにしてみよう
国鉄の切符だ大事に残しとく
ネコが居て夫婦楽しくしてくれる
相談に利害がからむ元夫婦
コンサートの切符に恋もつてきた
曲り角楽しい夢がにけていく
二枚ずつ買えば切符も嬉しそつ
佗び住居楽しく暮らすべを知り
相談に子の成長の心知る
楽しいことありそつ花を買つてくる
飲むことのつどいは万障繰りあわす
切符やぶつてすこす帰る待ちぼうけ
文楽の切符たのしい日を数え
堺川柳会
河内 月子報

久栄 弁次郎 早苗 律子 流石 似志 辰子 文子 緑之助 兼治郎 さと美 満女 文子 萬里 美津枝 春子 君子 良江 為子 宏子 照子 みつ子 綾子 光子 楓子 登志実 鬼遊

遠くから出番を待っている天狗
うしろ手が気になる甘い語りかけ
新茶出てやつとたのしい日々となる
手拍子に乗る気安さで生きたいね
手の内は見せない父のキーホルダー
飲まされて彼女の父にテストされ
手相見がビタリと当ててから迷い
高すぎる天狗の鼻が目障りで
手なおしをされて個性が見失う
気の弱い天狗の鼻はすぐ折れる
サミットで会おう天狗とビノキオと
鈍行で行きます春のフルムーン
人間がこわいと天狗言いました
無学でもこの手に自信持つてます
霧消えた森に天狗の面のこる
豆の木に登るテストなら受けよう
手話の子の笑顔と笑顔風かおる
おとなしい兄が討ちとる天狗の面
天狗から圧力という咳ばらい
帰りがたくなるからひとり旅に出る
天井のふしに睨まれ寝つかれず
釣天狗逃がした魚大きすぎ
手を叩く練習もさすディレクター
鼻歌で出て行く妻が気にかかると
出しやばりをやめたか淋しそつです
行く先があれば家を出してみたい
夫婦ではないと天井知つていた
姑さんが時々テストしに来る
天井のふしがわたくしにけしける
川柳後楽
井上柳五郎報

紀美女 頂留子 寿美子 凡九郎 金太 新造 博平 甘子 曲ん手 岳人 美房 柳影 真柳 道女 紫香 いわゑ みつ子 はつ絵 千万子 雪子 東雲 五月 半銭 小雪 素灯 月子 天笑 金吾

グループを外れ終電車の遅
グループが悪いと母はくやしがり
悲しみの充電だけはいらぬいよ
充電をしているのかもねむり猫
毎日が充電という栓を抜き
充電をして私の殻破る

充電のきいた男の丸い顔
習性を操る鶴匠の妻であり
負け犬の習性戦う前に逃げ

内緒ごとオウムの習性つい忘れ
知り過ぎた習性先手を打ってゆき
習性を変えたい殻がかた過ぎる
連休が働き蜂に長すぎる

ペルシャ湾効果のなかった星条旗
ミサイルの威力米艦肌で知り
辻棲も合わず呂律も回らない
辻棲を合わせその他で報告し
辻棲が合わず算盤持つて寄り
辻棲が合わずと辻棲合わぬ嘘を言い
辻棲がビタリ相合傘が良い

辻棲がビタリ相合傘が良い
辻棲が合わずと辻棲合わぬ嘘を言い
辻棲が合わずと辻棲合わぬ嘘を言い
辻棲が合わずと辻棲合わぬ嘘を言い
辻棲が合わずと辻棲合わぬ嘘を言い
辻棲が合わずと辻棲合わぬ嘘を言い
辻棲が合わずと辻棲合わぬ嘘を言い
辻棲が合わずと辻棲合わぬ嘘を言い

土居

耕花報

あすなろ

正子

ひでの

みさえ

寿恵子

朝代

智泉

睦子

老父母へ腹で詫びてる筆無精
本心を明かさぬままに花が散る

鮫虎狼

玉水

拓治

柳五郎

佐加恵

哲郎

健一

青銅

進

美智子

たけ志

博友

草風

秋月

照路

進平

紫峰

吟平

浄美

番茶

文平

花報

耕花報

あすなろ

正子

ひでの

みさえ

寿恵子

朝代

智泉

お昼寝か風の無い日の鯉のぼり
鯉泳ぐ五月の空に着替える
眼に見えぬ絆の糸をたぐりよせ
想い出のアルバムで師の顔と逢う
丸木橋渡つて次の地図を買う
太陽を味方にうれしい芽が覗く
馬鹿は馬鹿なりの性持っている
給食のように夕餉の大家族
風向きにくるりと背を向ける
血の給捨てたい時もある浮世
もめ事の種を丸めて妻の知恵
この辺で折れてみようか姑の意地
祈りつつ織つて祈願の千羽鶴
頑固さの折れた汐時見付からず
砂抱いてシャボテンさんは粗衣粗食
檜山の坂に絆が落ちていた
まだ人に誰とも逢わぬ彼岸花

お昼寝か風の無い日の鯉のぼり
鯉泳ぐ五月の空に着替える
眼に見えぬ絆の糸をたぐりよせ
想い出のアルバムで師の顔と逢う
丸木橋渡つて次の地図を買う
太陽を味方にうれしい芽が覗く
馬鹿は馬鹿なりの性持っている
給食のように夕餉の大家族
風向きにくるりと背を向ける
血の給捨てたい時もある浮世
もめ事の種を丸めて妻の知恵
この辺で折れてみようか姑の意地
祈りつつ織つて祈願の千羽鶴
頑固さの折れた汐時見付からず
砂抱いてシャボテンさんは粗衣粗食
檜山の坂に絆が落ちていた
まだ人に誰とも逢わぬ彼岸花

お昼寝か風の無い日の鯉のぼり
鯉泳ぐ五月の空に着替える
眼に見えぬ絆の糸をたぐりよせ
想い出のアルバムで師の顔と逢う
丸木橋渡つて次の地図を買う
太陽を味方にうれしい芽が覗く
馬鹿は馬鹿なりの性持っている
給食のように夕餉の大家族
風向きにくるりと背を向ける
血の給捨てたい時もある浮世
もめ事の種を丸めて妻の知恵
この辺で折れてみようか姑の意地
祈りつつ織つて祈願の千羽鶴
頑固さの折れた汐時見付からず
砂抱いてシャボテンさんは粗衣粗食
檜山の坂に絆が落ちていた
まだ人に誰とも逢わぬ彼岸花

お昼寝か風の無い日の鯉のぼり
鯉泳ぐ五月の空に着替える
眼に見えぬ絆の糸をたぐりよせ
想い出のアルバムで師の顔と逢う
丸木橋渡つて次の地図を買う
太陽を味方にうれしい芽が覗く
馬鹿は馬鹿なりの性持っている
給食のように夕餉の大家族
風向きにくるりと背を向ける
血の給捨てたい時もある浮世
もめ事の種を丸めて妻の知恵
この辺で折れてみようか姑の意地
祈りつつ織つて祈願の千羽鶴
頑固さの折れた汐時見付からず
砂抱いてシャボテンさんは粗衣粗食
檜山の坂に絆が落ちていた
まだ人に誰とも逢わぬ彼岸花

お昼寝か風の無い日の鯉のぼり
鯉泳ぐ五月の空に着替える
眼に見えぬ絆の糸をたぐりよせ
想い出のアルバムで師の顔と逢う
丸木橋渡つて次の地図を買う
太陽を味方にうれしい芽が覗く
馬鹿は馬鹿なりの性持っている
給食のように夕餉の大家族
風向きにくるりと背を向ける
血の給捨てたい時もある浮世
もめ事の種を丸めて妻の知恵
この辺で折れてみようか姑の意地
祈りつつ織つて祈願の千羽鶴
頑固さの折れた汐時見付からず
砂抱いてシャボテンさんは粗衣粗食
檜山の坂に絆が落ちていた
まだ人に誰とも逢わぬ彼岸花

お昼寝か風の無い日の鯉のぼり
鯉泳ぐ五月の空に着替える
眼に見えぬ絆の糸をたぐりよせ
想い出のアルバムで師の顔と逢う
丸木橋渡つて次の地図を買う
太陽を味方にうれしい芽が覗く
馬鹿は馬鹿なりの性持っている
給食のように夕餉の大家族
風向きにくるりと背を向ける
血の給捨てたい時もある浮世
もめ事の種を丸めて妻の知恵
この辺で折れてみようか姑の意地
祈りつつ織つて祈願の千羽鶴
頑固さの折れた汐時見付からず
砂抱いてシャボテンさんは粗衣粗食
檜山の坂に絆が落ちていた
まだ人に誰とも逢わぬ彼岸花

お昼寝か風の無い日の鯉のぼり
鯉泳ぐ五月の空に着替える
眼に見えぬ絆の糸をたぐりよせ
想い出のアルバムで師の顔と逢う
丸木橋渡つて次の地図を買う
太陽を味方にうれしい芽が覗く
馬鹿は馬鹿なりの性持っている
給食のように夕餉の大家族
風向きにくるりと背を向ける
血の給捨てたい時もある浮世
もめ事の種を丸めて妻の知恵
この辺で折れてみようか姑の意地
祈りつつ織つて祈願の千羽鶴
頑固さの折れた汐時見付からず
砂抱いてシャボテンさんは粗衣粗食
檜山の坂に絆が落ちていた
まだ人に誰とも逢わぬ彼岸花

聴障川柳

稲田

八十路なお私は臍脂の色が好き
売上税黄昏色に染められる
漬物も添えて五色の花弁当
色褪せて我が人生も終りなり
クレヨンに陽の色聞いては一年生
旗色を見てから明日に備えるか
雨色の空にあわててサヨウナラ
初詣で鈴の音色に福もらい
バラ色の人生夢みて娘は果立ち
好きなのは山の緑と空の蒼
姑の目色顔色見て十年
エプロンの白さに妻の色気あり

八十路なお私は臍脂の色が好き
売上税黄昏色に染められる
漬物も添えて五色の花弁当
色褪せて我が人生も終りなり
クレヨンに陽の色聞いては一年生
旗色を見てから明日に備えるか
雨色の空にあわててサヨウナラ
初詣で鈴の音色に福もらい
バラ色の人生夢みて娘は果立ち
好きなのは山の緑と空の蒼
姑の目色顔色見て十年
エプロンの白さに妻の色気あり

八十路なお私は臍脂の色が好き
売上税黄昏色に染められる
漬物も添えて五色の花弁当
色褪せて我が人生も終りなり
クレヨンに陽の色聞いては一年生
旗色を見てから明日に備えるか
雨色の空にあわててサヨウナラ
初詣で鈴の音色に福もらい
バラ色の人生夢みて娘は果立ち
好きなのは山の緑と空の蒼
姑の目色顔色見て十年
エプロンの白さに妻の色気あり

八十路なお私は臍脂の色が好き
売上税黄昏色に染められる
漬物も添えて五色の花弁当
色褪せて我が人生も終りなり
クレヨンに陽の色聞いては一年生
旗色を見てから明日に備えるか
雨色の空にあわててサヨウナラ
初詣で鈴の音色に福もらい
バラ色の人生夢みて娘は果立ち
好きなのは山の緑と空の蒼
姑の目色顔色見て十年
エプロンの白さに妻の色気あり

八十路なお私は臍脂の色が好き
売上税黄昏色に染められる
漬物も添えて五色の花弁当
色褪せて我が人生も終りなり
クレヨンに陽の色聞いては一年生
旗色を見てから明日に備えるか
雨色の空にあわててサヨウナラ
初詣で鈴の音色に福もらい
バラ色の人生夢みて娘は果立ち
好きなのは山の緑と空の蒼
姑の目色顔色見て十年
エプロンの白さに妻の色気あり

YFC川柳会

浅野

房子報

正己

こふゆ

巴子

たけよ

悦江

辰子

理恵

妻子

元江

美代子

玉恵

宮子

辰子

ゆくよ

みずえ

耕花

いさむ

豊作報

豊作

たみ

珍顔

健太郎

八恵子

進一

みつる

和江

文古

一眺

行江

三香

金魚だけ愛して私人嫌い
出目金の空をにらんだ雨模様
お見舞いのメロンに困ると子供言う
出目金が五月の水を謳歌する
川柳ねやがわ
姉妹で孫の話題の長電話
同じ欠点みつけて仲良し嫁姑
連休が終って会社で骨休め
喪が明けて喧嘩相手を恋しがり
ままごと喧嘩も父さん負けている
萬若葉キラキラ明日を励まされ
忙しい人からマメに来る葉書
イヤリング揺れて道連れよう笑う
焦つてはならぬ小石を一つ積む
さよならは言わぬ約束細い雨
アベックの行手に若葉が萌えている
喧嘩して別れた涙の曇り月
もの悲し青葉の笛に子を思ふ
揉め乍ら妻と道連れ五十年
口喧嘩女房に負けてコップ酒
琴坂の静けさ破る禪の鐘
道連れのインターチェンジで揉めている
宇治橋へポーズとつてる蚤夫婦
観光客おえらい坊主におじぎされ
焙じ茶の香りを抜けて平等院
二番目も男でっせと鯉のぼり
道連れに嫁の愚痴まで聞かされる
冷戦三日針の穴から笑い出す
母の日とこっちゃんにされた誕生日
点滴の窓に五月の陽が憎い
金のない道連れだから腕を組む

金魚だけ愛して私人嫌い
出目金の空をにらんだ雨模様
お見舞いのメロンに困ると子供言う
出目金が五月の水を謳歌する
川柳ねやがわ
姉妹で孫の話題の長電話
同じ欠点みつけて仲良し嫁姑
連休が終って会社で骨休め
喪が明けて喧嘩相手を恋しがり
ままごと喧嘩も父さん負けている
萬若葉キラキラ明日を励まされ
忙しい人からマメに来る葉書
イヤリング揺れて道連れよう笑う
焦つてはならぬ小石を一つ積む
さよならは言わぬ約束細い雨
アベックの行手に若葉が萌えている
喧嘩して別れた涙の曇り月
もの悲し青葉の笛に子を思ふ
揉め乍ら妻と道連れ五十年
口喧嘩女房に負けてコップ酒
琴坂の静けさ破る禪の鐘
道連れのインターチェンジで揉めている
宇治橋へポーズとつてる蚤夫婦
観光客おえらい坊主におじぎされ
焙じ茶の香りを抜けて平等院
二番目も男でっせと鯉のぼり
道連れに嫁の愚痴まで聞かされる
冷戦三日針の穴から笑い出す
母の日とこっちゃんにされた誕生日
点滴の窓に五月の陽が憎い
金のない道連れだから腕を組む

金魚だけ愛して私人嫌い
出目金の空をにらんだ雨模様
お見舞いのメロンに困ると子供言う
出目金が五月の水を謳歌する
川柳ねやがわ
姉妹で孫の話題の長電話
同じ欠点みつけて仲良し嫁姑
連休が終って会社で骨休め
喪が明けて喧嘩相手を恋しがり
ままごと喧嘩も父さん負けている
萬若葉キラキラ明日を励まされ
忙しい人からマメに来る葉書
イヤリング揺れて道連れよう笑う
焦つてはならぬ小石を一つ積む
さよならは言わぬ約束細い雨
アベックの行手に若葉が萌えている
喧嘩して別れた涙の曇り月
もの悲し青葉の笛に子を思ふ
揉め乍ら妻と道連れ五十年
口喧嘩女房に負けてコップ酒
琴坂の静けさ破る禪の鐘
道連れのインターチェンジで揉めている
宇治橋へポーズとつてる蚤夫婦
観光客おえらい坊主におじぎされ
焙じ茶の香りを抜けて平等院
二番目も男でっせと鯉のぼり
道連れに嫁の愚痴まで聞かされる
冷戦三日針の穴から笑い出す
母の日とこっちゃんにされた誕生日
点滴の窓に五月の陽が憎い
金のない道連れだから腕を組む

金魚だけ愛して私人嫌い
出目金の空をにらんだ雨模様
お見舞いのメロンに困ると子供言う
出目金が五月の水を謳歌する
川柳ねやがわ
姉妹で孫の話題の長電話
同じ欠点みつけて仲良し嫁姑
連休が終って会社で骨休め
喪が明けて喧嘩相手を恋しがり
ままごと喧嘩も父さん負けている
萬若葉キラキラ明日を励まされ
忙しい人からマメに来る葉書
イヤリング揺れて道連れよう笑う
焦つてはならぬ小石を一つ積む
さよならは言わぬ約束細い雨
アベックの行手に若葉が萌えている
喧嘩して別れた涙の曇り月
もの悲し青葉の笛に子を思ふ
揉め乍ら妻と道連れ五十年
口喧嘩女房に負けてコップ酒
琴坂の静けさ破る禪の鐘
道連れのインターチェンジで揉めている
宇治橋へポーズとつてる蚤夫婦
観光客おえらい坊主におじぎされ
焙じ茶の香りを抜けて平等院
二番目も男でっせと鯉のぼり
道連れに嫁の愚痴まで聞かされる
冷戦三日針の穴から笑い出す
母の日とこっちゃんにされた誕生日
点滴の窓に五月の陽が憎い
金のない道連れだから腕を組む

金魚だけ愛して私人嫌い
出目金の空をにらんだ雨模様
お見舞いのメロンに困ると子供言う
出目金が五月の水を謳歌する
川柳ねやがわ
姉妹で孫の話題の長電話
同じ欠点みつけて仲良し嫁姑
連休が終って会社で骨休め
喪が明けて喧嘩相手を恋しがり
ままごと喧嘩も父さん負けている
萬若葉キラキラ明日を励まされ
忙しい人からマメに来る葉書
イヤリング揺れて道連れよう笑う
焦つてはならぬ小石を一つ積む
さよならは言わぬ約束細い雨
アベックの行手に若葉が萌えている
喧嘩して別れた涙の曇り月
もの悲し青葉の笛に子を思ふ
揉め乍ら妻と道連れ五十年
口喧嘩女房に負けてコップ酒
琴坂の静けさ破る禪の鐘
道連れのインターチェンジで揉めている
宇治橋へポーズとつてる蚤夫婦
観光客おえらい坊主におじぎされ
焙じ茶の香りを抜けて平等院
二番目も男でっせと鯉のぼり
道連れに嫁の愚痴まで聞かされる
冷戦三日針の穴から笑い出す
母の日とこっちゃんにされた誕生日
点滴の窓に五月の陽が憎い
金のない道連れだから腕を組む

金魚だけ愛して私人嫌い
出目金の空をにらんだ雨模様
お見舞いのメロンに困ると子供言う
出目金が五月の水を謳歌する
川柳ねやがわ
姉妹で孫の話題の長電話
同じ欠点みつけて仲良し嫁姑
連休が終って会社で骨休め
喪が明けて喧嘩相手を恋しがり
ままごと喧嘩も父さん負けている
萬若葉キラキラ明日を励まされ
忙しい人からマメに来る葉書
イヤリング揺れて道連れよう笑う
焦つてはならぬ小石を一つ積む
さよならは言わぬ約束細い雨
アベックの行手に若葉が萌えている
喧嘩して別れた涙の曇り月
もの悲し青葉の笛に子を思ふ
揉め乍ら妻と道連れ五十年
口喧嘩女房に負けてコップ酒
琴坂の静けさ破る禪の鐘
道連れのインターチェンジで揉めている
宇治橋へポーズとつてる蚤夫婦
観光客おえらい坊主におじぎされ
焙じ茶の香りを抜けて平等院
二番目も男でっせと鯉のぼり
道連れに嫁の愚痴まで聞かされる
冷戦三日針の穴から笑い出す
母の日とこっちゃんにされた誕生日
点滴の窓に五月の陽が憎い
金のない道連れだから腕を組む

金魚だけ愛して私人嫌い
出目金の空をにらんだ雨模様
お見舞いのメロンに困ると子供言う
出目金が五月の水を謳歌する
川柳ねやがわ
姉妹で孫の話題の長電話
同じ欠点みつけて仲良し嫁姑
連休が終って会社で骨休め
喪が明けて喧嘩相手を恋しがり
ままごと喧嘩も父さん負けている
萬若葉キラキラ明日を励まされ
忙しい人からマメに来る葉書
イヤリング揺れて道連れよう笑う
焦つてはならぬ小石を一つ積む
さよならは言わぬ約束細い雨
アベックの行手に若葉が萌えている
喧嘩して別れた涙の曇り月
もの悲し青葉の笛に子を思ふ
揉め乍ら妻と道連れ五十年
口喧嘩女房に負けてコップ酒
琴坂の静けさ破る禪の鐘
道連れのインターチェンジで揉めている
宇治橋へポーズとつてる蚤夫婦
観光客おえらい坊主におじぎされ
焙じ茶の香りを抜けて平等院
二番目も男でっせと鯉のぼり
道連れに嫁の愚痴まで聞かされる
冷戦三日針の穴から笑い出す
母の日とこっちゃんにされた誕生日
点滴の窓に五月の陽が憎い
金のない道連れだから腕を組む

あやめ

節子

紅葉

房子

千鶴子

なつめ

勇太

曲ん手

杜的

創吾

菜月

静江

あやめ

壺鈍

加留美

電児

卯一

亮光

一芳

琴音

一鬼

とし

花世

波留吉

かすみ

速水

シマ子

淳朗

おさむ

負けた日は阪神ナイン風になる

中

美 幸

こだわりを残したままで屋手する

論子

とても俞央な男を寡黙にする試

建立
一

7 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 及 び 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	3日(金) 午後1時半より 未定・脱ぐ・自由吟	サンシビック尼崎 阪神電車尼崎下車南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水字稲荷247-21 田測定人 句会費 300円 投句料 60円切手 3枚
菜 の 花	10日(金) 夕 6 時より 枕・欲・岸・ゆるい	八尾神社境内西郷会館 2 階 近鉄大飯線八尾駅南西徒歩 5 分 〒581 八尾市弓削町南2-141 飯田悦郎
川 柳 塔 まつえ	11日(土) 午後1時半より 帽子・てきぱき・謎	慈雲寺 松江市和田見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
堺川柳会	11日(土) 午後 1 時より 名前・波・縄・生・謎 南極・斜め	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅下車堺市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑 ※ 夜市川柳大会につき詳細は別掲参照
川 柳 わかやま	12日(日) 午後 1 時より 芸・荒れる・砂	和歌山県民文化会館 4 F 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手 3枚
西宮北口	13日(月) 午後 1 時より 冷房・土・自由吟	西宮市中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口徒歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘 5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 60円切手 4枚
富 柳 会	16日(木) 午後 1 時より 笑顔・干支・縁談	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353 池 森子
高槻川柳 サークル 卯 の 花	16日(木) 午後 1 時より 空席・朗らか・自由吟	高槻市民会館301号室 阪急京都線高槻下車徒歩5分 〒569 高槻市桜ヶ丘北町 3-19 辻 白浜子 句会費 500円 投句料 200円(60円切手 3枚と20円切手 1枚)
南海電鉄 川 柳 会	16日(木) 夕 6 時より ビール・いびき・怒る	南海会館ビル内南海電鉄本社ビル地下食堂 〒542 大阪市南区難波 5 丁目 1 番60号 南海電気鉄道(株)不動産管理部管理課 広井季雄 句会費 無料 投句料 60円切手 1枚
南 大 阪 川 柳 会	19日(日) 夕 6 時より 枝・厳格・整理・出る	寺田町高松会館 JR環状線寺田町裏駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
川 柳 ねやがわ	19日(日) 正午より 長男・考える・行儀・自由吟	寝屋川市立総合センター 4 階 寝屋川市駅下車京阪バス総合センター前下車 〒572 寝屋川市春日町 9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 60円切手 3枚
もくせい 川 柳 会	20日(月) 午後 1 時より 夢・喜ぶ・使う・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曽根下車東南徒歩 5 分 〒561 豊中市島江町1-3、5-801 田中正坊
川 柳 東 大 阪	25日(土) 夕 6 時より 光・傷・眠る・チャンス	東大阪市社会教育センター 2 階 近鉄布施駅北へ 5 分 長堂小学校隣 〒579 東大阪市新池島町 1 丁目 4-14 齊藤光利 句会費 500円 投句料 60円切手 3枚
駒つなぎ 川 柳 会	27日(月) 夕 6 時より 真ん中・ためらい・門限・夏姿	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南口下車 南へ 1 丁 3 筋目左へ駅より歩 3 分 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11 津守柳伸

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円(郵券可)、各題 3句以内

原稿送り先 (〆切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒596 岸和田市荒木町 1-29-1 宮園射月芳

本社7月句会

7月5日に麻生路郎・麻生葭乃
中島生々庵追悼川柳大会を行い
ますので本社7月句会はありません。

(追悼川柳大会の詳細は表紙裏並
びにP66をご覧ください)

川 柳 塔 社

8月の兼題 「空想」「北」
「名刺」「笑う」

8月の本社句会は7日(金)

『夜市川柳』募集

第2回 「灰皿」 大路美幸選

3句・締切 7月末日

第3回 「白」 後藤正子選

締切 8月末日

投句先 〒593 堺市堀上緑町二一九一二

河内天笑方

堺川柳会

九月号発表表 (7月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 栗選
水煙抄(10句)黒川 紫選
愛染帖(3句)橘高 薫風選
課題吟(各題5句以内)
「責任」 安平次 弘道選
「拾う」 浜本 久仁於選
「隣」 高橋 千万子選
★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

十月号発表表 (8月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 栗選
水煙抄(10句)黒川 紫選
愛染帖(3句)橘高 薫風選
課題吟(各題5句以内)
「手紙」 西口 いわゑ選
「壺」 小林 妻子選
「賭ける」 小西 雄々選
★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
★用紙は川柳塔社柳箋を、使用ください。

7月の常任理事会は1日(水)

定価 五百円(送料50円)

半年分 三千二百円(送料共)

一年分 六千三百円(送料共)

昭和六十二年六月二十五日印刷

昭和六十二年七月一日発行

編集兼 西尾 巖

印刷所 藤原 童心社

大阪市阿倍野区三木町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

〒545 発行所 川柳塔社

電話(06)六九一六九一四番

振替口座大阪813336八番

編集後記

☆来る七月五日(日)に、高野山普賢院で、麻生路郎、葭乃両先生、中島生々庵先生、そして川柳塔社創立以後の物語者の法要を営むことは、川柳塔改題以来二十二年、来し方行末を見つめて直す意義の深い、社を挙げたの行事である。

☆路郎先生は情熱の人であった。七月に生まれ(明治21年7月10日)七月にこの世を去られた(昭和40年7月7日)。「川柳は人間陶治の詩」、「いのちある句を創れ」などの語録は今も川柳塔の精神として受け継がれている。

☆葭乃先生は外柔内剛、よく路郎の川柳社会化運動に内助の功を示された。見方によれば、奔馬路郎を乗りこなした名騎手。路郎は葭乃があればこそ巨星としての光を放たれた感が深い。☆両先生に師事した七年は短いようでも長い。晩年の路郎の悲劇的な苦闘ぶりから、私は川柳道の厳しさを教えられた。

☆生々庵先生は、路郎先生亡きあと、多士済々の路郎門下をまとめて川柳塔社の基礎を築かれた。終戦処理の内閣総理大臣とも言えた。そして再起の実はあるのであった。

☆川柳塔同人の物語者は、戸倉善天氏(昭和41年6月)から川口弘生氏(昭和62年2月)まで百八名を数える。すべて「わが川柳道」を歩かれた個性の持ち主であり、川柳塔社の発展に寄与された。

☆磯野いさむ番傘川柳本社、去来川巨城ふあうすと川柳社、小松原爽介時の川柳社、各主幹を迎えての大会は、すでに前夜宿泊の申し込み百二十名に達し、当日の盛會ぶりが予想される。予約のあるなしにかかわらず、七月五日(日)には高野山普賢院へ、お誘い合わせの上、一人でも多くご参加下さい。

先生のお供をして青森県川柳大会に参加したのを想起し、感無量である。(薫)▼「ジュネーブで開かれていた世界保健機関(WHO)総会は十五日、閉幕に当たり、「来年四月七日を、『世界禁煙日』とする」との決議を採択した。」と新聞記事にあった。わたしは昨年の元旦から禁煙している。どの痛率も感じないが、愛煙家にとっては甚だ迷惑なことである。別に盗んで喫っているわけでもないのに、ずいぶん勝手な決議を採択したものである。▼世界保健機関としては、大切な問題だと思うぬでもないが、加盟国民の健康を憂慮するのなら、たばこより自動車もよいのではなかろうか。たばこは健康上悪いが、排気ガスは良いとも思っているのだろうか。たばこの煙から逃げることはできても、走り回る自動車の排気ガスから逃げられないのが実情である。▼思うようにならないのが

世の中の常だ、ぐらいいは承知しているが、何だか弱い者いじめをしているように思えてならない。喫煙者を取締ることはできても、排気ガス発生源の自動車やメーカを徹底して規制することはないだろう。こんな矛盾に誰も非をとえない。

▼防衛費の対GNP比一%枠突破を認めたことに關して「あなた方は、中曽根さんの言いなりになって、アホです」と、居並ぶ閣僚席に向かって怒りを爆発させた青島氏の氣持がわかる。(き)

☆わが家の宗旨は真言宗。高野山は、いわばご本山になるわけだが、性来信心薄く、出不精も手伝って、とんとご縁がない。それが、川柳のおかげで、また高野山へ行けることになった。☆「また」といったのは、過去に一度行ったことがあるのである。昭和四十七年九月二日、三日、どんぐりあすなろ両川柳會合同で一泊吟行を行った。富柳會や南大阪川柳會、それに太

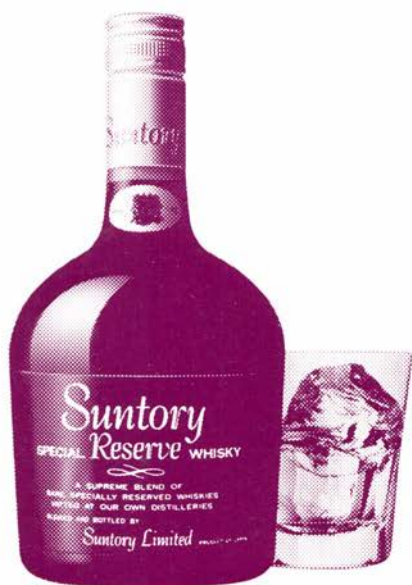
茂津さんの参加も得て總勢三十三名、うち女性十四名「どんぐり」の歴史を飾るといえば大袈裟だが、まことに愉しい吟行であった。☆その時の記録が手許に残っていて、その中に両日の支払い明細が克明に書きつけてある。

例えば、ナンバー「高野山の乗車料金(団体割引)四百六十円。特急座席指定券二百五十円。これは現在の半額以下だ。宿坊で雇ったガイド(男性)のガイド料千五百円というのも安いし二日目の中食を珠数屋佳兵衛という店できり、全員定食で、これが何と三百五十円。

こうした明細を一つ一つ追っていくと、薄れかけた記憶が蘇ってきて懐しい。☆だが一緒に旅をした三十三名の内、いわを、酔々、痴亭、儀一、美代の五氏は故人となつてしまわれた。十五年といはう歳月を改めて思わずにはいられない。☆あれから高野山はどう変わっているのだろうか。

貯蔵は20歳を過ぎてから

サントワイロザーブウイスキー
750ml 33.3° 円標準の全小売価格 製造・販売サントリー株式会社



美しいものは長い時間に磨かれ
ゆつくりゆつくり育まれていきます。
選びぬいたモルトの深さと
豊かなボディが
鍛えられた舌をうならせるリザーブ。
まろやかな一滴一滴から
静かな余韻が生まれていきます。

5つの個性・5つの色味!!

アイスキャンデー

ミルク・アズキ・パイン・チョコ・宇治金時



なんば戎橋筋本店
なんば高島屋百貨店
泉北高島屋百貨店
京都高島屋百貨店
阪神百貨店
松坂屋百貨店
そごう百貨店
京阪モール店

サンストア中之島店
サンストア淀屋橋店
アベノ近鉄百貨店
上本町近鉄百貨店
東大阪近鉄百貨店
奈良近鉄百貨店
京都近鉄百貨店

なんば新川店
虹のまち店
ドーチカ店
南海難波駅店
国鉄大塚駅店
梅田大丸百貨店
堺東店



大阪・なんば



TEL 641-0551